
地獄な少女とその他大勢の日常物語

蜷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄な少女とその他大勢の日常物語

【Nコード】

N3561P

【作者名】

蜷

【あらすじ】

世界って言うのはきつと不思議にあふれている。

僕の目の前にいる彼女だって、それはたいそう不思議な存在だ。なんたって、その身に“地獄”を宿しているのだから――。

とは言え、そんなのは関係なしに、世界って奴は周り続けるわけで。地獄な少女はそんな日常にとけこみ、その日常を物語へと変えてゆく。

美少女分多めでギャグが基本の時たまシリアスな物語。少年少女とロリな妹と巨乳な居候とその他大勢が駆け回る！

まあとにかく、何が言いたいのかと言えば。

非日常的日常の、世界救済系ドタバタラブコメデュー。ここに始まる……………ってことかな？

1日目：プロローグ「事の始まり」

「いたぞ！」

「ちょこまかと逃げやがって！」

「はあっ、はあっ……くっ！」

暗い路地裏で、1人の少女が逃げていた。少女の体は傷だらけで、服も破れて、まさに満身創痍と言ったところだ。

これが悪漢に襲われていると言うのなら、助けを呼ぶために叫んでいるところであろう。しかし、少女にはわかっていて、これは圧倒的に自分に否があるという事を。

なぜなら、自分が生きているだけでみんなが不幸になるのだから。けど、だからと言って死にたいと思う人間など存在しない。だから、逃げる。生を求めてがむしゃらに。

だから――。

「チイツ！さっさと大人しく――がつ！？」

「！？どうし――ぐえっ！」

「えっ――きゃっ！？」

「ふう……あつぶね。間に合ってよかったー……」

——この時自分を救ってくれた少年も、自分の生を奪うつもりなのだと思うのは仕方がなかった。

「っ！このっ——！」

「危ないところだったナぶっ！？」

「このっ！離せ畜生！殺されてたまるか！」

「いだっ！？いててて！こら、暴れるなっつの！」

少年は自分の腕の中で暴れる少女の腕を抑える。すると今度は足が飛んでくることになり、

「離せえ！！」

「ンギョグウツ！？」

男にとっては命の次に大切な部分を蹴り上げられてしまった。拘束の弛んだ隙に、少女は少年から離れようとするが、

「——グレイプニル」

再び、今度は細い紐のような物によって拘束されてしまった。抜け出そうともがくが、一見脆そうに見えるその紐は、全くびくともしなかった。

「くそっ！解けろよ！」

「無駄……だ。その紐は……とある神話のアイテムさ……おふう。どんなに……強い力で、も、それを……うう……引き千切る事は……できないよ……くう……」

そう言つと、若干内股気味に少年は立ち上がり、少女を見下ろす。

「これedyouやく大人しくなつたな……地獄」

「ぐ……………うう……………ふううううう」

終わった。目の前に立つ少年から、もう逃げることはできない。涙が零れ、アスファルトに染みができる。そして眼前に少年の手が迫る。少女がビクリと身を竦ませて目を閉じると——そつと、頭を撫でられた。

「……………?」

そつと目を開けると、少し困つたような笑みを浮かべる少年と目があつた。

「泣くなつて。君は人の話を少しは聞きなさい」

「わたしを……………殺さないのか?」

「こんな小さい女の子を殺せるほど、僕は落ちぶれちゃいないよ」
すると少年はヒョイツと少女を抱え上げた。いわゆるお姫様抱っこ
こというやつだ。

「……………わたしを、これからどうするつもりだ?」

「あれれ、反応なし?……………んー、どうしよう。まずは傷の手当て
かな?」

「……………殺さ、ないのか？」

「さっきも言ったでしょうに。大丈夫。君が望まない限り、殺さない。君を死なせはしない。……………前の地獄との、約束だしね」

「……………？」

少年は少し悲しそうな顔をして、ぽつりと最後に何かを呟いたが、少女には聞き取れなかった。

しかし、すぐに笑顔を浮かべると少女に言った。

「さて、それじゃあ行きましょうか」

「いくつて……………どこに？」

「少し騒がしくて賑やかで、それでいて楽しい日常ってやつに……………かな？」

この時、少年の言っていることはよくわからなかったが、少女はこの時、地獄になって初めて安心と言うものを味わった。

それは少し暖かくて、優しく……………眠たくなるものだった。

「そつ……………か……………」

「うん。だから今は、ゆっくりお休み」

「……………ん。……………すー、すー……………」

この時少年は、初めてこの少女の笑顔を見た。

それはそれは、たいそう幸せそうな寝顔だったとか。

「……………さてと」

少年は少女を起こさぬよう、ゆっくりと暗い路地を歩いてゆく。

「あ……………気絶させた人達……………どうしよう」

ま、事後処理はほとけは勝手にやってくれるだろう。と思い、少年は男達を放置することに決めた。

「さ、帰ろう」

これが始まりの物語。

始まりを始める物語。

地獄な少女の、賑やかな日常のためのプロローグ。

だから、次に少女が目覚めたときが、この物語の幕開けとなるのだが……………まあその時まで。

お休みなさい。良い夢を。

1日目：プロローグ＝事の始まり（後書き）

お久しぶりの方お久しぶりです。蜷^{しじみ}です
地獄な、再スタートにございます。

皆さんの心の中に残るような作品に仕上げたいと思っています。
どうぞ、よろしくお願いします。

と言うわけで、これから地獄な少女とその他大勢の日常物語を
よろしく願います。

うん、タイトルなげえ。

2日目：地獄な少女

事実は小説より奇なり。とは、誰の言葉だったろうか。まあとにかく、僕がなにが言いたいのかと言えば、世の中は不思議に溢れているよ、と言うことだ。

今僕の目の前に横たわっている金髪の女の子なんか、そんな不思議の一つである。

この世界は、適度な争乱と適度な混沌と適度な絶望と適度な不幸が存在して、適度な平和と適度な秩序と適度な希望と適度な幸運が共存している。何のこっちゃわからない？大丈夫、僕もよくわかっていない。

まあとにかく。

この目の前にいる少女は、この世界に存在する争乱と混沌と絶望と不幸の体現と言っていいような存在である。

さらによくわからない？まあなんだ。ざっくりと言ってしまえば――。

地獄、である。

……………ん？よけいにわからないって？ふむ、そうだな。ええと、なんだ。つまり――この世界で、最も疎まれている存在ってことだ。

「う……………ん」

少女が目を覚ました。地獄と言う存在であると言うことを知らしめる、紅の瞳が露わになる。

「おう。おはよう」

「あ……………だっ、誰だっ？」

「怯えないで……………つてのは無理だっっていうのは知ってるから、とりあえず落ち着いてくれるか？」

すると少女は布団から抜け出し、その布団を一枚挟んだ対面に移動した。

怖がっているというのはわかるが、こつもあからさまにやられると少しばかり傷つくなあ……………。

まあ、理由はわかるんだけど。

「……………お前は被師はいつしだよな？」

僕が被師であること。

それが彼女——地獄が僕を恐れる理由である。

「その通り、僕は被師だけど……………それが何か問題でも？」

「おおありだ！何故、お前は私を助けたんだ！」

「まあ確かに、寝首をかくチャンスはいくらでもあったね」

その発言に、少女は更に僕から後退した。
やべ、怖がらせちった。

「ごめんごめん。冗談だ、冗談。頼むからこれ以上僕に怯えないでくれ。意外と傷つく」

しかし少女はむつつりとしたまま、

「…………信用できるか」

と言った。

何気ない言葉だが、この子の信用できないという言葉には、長い経験を経た上での重みがある。

地獄であるが故に受けた、欺きや裏切りから来る、重みが。

「ごめんな。さっきの発言については全面的に僕が悪かった。冗談でも、言ってはいけないことだった」

僕は素直に頭を下げ、謝罪する。

少女も多少訝しげな表現を浮かべながらも、元の位置まで戻ってきてくれた。

とは言え、1mほどの距離があるんだけどね。

「それで、何で君を助けたか、だったよね？」

「…………ん。正直、命を救ってくれたことに対しては、その……………感謝はしてる。けど、なんで被師であるお前が身を挺してまでわたしを助けるのが理解できない」

「ん……………そうだねえ……………。簡単に言うとなると、個人的なエゴ、かな？」

「…………その程度のこととて、わたしを助けて良かったのか？」

「むしろ、被師としての使命をかなぐり捨ててもやらなくちゃいけないこと何だけどね。僕としては、ただ」

しかし少女は、やはり意味が分からないと言ったように首を傾げる。

「ま、そんな事はどうでもいいとして」

僕は勢いよく立ち上がり、少女を見下ろす。

その視線に怯えるように少し後ずさった少女に、僕はできるだけ優しい笑みを浮かべて手をさしのべる。

「付いてきてくれ。君に説明しなくちゃいけないことが沢山あるんだ」

すると少女は僕の手と顔を一瞥し、ふん、と鼻を鳴らして自力で立ち上がった。

僕は苦笑を浮かべて手を引っ込めると、きびすを返して部屋の入り口へと向かうのだった。



「そう言えば、怪我はもう大丈夫？」

「は？怪我？」

階段を下りながら、僕は数日前に負った怪我の具合を聞いた。

「そ。まあ、僕が治癒させたから多分あり得ないと思うけど、治ってなかったりしたらまた治療し直さなきゃいけないからさ」

すると少女はジャージの上から（服がボロボロだったので着替え

させた）体をペタペタ触ったり、間接を動かしたりして調子を確認する。

「……………特に、問題がある部分はないな。あると言えば——」

と、言いかけたところでくう。

と、かわいらしい音が少女の下腹部から聞こえてきた。

「……………ああ、腹が減ったと」

「み、みなまで言うな馬鹿！」

「いてっ！？た、叩くことないだろ？」

「ふん！」

それっきり、少女はそっぽを向いてしまった。目を合わせようともしてくれない。

まあでも、腹が減っているって事はそれなりに元気だと言うことだろう。ろくに眠れてなかったみたいだし、むしろ僕は少女の様子に安心した。

「ま、夜食でも作るから食べながらこっちの話でも聞いてくれればいいよ」

「だからいちいち言うなバーカ！」

「ふっ！？」

階段から蹴り落とされ、僕はしたたか全身を打ちつけた。

幸い大事には至らなかったが…… ツッコミを入れるときは手加減くらいして欲しいものだ。

まあそれは良いとして、僕らは目的地である居間の前に到着した。そして、居間の扉を開けると、

「あ、お兄様」

身長110センチの小学生くらいの女の子がいた。

「おう、咲。^{さき}悪いけどこの子にお茶入れてくれる？ 棚に来客用のお茶っ葉があったべ？ その間に僕は何か軽食でも作るから」

「かしこまりました。では、すぐにお茶をお煎れしますから、どうぞこちらに座って下さい」

「え、あ、ああ……？」

少女は、この小学生とは思えない落ち着いた様子にだいぶ戸惑っているようだ。

この女の子の名前は、^{はてのえき}終着駅 咲。こう見えても、立派な中学二年生で僕の妹だ。

「どうぞ」

「あ………ありがとうございます………咲さん」

「いえいえ、お気になさらずに。それと、私に対して敬語は無用です。気軽に咲、とも呼んで下さい」

「あ、はい……いや、うん」

うん。やっぱり色々と戸惑うよね。初対面だと尚更。

「あ、ところで咲。父さんと絵理えりは？」

「お父様はトイレです。絵理ちゃんも——」

「呼ばれて飛び出てジャジャジャーンなのです！」

「うおわっ！？びっくりしたー……」

「——お兄様の背後です」

気配がなかったので非常にびびった。

ええと、この子は十っなし 絵理。咲と同じく中学二年生の女の子である。

しかし、咲とは違い身長も平均的な中学生の身長よりも少し高め
で、中学生とは思えないほど発育のよろしい物をお持ちです。

「ちょうどいいや。絵理、あの子にこの炒飯持ってたげて」

「了解なのです！」

そして、絵理は彼女に炒飯を持っていく。

「どうぞ」

「えと………ありがとう、絵理、さん？」

「あ、ボクのこと呼び捨てタメ口で平気なのです」

「そうそう。僕の事も呼び捨てでいいぞ。まあ、僕の場合すでにタメ口だけだ」

「五月蠅い。お前は黙れ」

そりゃあ手厳しいなあオイ。

「……………ところで、お前はなんて名前なんだ？」

「は？」

「は？じゃないだろ。お前の名前、わたしはまだ聞いていないんだが？」

「ありゃ、そうだったっけか？」

「お兄様、初対面の方にはまず名前を名乗る癖を付けましょう」

「そうですよ」

「いや、もう名乗ってるつもりだったんだ。会話自体は成立してたし……………」

まあ仕方ない。自己紹介でもしようか。

「僕は終着駅 閉^{おわり}。咲達みたいに呼び捨てでかまわない。よろしく」

「……………閉か。変わった名前だな」

「よく言われるよ……。で、だ」

僕は姿勢を正し、少女を正面から見ると。炒飯を食べようとしたところで、少女は固まり、僕の方をみた。

「……………なんだよ」

「いや、君の名前」

「……………名前？」

「そぞ。まだ教えてもらってなかっただろ？だから教えてくれ」

すると少女はスプーンを置き、顔を伏せた。そして暫くしてから顔を上げ、口を開く。

「わたしの、名前は——」

と、言いかけたところで、

「ヘル……………だろう？お嬢さん」

少し洪めの男の声が聞こえてきた。
この声は——。

「あ、お父さきやあああああああ——！」
「ああ春といやあああああああ——！」

「ん？どうし変態だあああああああ！！」

「えっ、ちょっ、なんで？」

「父さん、とりあえずズボン穿こうか」

「……………おお、どうりでスースーするわけだ」

気づけよ。ズボン穿いてないことくらい。パンツは穿いてたから
かろうじて助かったけどさ。いや、駄目だけど。色々だめなんだ
けど。

えー、今いそいそとズボンをはいている変態は終着駅 春人^{はるひと}と言
いまして、恥ずかしながら僕の父親です。

少々抜けているところがあつたりしますが、雑貨屋を営^営営してい
て結構繁盛しています。

「それより。父さん、ヘルって何なのさ。そんなのが名前なわけな
いだろ？」

「んー、ところがどっこい違^{ちが}うんだよなあ……………なあお嬢さん。そ
うだろうっ？」

「……………ああ。そこの変態の言^いうとおりだ」

父さんはどうやら変態に降格したらしいです。まあそれはいいと
して、

「わたしの本当の名前は——わからないんだ」

地獄な少女——ヘルは、どうやら相当複雑な事情があるようだった。

2日目：地獄な少女（後書き）

とりあえず、2話目読了感謝です。

書き置きが存在する限り連投するつもりなので、よろしく願います。

まあ、四話目くらいまでしかできてませんけどね。

その後は不定期になるやもしれませんのでその辺はよろしく願います。

それでは、これから地獄な少女とその他大勢の日常物語をよろしく願います。

あー、タイトルなげえ。

ではまた。

3日目：彼女の名前と僕の意志

ざぶざぶと、少女——ヘルが炒飯を食べていた皿を洗う。キツチン越しに、沈黙している家族達が見える。

父さんとヘルの説明では、どうやら地獄の宿主は、地獄になる前の記憶はほとんど消えるらしい。

「まあ、詳しいことはわからないが、どうやら地獄ってのはそういうシステムらしい」

「なんでかは分からないけど……だだ、誰かへの憎しみと、恐怖とだけが渦巻いて……凄く、苦しい。……そして、ヘルっていう名前。それだけが、がんがんと頭に響いて……気持ち悪かった」

数年もしたら慣れたけどね、と、最後に付け足す。

皿を洗いながら、僕はその数年に思いを馳せる。

もといた場所も、名前も、家族のことも、友達のことも忘れてしまっ

十歳にもみたくない少女にとって、それはとてつもない苦痛だっただろう。しかも、その時から被師連中に狙われはじめ、表には顔を出せなくなる。

人と疎遠になり、悪意とふれあっていれば人間が、僕の事が恐ろしくなるのも頷ける。

(……………時間をかけて、ゆっくり接していくしかないのかな……………)

彼女にとって、この家に留まることさえ心身ともに緊張ですり減らしているようなものだ。

こればかりは、ゆつくりと心をとき解していかなば。
僕は皿の水気をとばして、布巾で残った水滴を拭き取り棚に仕舞った。そして、みんなのいるテーブルに戻ると、

「第2回！」

「我が家に転がり込んできた地獄の宿主ちゃんに名前を付けちゃおうぜ大会in終着駅家ー！」

「「いえーい！！」」

意外と早速打ち解け始めていた。

「杞憂………僕の心配が杞憂に終わった………」

「ま、まあ………い、いつまでも怯えてたら生きていけないしな」

「そっかぁ………」

じゃあなんで僕と目が合ったびにビクビクするのさ。

「これは武者震い」

「別に君と戦う気はありません」

「じゃあ痙攣だ」

「じゃあ救急車呼ばうか？」

僕の心が折れそうです。

「まあ閉もお嬢さんもそれくらいにして、一緒に名前を考えるぞ？」

「そうですよ。出掛けたときにヘルだなんて呼んだりしたら、同業者にバレてしまいます」

「なのです」

いや、名前変えたくらいじゃ駄目だろ。

「まあ、実際は戸籍を偽装する上で名前が必要なだけなんだけどな」

「はいそこ父親が犯罪行為をさらっと口にしない」

「だが、父さんの場合バレるような事は100%あり得ないぞ？」

「まあ、あんたはそういうのが仕事ですからね！」

父さんの仕事。

別にハッキングとかの犯罪行為で儲けているとかそんなのではない。

情報操作や事後処理などが、父さんの被師としての仕事である、と言っことだ。

ちなみに父さん曰く、世界の全権を掌握するくらい2分と7秒あれば十分、だそうな。カップめん作るついでに世界征服とかマジ勘弁。

「んで、なんかいい名前でもあるの？」

「馬鹿野郎。無いから大会なんか開いたんじゃないか。ふざけてる

のか？」

いや、どちらかというとなんな軽いノリで人の名前決めようとしているあんたらのが、よっぽどふざけてるように見えるのだが。

「春人さーん！できましたですー！」

「ほう、どんなのを思いついたんだ？」

すると、絵理はえへんと豊満な胸を張り、自信たつぷりに言い放った。

「ミケ」

「猫じゃないからね！？拾ってきたのは確かだけど、この子は断じて猫とかの愛玩動物じゃないからね！？」

僕はここぞとばかりにツツコンだ。

「ミケランジェロの、ミケ」

「そいつ男じゃん！画家でもないし！」

「じゃあ、間をとってジェロ」

「歌手になっちゃった！歌手になっちゃったよ！！しかも間をとれてない！」

「あー………だめですかー………」

「駄目！」

「悪いな絵理。わたしもちょっと流石にそれは……………」

ツツコムのも疲れるし。

朝会う時に、女の子に対して『ようジェロ、おはよう』と言つとか想像するだけでシユール過ぎて笑えんわ。

って言うかヘルさん、ちょっとなのか、ちょっと。

「じゃあ次、私が行きます」

「おう咲。良い名前を頼む」

「個人的にツツコミどころのない名前をお願いします……………」

すると咲は何やら小さくした打ちをした。え、何？ボケるつもりだったの？

そして、咲は静かに言った。

「パブロ・ディエゴ・ホセー・フランシスコ・デ・パウラ・ホアン・ネポムセーノ・マリア・デ・ロス・レメディオス・クリスピーン・クリスピアーノ、デ・ラ・サンティシマ・トリニダード・ルイス・イ・ジェロ」

「ピーカーソ！！それ最後ピカソ！！最後の三文字自重して！？何でそこでジェロが出てくるの！？」

「嫌がりつつもしっかりツツコンで下さるお兄様。流石です」

「うるさいよー！」

「そして閉、名前の長さについてはスルーなのか？」

「確かにそれもだけど！寿限無並みの長さだけど！」

「あー、じゅげむじゅげむごころのすりきれかいじやりすいぎよの——」

「言わんで良い、言わんで良い」

どうしよう。むしろ絵理のときよりツッコミを入れた気がする。
名前は一つなはずなのに。
さらに次は——。

「次は俺だな」

——父さん。コイツは油断できん。僕は集中して父さんの言う名前を聞き取り始めた。

「小毬、鈴、唯湖、美魚、沙耶、葉留佳、佳奈多、佐々美……と、クド——は、流石にないか……。まあ、さっきあげた奴のどれが良いかな？」

「わぁ………いい感じの名前ばかりだな………」

………確かにありそうだ。だが——。

「………本当にそうだと言える？」

「………何が言いたいんだ？」

「そつだぞ閉。かわいらしい名前ばかりじゃないか」

「確かに、確かに咲や絵理と比べりゃ数段ましなのは認めよう。だが――」

と、ここで僕は全力で息を吸い込んで――。

「全部ギヤルゲのヒロインじゃないか！！」

「そつだな。その何が悪い？」

「ゲームキャラの名前付けるとか痛すぎるだが！」

「元ネタ分かなきゃバレへんバレへん」

「そつだぞ。佐々美とか響きが可愛いし良くないか？」

「ダメです。今回ばかりはヘルさんの意志を無視して全て却下をお願いします」

周りみんなええー………とか言っているが、うるせえ。無視だ。

「……………そんなに言うなら、お兄様はどうなんですか？」

「うえ？僕？」

「そうですよ閉さん。ボクたちの案をことごとく蹴落としたですから、閉さんが決めてくださいです！」

「そうだ閉。おまえが決めろ」

うあ……。なんか全面的に僕が悪いみたいな空気に……。ここぞとばかりにボケたこいつらが悪いのに。

僕はため息をつき、ヘルを見る。

ヘルはビクツとしたあと肩を縮こまらせた。てか、まだ僕のこと
は怖いんかい。

「ふむ……………」

「な、なんだ、よ……………」

一つ、心に浮かぶ名前があった。

けど、この名前は……………駄目だ。なら、どうしよう……………あ。

そうだ。あの人の名前だったあの字と、僕の願いである一文字を
あわせよう。

僕の願いは——。

「……………初陽^{はつひ}」

「え？」

「だから、初陽だって。最初の初に、太陽の陽で、初陽」

場に、妙な沈黙が降りる。

な、なんだ。別に変な名前じゃなかっただろ？

「…………お兄様だけまともだなんて、つまりません」

「いやいや、つまり、つまらないの問題ではないでしょう」

「まあ閉さんはツツコミですし、荷が重かったのですよ」

「絵理、お前は本当に何を言っているんだ」

「まあでも良いんじゃないか？……………ゲームとかに出てきそうで」

「父さん。僕はあなたを説教しなくてはいけないようだ」

「なんだってんだい、うちの家族は。賛成なのか反対なのかはつきりしやがれ馬鹿野郎。」

しかし、ヘルは。

「…………別に、それでいい。響きが綺麗だ」

「…………そ。気に入ってくれて何よりだ」

「き、気に入ってなど無い！他のよりは、まあまともだから、それでいいってだけだ」

とかまあ何とか言いつつ、賛成してくれた。

他の三人も、ヘルが気に入ったのならと、結局賛成してくれた。そしてやっぱり気に入ってない！響きが綺麗からだ！と、頑なに気に入ったことを否定はしていたが。

「ま、いいさ。とりあえず、今日からお前は初陽だ。いいな？」

「…………ふん」

鼻を鳴らしてはいたが、なぜか少し嬉しそうだったので、僕はツコムことはしないでおいた。

「さて、んじゃあ俺は戸籍の偽装作業にはいるから、今日はもう遅いしみんなはゆつくり休め」

そう言われて時計を見れば、短針がもう12時を少し越していた。

「ふぁ…………。どうりで眠くなる訳なのです」

「そうですね。明日…………と言つよりもう今日のことですが、学校がありますし、早く寝ましょう」

「そうだな。父さん、お休み」

「……………」

「おう、みんなお休み」

そして僕らは各自、部屋に戻るのだった。

□ ■ □ ■ □

とは言え、ヘル——初陽には部屋がないので、さっきまで寝かせていた客室に案内した。

「今日からここがおまえの部屋な。右隣が咲の部屋で、さらにその

隣は絵理の部屋だから、なんかあったらそっちに頼む」

「……………わかった」

うーん……………やっぱり怖がられてるよなー……………。

被師だからってのもそうだけどさー……………。でもやっぱり避けられるってのは……………なんか、嫌だ。

なら、せめて言うておこう。

「初陽……………いや、ヘル《・・》」

僕は、彼女の本質に語りかける。

「君が被師を、僕を恐れている。だけど……………僕は違っつて事を信じて欲しい」

「……………それは、無理だ」

彼女の口から出たのは、否定だった。

「わたしは、何年と人に追われて生きてきた。わたしを狙うものなんて……………人間なんて、信用できない。……………本当は、あの三人だつて怖かった。殺されるんじゃないかって、思ってた」

ヘル表情が陰る。

やっぱり、この子は信用という言葉の重みが普通の人より重い枷となっている。

でも、だったら。

「だったら、今は信用しなくていい。今は……………見ていてくれ。」

僕が……信用に足りる人間かどうかを」

これが、僕の僕としての意地だった。
信用は、勝ち取ることができる。なら僕は、彼女が信用できる人間になってやろう。

「…………ふん。なら、せいぜい頑張ればいい」

「ああ。全力で頑張らせていただくよ」

そして僕は、手を差し出す。

ヘルは一瞬たじろいだが、僕の意思が伝わると、自分の手と僕の手を交互に見やり、恐る恐る手を伸ばした。

しかし、僕の手に触るかさわないかのところで引つ込められそうになり——僕はその逃げだそうとした手を自分から繋いだ。

「——ッ！いい、いや——！！」

不意のことに、ヘルは叫びそうになる。が、僕は決意を込めた瞳でヘルを見つめ、決意を口にする。

「…………絶対、君を守から」

そして僕は手を離れた。

「んじゃ、お休み初陽。寝坊するなよ？」

「う、五月蠅いこの馬鹿！バーカ！！」

少し涙目で怒る初陽に笑いかけ、僕は自分の部屋に戻った。

そしてベッドに転がり目をつむると、初陽の体温が思い出される。

「……………冷たい、な」

あれが、初陽が感じた恐怖の温度。よく冷たいと言われる僕の手でさえ冷たいと思わせるくらい、初陽の手は……………ヘルの手は、冷えきっていた。

僕は右手を胸に当て、もう一度呟く。

「……………今度は、絶対に守るんだ……………あの約束と、あの女の子を……………」

そして僕の意識は闇に沈んだ。

手を取られたとき、本当に驚いたと同時に、凄く怖かった。あのまま捕まって、殺されてしまうのではないかと本気で思ったりしたけれど、あの男の目を見てわかった。

——ああ、この人はわたしと同じなんだな——って。

ただ、決定的に違うのは、彼は他人が信じられないんじゃないじゃなくて、自分という人間が信じられないところだ。

「……………なにがあったって言うんだよ、あいつ」

自分という名の人間不信。

他人という名の人間不信。

信じられないものが人間でも、ここまでも決定的に違うものは珍

しい。

けど、でも、だからかもしれない。

「冷たかったけど……暖かった、な……」

久しぶりに、人の感情と言うものとふれあえた気がした。

あの、強い決意が込められた、あの瞳が……ひどく暖かった。
あの時助けられたような安心感、安堵感が、心いっぱい広がってゆく。

「何なんだよ、これ……」

けれど……悪くはない。

わたしは知らず知らずのうちに目を瞑り、まどろみの世界へと旅立っていった。

4日目：初登校に伴う様々な問題

朝、馬田乃学園高等部二年E組の教室は静まり返っていた。教壇にはその原因である人物が、金色のサイドポニーテールを揺らして立っている。

そしてその口から一言、その言葉が発せられた。

「終着駅 初陽だ………よ、よろしく………」

本日、うちのクラスに初陽が編入することになった。



事の発端であろう………と云うか、まあ昨日の時点で父さんの中では決定事項だったのだろうが、今朝の出来事。

「初陽ちゃんを学校に行かせるぞ」

父さんはそんな事を言った。

「学校？」

「そそ。行きたくない？学校」

「行きたくない」

二つ返事で断られた。

「ってちよつとちよつとちよつとお！？お嬢さん冷たくありませんこと！？」

うわ、珍しい。父さんがツツコンでる。

「まあそんなことは置いといて。初陽、何で行きたくないの？」

僕は朝ご飯の用意をしつつ、僕は理由を聞いてみた。
しかし初陽は俯いて、

「だって……………学校、人がいっぱい怖いし……………」

そうだった。

絶え間ない逃亡生活の末、初陽は人間不信になっているのであった。

そして、どうやら人と接することが極端になくなったため、同時に対人恐怖症も誘発しているらしい。難儀な。

「でも……………楽しいですよ？学校……………」

「そうなのです。給食もおいしいですよ？初陽ちゃん」

「いや、学校は給食だけじゃないだろ」

「それに制服もかわいいんだぞ？」

すると父さんは咲を立たせて中等部の制服を見せつけた。
ピンク色のワンピースタイプのセーラー服で、襟元には白いスカ

「フがあしらわれており何ともかわいらしかった。
しかし……………」

「わたし、そういうのよく分かんないし……………」

そう呟いてトーストをかじる初陽は、確かに本当に興味なさげだった。

「でも、懂れたりはしませんですか？」

「……………それは……………」

初陽の様子からすると、実際は学校に行ってみたりしたいのだろう。

それに初陽はまだ中学生くらいだ。知的好奇心とかその辺が満たしたくて有り余ってるくらいの年頃なんじゃ無かろうか。

まあ、僕はそんな事無かったけど。

「ほらほら、正直に言ってみましょうなのです！行きたいですよ
！行きたいですよね！？」

「……………でも」

「初陽さん、まだ中学生くらいの年齢でしょう？なら、義務教育期間ですし、行きたいと思うのは普通ですし、無理矢理にでも行かなければいけませんよ？」

「……………う……………まあ、行きたいと思わないこともない」

「つまり行きたいって事だよな？」

すると初陽はようやく首を縦に振った。

「でも、行くとしたら人がいない時じゃないと発狂する」

「人いなかったら学校じゃないから。たくさんの部屋がある建物としか言えないから」

だけど、初陽が言うことはもつともだ。人目を忍んで一人で生きてきた人に、急に人にまみれたところで生活し始めると言われたら、確実に発狂するだろう。

「なら、ボクたちがずっと一緒にいますです。それなら怖くないですよ！」

「そうですね。サポートもしやすいですし」

「……………」

それでも駄目、か。

まあ、昨日あの3人も怖いって言っていたしな。

世話はできても……………安心することはできないだろう。

「ん……………。これも駄目となると、初陽お嬢さんは昼間一人でここに残ることになるよ？」

「別にいい。むしろその方が気が楽だ」

これも本当。

だが……………このままだと引きこもりになってしまふ。どうにかな

らないか。

「初陽。だったら午前中だけでも学校に行ってみないか？様子見みたいな感じでさ。行けそうだったら行けばいいし、無理っぽそうなら僕らはもう、無理に行けとは言わないからさ」

僕の、できる限りの妥協案。

これで学校の楽しさが分かってくれれば、これからも学校に通うことになる——まではいいかないかもしれないが、学校に行くことを考えてくれるかもしれない。

失敗したら……その時は、その時だけど。

「ん……そう言う事なら」

この提案を初陽は了承してくれた。

僕は内心小さくガッツポーズした。しかし、

「だが、じよ、条件が、ある」

初陽がそんな事をのたまった。

「条件？」

「条件って、何です？」

「ああ、それは——」



と、言うわけで、冒頭のあれに戻るわけだ。

なぜか知らんが、初陽は絵理や咲のクラスに編入するのではなく、僕のクラスに編入するのであれば行ってやらんこともない、と言ったのだ。

意味が分からん。なぜ僕が？

まあ、昨日絶対を守る発言しましたけど、女子生徒の日常なんかよく分からんし何から守るのかはわかりませんよ？

「……………では、初陽の席が無いので、閉、初陽に席を譲って、お前は、今日一日空気椅子」

「はいはい……………」

席を空けて、空気に着席。あ、教科書類どこに入れよう。

「ってまてやあ！」

「……………ナイス、ノリツツコミ」

クラスのみんなが失笑する。まあ、こんなもんだよね、普通。

「……………冗談。初陽は、閉の隣の席がなぜか都合よく余っているから、そこに、座って」

「お、おう……………」

そして初陽は、いそいそと僕の隣の席に歩いてきた。

しっかし……………。すげえな。隣を通った男共がみんな初陽を目で追ってるよ。

だが、わからないこともない。まだまだあどけなさの残る顔は、それでもきつと十中八九が認めるであろう美少女だ。サイドに纏めた、腰まである長い金髪は絹糸のように細くて綺麗だ。少しサイズの合っていない高等部のブレザータイプの制服は、それでも逆に初陽の幼さが推されて、可愛らしさを引き立たせている。

そして、珍しいというか、普通は有り得ることのないルビーのような紅の瞳。少しつり目気味のそれは本当に目が奪われるほどに綺麗だった。

そしてようやく、初陽が隣の席に着く。

「……………怖かった」

「お疲れ様」

「特にあのわたしの隣に立ってた人。威圧感が凄いんだが……………」

「あー、ねじって子子子子先生ねー」

2・E担当担任教師、子子子子 ねこみ子子美先生。

通称猫先生。猫耳のように見えるリボンと猫の尻尾みたいなポニテール、猫のような切れ長な瞳がチャームポイントな美人教師。

ただ、残念なほど無表情。ちなみに、怒ると殺気が凄いよ。心臓が弱い生徒が殺気にあてられただけで心臓が停止したとか。

「ま、変わり者だけど良い人だよ。中身は」

「……………中身は、なのか」

「——……………と、言うわけで、これで、連絡は以上、です。委員長、号令……………」

「起立、礼——」

と言うわけで、特に問題が起こることもなく、朝のHRが終了した。



休み時間。初陽に次の授業に使う教科書を、適度な距離間を保って教えていると、

「おつすー閉。転校生ちゃんを独り占めとはずるいぞ俺を混ぜろ！」

イケメンが僕に声をかけてきた。

初陽はびくうつと肩を縮こまらせて、そのイケメンの方を向く。

このイケメンは、ふみし二三四 はじめ—と言う。

まあなんだ。とりあえず、スタイルとかも良いし女の子にもそこそこもてていたりする僕の友人である。

んで、このイケメンが何故、そこそこしかモテないのかというと、

「ところで初陽ちゃんって何色のパンツ穿いてんの？（スカートに手を伸ばす）」

「まずお前はどこかに脱ぎ捨ててきた羞恥心というものを身に着ける！」

「いぶあ—？」

まあなんだ。

セクハラとか大好きなんだよなあ。イケメンだから通報とかはされないけど。ムカつく。チーズバーガー持ってこい。

歩く18禁、生きた公然猥褻物、ナンバーワンセクシャルハラスメンターとは彼のことだ。

そして、

「全く……いつまで経っても学習というものをせんのう二三四は」

「留守^{るす}。いい加減コイツには鎖が必要だとは思わないか？」

「美女に束縛されるのであれば本望だつつつ!!」

「残念、お前を拘束するのはコイツです」

「俺にそっちのけはない。すまん」

「あんずるがよい。儂にもそんな趣味趣向はないので」

この爺言葉でしゃべっているは家出^{いえで} 留守。

これで見た目が何故か美少女——とかであれば、まだ救いようがあったものを、神は何をしようとしたのか、見た目もまんま爺……

……いや、オッサンである。推定48、7くらいなのである。本当に残念なのである。

「んで、俺はお前に少しばかり質問なんだが」

「なんだ二三四。セクハラに抵触することならば、僕は容赦なく三つの数字を押さなければならなくなるぞ」

「どれだけ信用ねえんだよ!！」

そんだけだろ。

「お前初陽ちゃんの名字!どう言うことだよ!」

「どういうことって……そう言うことだ」

「まさかお前、また絵理ちゃんみたいに初陽ちゃんに手を出し——」

「あ、すいません、パトカー一台お願いします。ええ、先日の下着泥棒の件で」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

いやあ、人の弱みを握るのは楽しいなあ。

「閉よ。ぬしの顔の方が犯罪者の様になっておるぞ」

「やべ、いけねっ」

と言うところで、授業の開始を告げるチャイムが鳴った。
留守と二三四はそそくさと席に戻る。

「……………さっきの奴らは?」

「ん?あ、ああ。二三四と留守って言う僕の友達」

「そ、そうか……」

「……大丈夫か？顔色悪いぞ？」

「いや、問題ない。大、丈夫だ……」

しかし初陽の顔色は悪く、もともと白かった肌からさらに色が抜けている。とても大丈夫には見えない。

よく見れば、手が小刻みに震えている。

「やっぱり、怖いかな？」

⌈
⋮
⌋

こくりと、小さくうなづく。

僕は溜息をついて——初陽の手を握った。

「ツ!!!?!!?!?」

おお、すげえ。顔色が赤くなったり青くなったりしている。信号
みたい。

「な、
な
な
な
なん
な
なにを？！」

「大丈夫だって。あいつらは別に敵なんかじゃない。むしろ、今までのお前にはいなかった友達になれるかもしれない普通の人間だよ。だから、大丈夫」

すると、初陽の震えが止まり、顔色も少し桜色が差した血色の良
い顔になった。

「どう？落ち着いた？」

「……………うっさい、バーカ」

手を振り払い、そつぽをむく初陽。そんな姿に苦笑をこぼしていると、氷柱のような冷たい殺気が体中を突き刺した。

恐る恐る前を見ると、背後に『ゴゴゴゴゴ』とでも付けたくなるほどの怒気をまとった子子子子先生の姿が。

「……………。おいお前、あれはヤバいんじゃない？」

「……………ヤバいどころか、命の危機デス」

「……………閉、ちょっと表に出ろ」

ああ、G o o d - b y e m y l i f e。

□ ■ □ ■ □

放課後、校門前——。

1時間目に少し血を見ることになった以外、特に問題は起こらなかった。

休み時間や昼休みと言った時間に、ちよくちよく遊びに来る二三
四や留守にびくったり、廊下で声をかけてくる生徒にびくったりし
ながらも、なんとか今日一日を乗り越えることができたのだった。

「お疲れ様、初陽。どうだった？」

「…………早く帰って一人になりたい」

「…………咲達が来るまでもう少し我慢なさい」

「うぁー……………」

返事に全くもって覇気がなかった。

そして、咲達がパタパタと駆けてきたところで、僕らは家に帰った。

家に着くと、僕はすぐに夕飯の支度に取りかかり、咲と絵理と初陽はそれぞれ着替えに部屋に戻った。

そして夕食時。

僕は階段から声をかける。すると咲と絵理は降りてきたのだが、初陽だけが降りてこない。

「どうしたんだろう」

「どうしました、お兄様」

「あ、咲。悪い、先に絵理と飯食っててくれない？僕は初陽を呼んでくる」

「はい、わかりました」

そして僕は、初陽の部屋に向かう。

「おい、初陽。晩飯だぞ？要らないのか？」

扉越しに叫ぶ。反応は無し。

「……………寝てんのか？おーい、初陽ー？」

ノックしてから部屋にはいる。すると、

「！？は、初陽！？」

「はっ……………ひゅっ……………はっ……………！」

部屋のど真ん中で、初陽がぶっ倒れていた。

「おい初陽！しっかりしろー！……………くそっ、ビニール袋は……………！」

初陽はどうやら、過呼吸で倒れてしまったらしかった。今日一日で、相当なストレスがかかっていたという事だろう。僕はポケットに突っ込んであったレジ袋を初陽の鼻と口に被せ、自分の吐いた息を吸わせる。

「はーっ、はーっ……………」

「おい……………大丈夫——」

「さ、触るなー！ー」

「ッ……………！」

「あっ、いっ……………いめん……………」

「いや……………」

初陽は介抱しようとした僕の手を振り払ってしまったことを、申し訳なさそうな顔をしてわびた。

「……………やっぱり、無理か？学校に行くのは……………」

「……………やだ。行く」

「いや、でもお前無理してまたぶっ倒れたりでもしたら……………」

「それでも！」

初陽が大きな声で僕の言葉を遮った。

「それでも、行きたいんだよ……………」

「なんで、ここまでして……………元々乗り気じゃなかったろ？」

すると、初陽はぽつりぽつりと言葉をこぼしていく。

「ずっと、一人で生きてきたんだ。今更、誰かと一緒にいたいなんて思ってもなかった。……………でも、お前を見て思ったんだよ。あの二人と話するときのお前が、凄く楽しそうで……………凄く、羨ましくて……………」

——もう、一人は嫌なんだよ……………。
かすれて音にならなかった声は、それでも痛いほどに心に響いてきた。

「……………わかった」

僕は心を決める。

「初陽がそこまで言うんなら、僕は止めない。僕も一緒に頑張るよ。
……少し、怖いかもしれないけどさ」

「……………う」

「……………へ？」

初陽は、顔を真っ赤にして俯いたまま、何かを呟いている。
何事かと聞き返すと、さらに顔を赤くして顔を上げて、

「ありがとって言ったんだ！一発で聞き取れ！バーカ！」

と言って、部屋から出て行ってしまった。

あまりの剣幕に、一瞬よくわからなかったが、お礼を言われたと言っことに気がついて——微笑みとも、苦笑とも取れない笑みが
浮かんだ。

「それじゃあ、父さんにその旨を伝えられますかね」

明日から大変になるなあーと文句をつくが、やっぱりどうしても
不機嫌な表情はできない僕なのであった。

まあ、本当に明日からいろんな意味で大変なことになっていくの
だが……………この時ばかりは予想だにしていなかった。

5日目：花も恥じらう年頃の乙女と僕

初陽が学校に行き始めて一週間が経った。

最初の頃はよく発作を起こしていたが、今では、

「ぐへへ、初陽たん。今日のパンツの色はなにぐぼるぶっ!？」

「ち、近寄るな！バカ！変態！」

と、まあ二三四をしばき倒すくらいは出来るようになった。
え、進歩してないって？

他人に触れるようになっただけでも上出来だろ。一週間だし。

「と言うわけで、閉。初陽ちゃんの着る洋服を買ってきなさい」

「僕のモノローグを勝手に引き継ぐなよ、父さん」

朝食用の魚を焼きつつ、僕は父さんにツツコンだ。
しかし洋服かぁ……。アイツのことだし、

「別に良い。面倒だ」

とかいって断られそう――。

「って初陽、いたのか」

「おう。朝ご飯の時間だと思って」

そう言った初陽の格好は、やっぱり学校ジャージだった。

「けどよー、なんか少しはお洒落したいと思ったりはしないのか？」

「ない。興味ない」

「……………だよなー。」

「だが、いつまでもその学校ジャージと言つのもどうかと思うがね？」

父さんがそう言うが、やはり初陽が首を縦に振ることはない。
くそう。いつたいどうすれば……………！

「お兄様、お父様、どうなさったんですか？」

「みんなおはようなのですー」

「おお、絵理に咲。おはよー。すぐに朝飯用意するから座つといて」

そう言つて、焼き終わった五人分の魚と大きな器に盛ったサラダをテーブルに置く。

「わかりました……………ところで、先程から何を話されていたんですか？」

「ああ、初陽が着る物を買に行く話をしていたんだ」

そしてご飯と味噌汁を人数分用意し、朝食の用意が終了。

各人、いただきますをしてから朝食に手を着けていく。

「そうなんですか。で、そこに何の問題が？」

「ああ、実は――」

「洋服なんていらない。動きやすいし、このままでいい」

「――と言う訳なんだ」

「……なるほど」

行きたいのは山々だが、本人がこの調子じゃあねえ……。

適当に僕らが選んで買っても良いのだが、サイズもよくわかっていないし好みもあるだろうから、適当に買って気に入らなかったときに少々困るのだ。

「どうにか同行させる手だてはないだろうか、妹よ」

「えーっと……そうですね」

ちらりと、咲は横目で初陽を見る。

「……初陽さん。本当にそのジャージだけでよろしいんですか？」

「いい」

「そうですか……勿体無い」

「……？？どういうことだ？」

「初陽さん。あなたは女の子の中では非っ常ーーーーーに可愛らしい、そして美しい部類に入ります。学校でも、結構異性から声をかけられたりしませんでしたか？」

「え？……まあ、それなりに」

初陽が非っ常ーーーーーに微妙な顔をしたのは、しょっちゅう二三四にセクハラされているからだろう。そう言うのに疎い初陽でも、どうやら生理的嫌悪感はあるらしい。

だが、二三四に限らず初陽はなかなか人気があり、男女関係なくよく声をかけられるのだが、比率は3：7くらいの割合で男子が圧倒的に多い。それほどに彼女は目を引く美少女なのだ。

「ですから、あなたが着飾らないことは非っ常ーーーーーにもつたいないことなのです。もう資源の無駄使いです。有効活用しなくては」

「う…………。で、でも、学校は制服だろ？洋服を買う意味なんか……………」

「甘い！」

「ひうつ！？」

ぱんっ！とテーブルを力強く叩く咲。その剣幕にびびる初陽。

「……………失礼。しかし甘い、甘いですよ初陽さん。学校は制服だから洋服を買わなくても良い？そんなもの、この“終着駅家”と言う狭いコミュニティで生活しているから言えることなのです。いい

ですか？学校は何も、勉強するだけの場ではありません。人と語らい、絆を深める場所でもあるのです。そうして生まれた絆は友情と言う物になり、その人とあなたは友達となります。そして、友という物は学校外でもその交友を深めるものなのです。そもそも友と言うのは心を共有し――」

長いので割愛する事にする。

「凄い。咲ちゃんが本気なのです」

「ああ。あんな饒舌な咲、久しぶりに見た気がする」

「それに、初陽ちゃんも咲の気迫に圧されてるぞ。素直に返事なんかしてる」

僕は将来、この子にはマルチ商業には手を出させないようにさせようと心に誓った。被害が凄そう。

「――と言うわけで、初陽さんはジャージ以外の服を着用する必要性があるわけなのです」

「はい、わかりました」

と言うわけで説得完了。

咲の言ったことをざっくりとまとめると、『友達と遊ぶのに洋服無いと恥ずかしくね？』と言うことらしい。

しかしそれだけのことなのに凄まじい説得力だった。咲ちゃんこあい。

「そうですか。理解していただいて嬉しいです。では、食事が終わ

り次第買いに行くことにしましょう。ね、お兄様？」

「え？あ、うん、はい。そうですね」

と言うわけで、僕は初陽の洋服を買いに行くこととなった。

□ ■ □ ■ □

発音を変えると存在が消え去る僕らのふるさと、馬田^{まだない}乃町――。

この町の中心部である市街地に、巨大な商店街が存在する。通称………は、まだない。いや、特にない。好きに呼んでくださいって感じた。

うーん、アバウト。………よし、じゃあアバウト街でいいや。もう。

そんなアバウト加減が素敵なアバウト街に、僕は咲、絵理、そして初陽の三人を引き連れて訪れていた。

「で、まずはどの店に行くんだ？」

「そうですね………まずはランジェリーショップにでも向かうかと」

「らんじえりいしょつぷ？」

「下着を売ってるお店のことなのですよ、初陽ちゃん」

さて、ここで男性諸君に質問だ。

この世界には男が踏み入ることを許されていない秘境が複数存在

する事を、諸君はご存知だろうか。

女子トイレ、女子更衣室、女湯、年頃の妹の部屋、父親のベッドの下（父親の性癖がわかり絶望する可能性大）……………。

そしてそのうちの一つがランジェリーショップ……………女性用下着売場である。

よほど図太い神経をしていなければ、そこに存在する色とりどりの薄布の存在感到に圧迫され、更には店員や客の目線に圧迫されて非常に肩身の狭い思いをする場所である。

「じゃあ初陽ちゃん、そしてお兄様。行きましょうか」

「待てえい」

僕はピタツと足を止める。

「どうかなさいましたか？お兄様」

「どうかなさいましたか、じゃないだろう。何故に僕まで行かねばならんのだ」

「それはみんなそろっての買い物だからですよ。お兄様も例外ではありません」

「例外でしょう、間違い無く。男だよ？僕、男だよ？衆目の視線にさらされて悶死しろとでも？」

「なら、その封印を解き、かみどめ変身すればいいではないですか」
メタモルフォーゼ

ピタリ、と、主に僕の空気が固まった。

「ああそうですね。どうせ服も買うのですから、下着を買うのが後でも先でも一緒ですね。うっかりでした」

がしつと僕の肩を掴み、咲が、悪魔のような笑みを浮かべた……
……様に見えた。少なくとも、僕にはそう見えた。

「ちょっと、変身してもらいましょうか？お姉様？」

「……………いいいいいいやあああああああああ……！！！！！」

今まであげたこともないような盛大な悲鳴をあげる僕を、小柄な咲がずるずると楽しそうに引っ張っていく。

そのあとを、何のこつちやと首を傾げる初陽と、ああまたですかーと呆れる絵里が付いてくる。

ああちくしょう。今日は最大の厄日だよ、クソ。



「……………いやあ、いつ見ても見事な変身ぶりです。お兄様、いえお姉様」

「閉さん、可愛いですー」

「なんか……………凄いな」

「……………褒められても嬉しくねえー……………」

手頃な洋服店に入った僕は、試着室に放り込まれるなり咲に身ぐ

るみ剥がれた後、店にあった手頃な感じの洋服一式を着せられた。いわゆる、女物の服と言っやつを。

「白いブラウスに、ふわつとした赤いチェックのスカート、大きめのベルトとニーソックス……そして標準装備の眼鏡と髪飾りを外したお兄様に死角はありません。どこからどう見ても女の子です」

「……………激しく死にたいのだが」

「だったら、抵抗すればよかったじゃないですか」

「抵抗するだけ無駄なんだよ……………はあ……………」

うん。抵抗したところで、きつと咲は僕が女物の服に着替えざるを得ない状況に追い込み、有無を言わさず着替えさせるのだから抵抗するだけ無駄だ。

兄である僕が、それを一番理解している。理解している故に、いつまでもくよくよするわけにはいかない。

「……………で、僕はこのあとどうすれば？」

「そうですね……………せっかく女の子になったんですから、初陽さんと一緒に下着を買ってきてください」

「ボクと咲ちゃんは適当に初陽ちゃんに似合いそうな服を見繕ってきますです」

「ちょっと待て。見た目は変わろうが僕は男だぞ！？初陽も流石に嫌がるんじゃない——」

「いや、私は特には」

ええーーーーー。

「では、決まりですね。お姉様、よろしく願いしますね？」

「可愛いのを選んであげてくださいですよ、閉さん！」

「うええ！？マジで!？」

そう言つて、2人は店の奥に消えていつてしまった。

「…………じゃ、じゃあ閉。よろしく頼む」

「…………納得いかねえ……………」

と言いつつも、僕は初陽を連れて先ほどまでいたランジェリーシヨップへと、重たい足取りで向かうのであった。

□ ■ □ ■ □

「Bカップらしいぞ」

「言わんでええがな」

と言うわけで、それに合う上下の下着を買うことになった。視線は気にならなくなったが、なぜか心が折れそうだ。女性になじんでる自分が嫌だ。サイズを測ってくれたお姉さんも、そちらの

方もかりますか？とか聞いて来やがったし。畜生。僕は男だ。

「可愛い？から、良いんじゃないか？」

「よかねーよ！全くもってよかねーよ！姿形が問題じゃない、問題なのは性別だ！」

まあでも、なんの問題もなく下着を買うことができたし、良しとしよう。

いや、全く良くないけども。

「ま、なにはともあれ後は服を買うだけだ。行くぞ」

「おう」

そして、僕らは咲達のいる服やへ向かう。
ところで。

「初陽」

「ん？なんだ？」

「だいぶ僕に近づけるようになったな」

今、僕と初陽の間にはほんの十数センチの隙間しかない。はじめの頃の1メートル以上あった距離が、約十分の1に縮んでいた。

「うえあつ！？こ、これはそのっ！」

「？なんで慌ててるんだ？僕としては、お前の対人恐怖症が治って

きはじめてみたいで嬉しいんだけど……………」

すると初陽は顔を真っ赤にしたまま、

「バーカ!!」

と叫んで先に駆けて行ってしまった。

去り際に、お前だからだ、と言っていた気がしたが、いまいち意味がわからなかった。

そして初陽を追いかけて咲達のいる服屋に到着。

「ふふふっ。来ましたね、初陽さん」

「お、おう……………咲ちゃん、なんか怖いぞ？」

「ボクたちが初陽ちゃん用にした品々……………試着でとくと味わう
がいいのですー!!」

「にゃー……!!」

「逝ってこい、初陽……………」

試着室の中に引き込まれていった初陽に合掌して、僕は1人、その前に残された。

——数分後。

「どうです？お兄様」

「おおー……………これは」

「ん……………なんか、恥ずかしいな」

「いや、うん。凄い似合ってるから大丈夫」

思わず思ったことが口からこぼれる。

初陽は顔を赤く染めてうつむいてしまったが、それがまたなんて言うか……………可愛い。

今初陽が着ているのは、胸元にリボンがあしらわれた白いワンピースと言うシンプルなものだが、シンプルだからこそ素材の良さというか、そう言うのがとても良くでていて凄い似合っていた。

「本番はこれからですよ」

「えっ、まだあるのか？」

「当たり前です。女の子をなんだと思っているんですか」

そして再びカーテンが閉じられる。

そして数分後、再びカーテンが開かれる。

「どうです？」

「さっきと同じだ。似合ってる。ヤバイ」

「う……………なんか恥ずかしいからそっいうことは言っな！」

「じゃあ、可愛い」

「……………つぐう……………」

今度は七分丈のジーンズに、白いブラウス。そこに茶色のベスト……と言えはいいのだろうか。を着た姿だった。

先程の清楚感とはまた違った爽やかのある格好で、アップにまとめられた髪の毛がまたさらにその格好の良さを引き立てていた。

「でも、素材がから本当に何でもよく似合いますです」

「そうですね。わたしも正直ここまでとは思いませんでした」

「そうだな。初陽ならもう何を着たって似合うんじゃないか？」

「……………」

あらら。真っ赤つか。

どうやら恥ずかしさの臨界点を超えたっぽい。

「さて、それじゃあどんどんいきましようー！」

そうしてしばらくの間、四人だけのファッションショーが続いた。どの服も初陽に良く似合っていて、しばし時間が経つのを忘れてしまふほどだった。

女子の買い物が遅くなる理由が、ほんの少しわかったかもしれない。

「それでお兄様、どれを買いますか？」

「ううん…………。正直全部買っても良いくらいだけど、予算が……………」

「早く決めてくれ…………。恥ずかしい」

仕方がないので、僕は初陽が着た十数着のうち、それぞれが特に良いと思った3着と、初陽が好みだと言った1着。そして僕が良いと思った1着（あの白いワンピース）を買うことにした。

そして支払いを済ませると、せっかくなので買った服をそのまま着させる事にした。

そして咲と絵理はもう少し洋服が見たいとのことで、僕と初陽は外に出て二人を待つことにした。

「ふう……………」

「疲れちゃった？」

「ん……………少し」

僕は一つ溜息をついて、店の前にあったベンチに初陽を座らせ、荷物をその脇に置く。

「ちょっと待ってて。なんか飲み物買ってくるよ」

「え……………あ、いや。そんなに疲れている訳じゃ……………」

「遠慮すんなって。じゃあ、ここで待っててくれる？」

そして僕は、少し離れたところにあった自動販売機で二本ジュースを買った。

ああ言うところに初陽を放置して、ナンパとかに合ったらどうしようかと思ったが、流石にこの程度の時間で声をかけられることは無いだろう。

と、高をくくってました。はい。

少し早足で戻ると、数名の男に囲まれている初陽の姿が！

「やつべ……………！」

僕は急いで初陽のもとへと駆け寄り、男のうちの一人に声をかける。

「おいお前ら！」

「閉！助けて！」

「あゝ？んだてめえは」

「うおっ、こっちの金髪の子も可愛いけど、この子もかわいくね？」

しまった。女装を解いていなかった。

「その子を返せ。んでお前ら失せろ」

「はぁー？何言ってるの？」

「そんな事より、君も子のこと一緒に俺たちと気持ちいい事しない？」

「……………（ぼそっ）僕穴一つしかないんだけど」

「あ？なんか言ったか？」

「いえ何も。とにかく初陽を解放しろゲス共が」

すると、流石に僕の態度にキレたのか、3人のうちの一人のリーダーっぽい奴が僕の胸ぐらを掴んできた。

「オイこのくそ女ア……あんまし調子づいてると、女だからって容赦しねえぞ？」

「あ？調子乗ってんのはどっちだよ。尻の軽い女ばっか相手してる万年発情期の駄犬が、人間に相手してもらえんでも思ったか？」

「てめえ！！言わせておけばっ！！」

そう言っつて、男は僕の胸ぐらを掴んだまま僕を殴り飛ばした。よし、予定通り騒ぎが大きくなってきた。この調子なら、そろそろ警察の方々が駆けつけてきてくれるだろう。

しかし予想外だったのが、意外と容赦なかったなこのDQN。口ん中完璧に切れてるし、鼻血も結構でてるみたいだ。

まあでも、初陽に何かあるよりはまし——。

「い、いやあああああああ！！！」

と、言うことにはならなかったみたいだ。

閉がいなくなつたとたん、知らない男達が声をかけてきた。

閉が学校で、声をかけてくる人は友達になりたがっているのかもしれない人達だ、と教えてくれた。

でも、この人達は——違う。

長い逃亡生活で、わたしがもっともよく見てきた目をした人たち……この人達はわたしを騙して酷いことをしようとしている目をしていた。

そう思ったら、怖くなってきた。

何度も何度も断った。でも、その人達は離れていってくれない。どうしよう。どうしよう。どうしようどうしようどうしようどうしよう。

嫌だ、誰か……閉、助けて——。

「おいお前ら！」

願いは——通じたみたいだ。

絶対に君を守る——。その言葉の通り、閉は助けに来てくれた。

「閉！助けて！」

するとわたしを取り囲んでいた人たちは、今度は閉を囲む形になった。どうしよう、今度は、閉が！

でも、今のわたしには何も出来ない。怖い。怖くて、体が動かない。

閉はわたしに最初に話しかけてきた人と、どうやら口げんかを始めたらしい。そして、それはエスカレートしていつて、閉が胸ぐらを掴まれた。そして、閉がまた何かを言って——殴られた。

「あ——」

地面に倒れ込む閉。その口からは、血が、こぼれていて——。

「血、が——！」

気持ちが、悪い。ぐちゃぐちゃと、胸の中で異物が動き回る感じがする。

怖い、痛い、苦しい、辛い、助けて、助けて——！！

そして、その重く暗い感情は、確固たる“モノ”となる。

「い、いやあああああああ——！！！」

地獄から、数匹の“モノ”が溢れ出した。

5日目・花も恥じらう年頃の乙女と僕（後書き）

うわ、後書きとか超久しぶり。どうも、蜷です。

ここまでで書き溜めたものは放出しきりました。次から不定期の更新となります。

けれど、話の流れは大して変わらなくてもないので遅くなりますとおもいます。はい。

まあとりあえず、次のお話でもお会いしましょうかね。
それではそれまでお元気で。

6日目：僕らと憑物と信用の定義

コラム：憑物つきものと被師はいしの関係性について。

憑物とは、地獄が生み出した化け物や怪物の総称に当たるものの事である。地獄に極端な嫌悪、恐怖、絶望などの負のストレスを与えると生み出される。

ちなみに、憑物の力・知能は与えられた負のストレスの大きさに左右される。

そして憑物は実体を持っておらず、近くにいる生物を宿主とし、この世界に害を及ぼす。

そして、それを討つべく存在するのが被師である。生物に取り憑いた憑き物を祓う事が被師として生まれた者の宿命であり、運命である。

ちなみに言えば、日本の歴史に登場する陰陽師などが被師の祖とされる。

故に古くからこの二つは敵対関係となり、形を変えて現代に残る大きな因縁と言えよう。

「いやあああああああー!!」

初陽の体内から、何か《・・》が生み出される。そしてその何かは僕を殴ったリーダー格の男とその取り巻き達に取り憑いた。

「なんっ…………グンウ!？」

「じゅあっ!？」

「お前らどうし…………ウグウ!？」

憑物に取り憑かれた人間を見るのは慣れているが、今まさに憑物に取り憑かれようとしている人間を見るのは初めてだ。

異物が体内に侵入し、身体の所有権を強奪する。ひとしきり苦しそうなうめき声をあげた後、一度体をビクリと痙攣させ——その人間は、人の皮を被った化け物となりはてた。

「初陽っ——！！」

ひとまず、僕は初陽の身の安全を確保する。

頭を抱えて縮こまる初陽の前に立ちほだかり、憑物に憑かれた人間を見る。

しかし、この状況はまずい。さっきの悲鳴で少し人だかりが出来てしまっている。むやみに被おうとすれば騒ぎが大きくなる。特に、僕みたいな被師にとっては。

「——クククツ。被師、どうやら俺達の優位が決まったみたいだな……。異能ちからが使えるば、被うことも出来なかつた」

「……………大人しく、俺達に殺される」

「……………へん。そんな要求にそう易々と応じる訳ねえだろ」

しかし、どうする。

世の理ことわりが通用しない化け物達と、理を重んじる人間が天下の往来で戦ったとして勝敗はすでに目に見えている。

一般人に被害は出すことができない。そういう人たちを守ることが、被師の仕事なのだから。こんな所で戦ったら、尋常ではない被害が出ることは目に見えていた。

「それじゃあ手始めに……そこを歩いてる人間でも壊してみるかな！？なあ！！」

そして、ついに憑物たちが通行人をその歯牙にかけようと飛びかかる。

しかし、

「がふっ！？」

「ぐっ……！？」

「っづう！？」

憑物達は、何か不可視の壁の様なものにぶつかり、地面に転がった。

「んだあ！？これは！！」

バンバンと、その見えない壁を憑物が叩く。僕はその様子を見てひとまず安堵した。こんな事が出来るのは――。

「静かにしなさい、下等生物が。よくも初陽さんに手を出してくれましたね」

外見は小学校低学年の女の子にしか見えない幼い容姿の、僕のただ一人の妹。

「咲……。ありがとう、助かった」

「いえいえ。初陽さんの叫び声が聞こえたので、もしやと思い飛んできたのです」

「実際は痴漢か何かにあつたのかと思つてたですが……予想外でした」

咲に送れて絵理もやって来る。

「ところで、初陽さんのご様子は？」

「っそうだ！初陽、大丈夫か！？初陽！」

僕は初陽の肩を掴み、揺さぶる。

「うあっ……あ？お、わり？」

「うん。僕だよ……。それより、大丈夫か？どこか痛いところとかないか？」

「わたしは……、平気。それより、閉は？血が……！」

「あ？ああ、こんなのかすり傷だよ。それより——」

「あっ……あぶない！」

初陽の叫び声に振り向くと、憑かれた男が僕らに飛びかかってきていて——！！

「くっ……！！」

「きゃっ!？」

僕は初陽をかばうように抱きしめ、来たるべき痛みを耐えようと目をつぶる。が、

「2人にい——手を出すなぁっ!!」

「ぐぶええ!？」

寸のところで、絵理が憑物に飛び膝蹴りをぶちかました。

「2人とも、大丈夫？」

そう言ってこちらを振り向いた絵理の目は、初陽の目のような紅に染まっていた。

「サンキュー絵理——いや、ヒドラ」

「どういたしまして」

そして絵理は、僕らを庇うように立ちふさがった。この絵理という少女。僕や咲と言った被師などというわけではない。ただの一般人である。

——まあ、ヒドラと言う憑物を身に宿してはいるが。

「それより閉、そろそろ地獄を離してあげたら?なんか凄いことになってるけど」

そう言われて自分の腕の中を見れば、初陽が真っ赤になって震え

ていた。

「どうした？顔真っ赤だぞ？」

「うつうつするさい！！さっさと離せバーバーカ！！」

「ふっ！？」

殴られた。

「おまつ、守ってやったつてのに何で殴るんだ！痛いじゃないか！」

「うつさいうつさいバーカバーカ！！」

「なっ、おまつ——！！？」

「喧嘩は後にしなさい！来るわよ！」

絵理の声にハッとして、僕は振り返って構える。

丁度3人が僕らに飛びかかってくるところだった。

「体術は、苦手なんだけど——な！」

僕に飛びかかってきた1人の拳をかわし、それを抱え込み、そのままの勢いで投げ、地面に叩きつける。

まあ、俗に言う一本勝負って奴だ。

一方絵理の方はと言うと、

「ほっ」

「がつ！」

「ぎゃっ！？」

2人の手首を掴み、捻り、浮かせた後に叩きつけた。憑物達は、痛みで地面をのたうち回る。

「……………すっげ」

「まあ、むしろ私達にとってこれくらいできないと、ね。被われちゃったりしちゃうから」

その心配はもう無くなったけどねー、と、ヒドラはカラカラと笑う。

「にしても、被わなくちゃいけない対象が被えないみたいなんだけど？」

「人目も余計に増えちゃったし、僕の方法だと騒ぎになるので被えません」

「よねえ……………。まあ、いたぶることはできるけど」

うふふっと、暗い笑みをこぼすヒドラ姐さん。絵理の姿でそんな怖い事は言わんで下さい。

「まあでも、そう言うときのための咲の空間こゝろだろ。な？」

「ええ。もう準備はできています。今すぐにでも移動できますよ？」

「じゃあ、お願いしますかね」

さて、ここで咲について説明しよう。

被師と言えど、その種類は様々であり、戦闘についても向き不向きというものがある。

特に咲は、対憑物の戦闘には不向きな異能の持ち主で、周りからは空間制作と呼ばれている。
ハイドメーカ

その能力は至ってシンプル。空間を区切ること。

手っ取り早いイメージとしては、某炎髪灼眼の討ち手の封絶みたいなものだ。と言っても、こっちは向こうと違ってただ壁を作って区切るだけだから、外からこっちはモロバレなんだけども。

しかし、向こうには向こうの、こっちにはこっちの利点がある。

「では行きます——
インビジブル
隠蔽」

その1、任意で周囲からこの空間を無かったことにできる。

まあつまり、空間の外の人にとって、空間内にいる人やものは最初から無かったことにできる。まさに封絶。

ホワーディング
「移転」

その2、一定の範囲内であれば、空間の中の人、物を別の場所に展開した空間内に移動させることができるということ。咲の準備とというのはこの事である。

「丁度、近くに廃ビルがありましたので、今回はその屋上に見えました」

そして最後………と言うわけではないが、今回は最後に、

テレストリアル
「固定」

その名の通り、空間内を固定する。空間内にある物に関しては、いかなる力を加えても破壊することはできなくなる。

まあもつとも、人や憑き物は例外だが。

しかし、これで――。

「思う存分、暴れられるってわけだ」

そして、僕の異能が発動する。

レジェンド
「神器、魔剣レーヴァティン顕現」

腰から引き抜くような形で、僕は何もない空間から、一振りの剣を取り出した。



さて、さっきの咲の能力の説明の際にも言ったが、被師の能力には向き不向きがある。

咲の能力は、戦闘には不向きだが、その戦闘をサポートする事に関しては、これ以上の物は無いと思う。特に、僕みたいな戦闘専門の能力者にとっては。

僕の能力は言ってしまうえば憑物を被うだけの能力だ。

自信の出現させた武器に、被の力を乗せることができる。もっとも被師らしいオーソドックスな能力である。

まあ、実際はそれだけではないのだが。今回は使うことがないこ

とを祈る。

「貴様ああ！！！！」

移動前に僕が投げた憑物が立ち上がり、僕に迫ってくる。

しかし僕は何のためらいもなく、その宿主をレーヴァテインで切り裂いた。

胴が二つに分かれ、中から内蔵が無残に飛び散り、大量の血が吹き出る——と言うことはなく。

「ギャアアアアアアアアッツツ!!!」

鋭い断末魔をあげ、憑物のみが宿主から分離され、この世界から消滅した。

「まずは一匹」

残りの二人が戦慄するのが伝わってくる。

道理を無視した破壊を行うのが憑物だ。これ以上に無茶苦茶な存在はいないだろう。

けれど残念だったな憑物共。

一度道理から外れたら——僕らの方が、正直もつと無茶苦茶だ。

「どうしたお前ら。かかってこないのか？なら——こっちから行かせてもらうぞ？」

脚に力を込め、訳5メートルほど離れた憑物の懷に飛び込む。

「ひっ——!!」

「セラアッ！！」

そして、下から斜め上方向に逆袈裟斬りで斬り伏せる。
さっきのように、憑物のみが宿主から斬り払われ……いや、斬り抜われる。

「あと、1つ」

キョロリと瞳を動かし、残りの1人を視界に入れる。顔は蒼白になり、僕の視線にビクリと肩を震わせる。

「出抜け、憑物」

そして、最後の1人に飛びかかり、大上段から渾身の力で退魔の剣を振り下ろす。これですべてが終わる——はずだったが。

何故か憑物は、口元に薄い笑みを浮かべた。

「バカめ」

それから、何が起きたか理解ができなかった。気づけば、僕の両腕は切り落とされていた。

「——自我を、完成させやがったか」

憑物における自我とは。人間に憑きたての頃はその人間の容姿そのものであるが、時間を経るとその姿を憑物自身の本来の姿へと変容する。変容する時間は個人差があるらしいが、だいたい長くても30分程度だ。

そしてその姿は、主に悪魔や化け物、妖怪や魔神に魔王と言った、

簡単に言えば悪や混沌、不幸の象徴たるものである。

「ヒャーツハツハツハツハア！一足遅かったなあ抜い師イ！」

変容した姿は、剣を有した鴉の姿だった。

ソロモン72柱とか言われる奴らの中に、こんな奴がいた気がする。

「閉イーーーーー！！！」

初陽の悲痛な叫び声が聞こえる。

こりゃあまた、憑物放出とかありそうだなあ、ハハッ。

「何を笑ってやがる！腕を切り落とされたんだぞ！？」

「ああそうだな。無茶苦茶痛いし何もできないし。でも、それがどうしたって言うんだよ？———神器、エリクサー」

僕の異能は正確なところ、武器に抜の力を乗せることができると言っわけではない。

正直に言ってしまうと、武器を顕現させる抜師であれば、誰でも抜の力を乗せることが出来る。だから———

では、僕の異能とは何なのか？

「憑き物。僕の異能はな、伝説と言われる道具、武器、防具を自在に顕現させることができるんだ。だから———」

切り落とされた両腕が、切断面から綺麗に結合される。

「———笑ったんだよ。お前が余りに滑稽だね」

「このっ——クソガキがあ————!!」

鴉の姿をした憑物は、バサツと羽を広げて咲の空間の高さいっぱいまで飛び上がった。

「死に晒せエエエ!! 祓師イ————!!」

そして急降下。凄まじい速度で僕に向かって突っ込んでくる。

「ッセイ!!」

僕はそれを回避し、すれ違い様に剣を振る。が、ギリギリで避けられた。

「めんどくさいなあ、もう!!」

「お兄様!!」

「何——つとお!?!」

憑物の剣を回避しつつ、咲の話に耳を傾ける。

「そろそろ空間を維持できなくなります。あと五分以内に決めて下さい!!」

「そんなこと言っただってえっ!?!」

「なら、私も協力するわ!!」

僕の背後に、ヒドラが付く。

「私が奴を止めるから、その内に魔剣で被^{それ}っちゃいなさい」

「……………了解ッ！」

「じゃあ……………いくわよっ！」

ヒドラの瞳が一際紅に輝く。

「死ねエエエ！！！」

鴉が僕らに突っ込んでくる。これが最後のチャンスだ。

「速いけど——まだ、遅いっ！！！」

ヒドラが動く。

まさに人外の、神速と言うほどの速さで繰り出された拳は、寸分
違わず鴉の顔顎に吸い込まれ、空高く打ち上げられる。

「かつ……………！？」

「閉、今よ！」

「わかってるよ！神器換装——」

音もなく、魔剣は虚空に消え去る。

そして、新たな神器が手に握られる。

「——神弓アルテミス！！！」

目一杯弓を引き絞り、放つ！

放たれた弓は暴風と共に、寸分変わらず鴉の胸を穿った。

「ば、バカ……………な……………」

そして鴉の羽が剥がれ落ち、宿主が元の人の姿に戻る。

「ま、これにて一件落着ってやつですかね」

最後に僕がそう締めくくり、咲の空間は音もなく崩れ去った。



あのあと。憑物に憑かれた三人組は、適当に近くの公園のベンチに転がしておいた。

憑物に憑かれていたときの記憶は無いはずだし、まあ問題はないだろう。

「さて、それじゃあ帰りましょうか」

そんなこんながあつて着替える暇がなかった僕が、女物の服から今日着てきた服に着替え終わった頃にはもう日は傾いていて、町を茜色に染めあげてゆくところだった。

なかなか綺麗な光景なのだが……………。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

……………何この沈黙。場の空気がすげえ沈んでるんだけど。初陽の空気が特に。

「……………ほ、ほらみんな。家に着いたぞ？」

そんな空気に耐えること数十分、ようやく家に到着。
初陽がふらふらと部屋に戻っていったところで、僕は全身全霊をこめて深い、深い溜め息をついた。

「なんか、初陽変じゃない？」

「ボクもそう思いますですう！家に帰る間ずうーっと暗ーい顔してましたし、あの空気の重さは異常でした！ぶっちゃけ逃げたかったです！」

絵理が涙目で訴えてきた。それほどなのか。わからなくはないけど。

あんな沈んだ空気の中に行きわたると言われたら、流石の僕でも泣き出すと思う。

「でも、初陽さんが暗い顔をしてしまうのもわかる気がします」

「どういうことだ、咲？」

「初陽さんは、そもそも今日みたいな出来事の中に常に身を置いているような人です」

「まあ………そりゃあ、地獄だからな」

「ですが、原因が自分にあるとしても、今までは何の関係もない人が戦い、傷つき、倒れてきました」

これは、テレビで見ている戦地の様子などに酷似していますね、と、咲は言った。

可哀想だと思っても、直接自分の身に降りかかって来るでもない痛みや苦しみは、実感する事が出来ないと言うことだろう。

「けれど、今回は違います。少なからず、初陽さんの味方であるお兄様が怪我をなさり、死にかけました」

「……………いや、確かに痛かったのは痛かったけど、そこまでじゃなかったよ？」

「黙って下さい。あんなに血を出しておいて、普通の人が見たならそう思ってしまうのは当然です。……………話がそれました。とにかく、自分が起こしてしまったことで、少なくとも自分と友好的な関係のある人が傷ついたなら。お兄様ならどう思いますか？……………それが多分、今の初陽さんの状況です」

「……………ああ、なるほど」

つまり、初陽は自分のしでかしたことに對して責任を感じているわけだ。

少なくとも、自分が憑物を吐き出さなければ僕が死にかける……

…間ではいけないけども、腕を切り落とされて痛い思いをする事は無かったわけだし。

けれど、それって……………。

「それは違うよなあ……………」

「……………何故です?」

「ああ、それはだな——」

「あ、やっぱり言わなくていいです」

僕の言葉を咲が遮る。

「え、どうして?」

「それを今一番説明しなきゃいけないのは、私じゃなくてあの子でしよう?」

そういつて天井……………二階を指差す僕の妹。

「……………わかったよ」

「なら良いです。では、さっさ初陽さんを連れてきて下さい。晩ご飯を作る時間があるんですから」

「作るのは全部僕だつての……………。ああハイハイわかってますから爪楊枝を投げつけるのは止める。微妙に痛い」

そうして僕は居間から脱出し、今日購入した衣服類を持って二階

の初陽の部屋に向かう。

なんか最近こいつの部屋にはいることが多いなーと思いつつも、ノックをしてから部屋に入る。すると部屋の隅に膝を抱えてうずくまる初陽の姿が。

(こりゃまた典型的な自己嫌悪というか現実逃避のお姿で……………)

僕は溜め息をつき、初陽の前にあぐらをかいて座る。

「よう」

「……………」

暗ーい。重ーい。

「どうした初陽。そんな暗い顔してさ」

「……………お前は、わたしが怖くないのか？」

「……………なんで？」

「とぼけるな！」

初陽は凄い剣幕で僕を睨む。心なしか、瞳には涙が見えた気がした。

「今日、わたしは憑物を吐き出して、お前達を危険な目に遭わせた！お前なんか腕を切り落とされて死にそうな目に遭わせた！それなのに……………！」

「ああ落ち着け。まあたしかにあれは痛かったな」

「だったら！」

「けどさ」

僕は初陽を制して、言葉続ける。

「けど、あの程度のことなら今まで何回もやられてきた。正直いまさらそんな責任を感じられても、むしろ対応に困るぞ？」

「…………でも」

「でももだつてもない。僕は何も、被師連中だけから君を守るつて言つたんじゃない。少なくとも僕は、君を傷つけるもの全てから君を守るつて意味でそう言つたんだ。だから、あれくらいのこと僕としては当然なんだよ」

そして僕は、初陽に向かって微笑んでみせた。
強がりでも何でもない。ただ、自分のしでかした事に対して責任を感じることはない、と言う事を伝えるためだけに微笑む。
だって、そうだろ？

「僕は、地獄きみを守る被師きみなんだからさ」

すると、初陽の目から涙が零れた。
そして急に顔を赤くしたと思ったら、膝を抱え込んで顔を伏せてしまった。泣いてるところを見られたのが恥ずかしかったのかな？

「…………お前はなんで、そんな恥ずかしいセリフを真面目に言えるんだ」

少しくぐもった声が、初陽から聞こえてくる。

「そりゃあ、事実を言って恥ずかしいって事は無いだろ」

「そ、そか……………」

初陽はさらに真っ赤になって縮こまった。
そして何やら決意したように顔を上げた。

「…………お前の思いはわかった。でも……………だったら、わたしなんかのために、無理はしないでくれ」

「なんか、ってことは無いんだけどな」

「だったら絶対だ」

初陽が立ち上がり、僕と視線を合わせる。

「わたしを守るって言うなら、絶対に無理は……………今日みたいな怪我をするほどの無理はしないって約束してくれ……………頼む」

そう言って、初陽は頭を下げた。

しかし……………僕なんかに対して頼むとききましたか。

「こういうのもなんだけどさ。だいぶ僕の事を信用してくれてるみたいだね。頼むだなんてさ。信用はしないって言ったのに」

なぜか少し恥ずかしくなって、僕はそう言っただけで茶化してみた。
すると初陽はうっと呻いて、フィとそっぽを向きながら、

「……………うっさい。まだわたしはお前を完全には信用してないからな。ただ……………わたしを守ると言いつつわたしのせいでお前が死ぬのは少し違う気がするから……………ただ、それだけだ」

と言った。

「さいですか……………」

なぜか少しがっかりする自分がいた。

まあ、それでも――

「それじゃあ、晩ご飯の時間なんだろう？なら、さっさと下に行くぞ」

「いてっ！？おい、お前今何で僕の頭叩いたんだよ！？」

「うっさい。今日お前が無茶したから、その罰だ！」

それでも、からかわれる程度には、僕は信用されているらしいので、今はそれで良しとしよう。

僕は、べえっと舌を出す初陽を見て、そんな事を思ったのだった。

7日目：祝・夏休み……………の前のあれ

六月と言えば。

「梅雨、衣替え、透ける夏服、見える下着、恥ずかしがる女子。基本だごぶええ!?!」

「黙れ小僧。特に最後の3つ自重しやがれ」

急にしゃしゃり出てきた変態には拳をくれてやるとして、まあと
りあえず6月だ。とは言え、あの憑物騒動から三週間近くたって、
もう6月も半分を切っているのだが。

我らが馬田乃学園高等部の夏服は、男子はワイシャツにネクタイ、
そして薄手のズボン。女子は白い半袖のブラウスに空色のスカート
といった感じである。

「それにしても……………まだしばらく雨が続くのか……………やだなー
……………」

「? なんでだ?」

机に突っ伏す僕の横で、鞆の中身を机の中に移しながら初陽が聞
いてくる。

「洗濯物はなかなか乾かないし、それなのに服が汚れやすいから洗
濯物が増えるし、部屋干しは臭うし、油断すると色々黴びるしもう
嫌だ……………」

「おわりん、あんたはお母さんか!」

なんかつつこまれた。この声は初陽じゃねえな。

「誰だお前」

「うわっ、ひつど!この詩華^{しいか}ちゃんに向かって誰だとはあんまりじゃないのかい?おわりんよ」

このテンションが高い女の子は、沓名^{つくな} 詩華^{しいか}と言う。
ショートカットのブラウンの髪の毛。前髪にはヘアピンを付けている。

男女分け隔てない態度と竹を割ったような性格をしているので、男女共に人気がある。

そしてコイツについて特筆すべき点はと言うと、

「あ、詩華。おはよう」

「おはよ、初陽ちゃん!んー、今日も可愛いなあもっ!」

沓名はガバツと初陽に抱きついた。

沓名は、初陽が学校で作った初めての友達だと言うことだ。

「だ、抱きつくな!」

「んふふー、それは無理な相談だよー。諦めて愛でさせろー!」

「あうー!.....」

「.....眼福だな。目の保養になる」

「二三四、心温まる光景に邪な妄想を被せないでくれ」

とりあえず、そんな二三四の顎をぶち抜いておいた。南無。
そして丁度その時、子子子先生が教室に入ってきた。

「……みんな、おはよう。朝のHRを、始めます。席について下さい」

「先生来たつ。んじゃまた後でね」

そして沓名は初陽を解放して、自分の席に戻っていった。

「……みんな、揃ってるみたいね」

子子子先生は教室を軽く見回してそう言った。
教室の後ろでのびている二三四に関してはスルーですか。

「……みんな、6月も中盤にさしかって、もうすぐ7月です。そうすると、すぐに夏休み、だね」

夏休み、と言う単語に教室が沸き立つ。

ただ、初陽は何かはわからないようで、少しばかり首を傾げるだけだった。

「……けれど、その前に一つ、重要な物がある」

すると教室の空気が急に嫌な物に変わる。

「……再来週から、期末テストが、始まる。みんな、しっかり勉

強するように」

そう言うと、先生は教室から出て行った。

それと同時に、クラスは喧噪に包まれる。聞こえてくるのは期末テストについて話す暗い声と、夏休みについての明るい笑い声がほとんどだ。

「閉……ナツヤスミって、何だ？なんかそわそわする響きがするんだけど……」

「夏休みつてのは、教師陣が徒党を組んで学校を休校させて復習などというふざけた理由で大量の課題を生徒に配布し自分たちはその間に楽しようと考える、生徒休業と言いつつ真の休みを得るのは大人達だけという現代社会の闇を子供達に突きつけるこの世界の現実のことだ」

「閉、わたしでもそれは違うと思う」

「初陽殿、大丈夫じゃ。閉の言ったことは全てが戯れ言じゃよ」

ひょっこり現れた留守につっこまれた。

つっこまれなくても知ってるさ。

部活の顧問や深夜徘徊などをしている生徒がいないかの見回り、
二期期の授業計画に三年生のための夏期講習、e t c、e t c……

……。

お前達以上に忙しい。死ぬ。と、去年凄まじい殺気と共に子子子子先生に小一時間脅は——いや、お説教をくらったからね。生まれて初めて全力で赦しを請うたさ。

「まあとにかく、夏休みつてのは課題さえ終わらせれば自由に遊ん

でいられる長期休暇の事だ」

「……………そ、そうなのか！」

さっきのわずかな間で、どうやら初陽は夏休みにひそむ闇については、全力で無視することに決めたらしい。

「じゃが、喜ぶのは早いぞ。夏休みの前には期末考察があるのじやから」

「キマツコウサツ？」

「ああ、さっき先生が言ってた期末テストの事だよ」

留守はいちいち言葉が難しい。

「期末テストってのは、この学期で勉強したことの総復習みたいなもんだ。初陽も数学とか生物の授業中に変なプリントをやらされただろ？」

「ん？……………あ、そう言えばやったな。良くわかんなかったけど」

「そう。それを一週間使って全部の教科受けるんだ。それが期末テスト」

「ふーん……………？」

……………。

良くわかってないな、この子。

「初陽殿、おぬしは今、大した問題などではないと思っておるな？」

留守の言葉に、初陽はコクリとはつきり頷いた。やっぱりわかってなかった。当然だけど。

「ちなみに言うと、期末テストの点が悪いと夏休みの半分くらいまで毎日補習というか、講習を受けに来る必要があるんだぞ？」

「？……………補習？なんだそれ」

「夏期休暇の間も、しばらく学園に登校する必要がある、と言つてとじゃよ」

留守の言葉に、初陽は硬直した。

……………こいつ、もしかや？

「……………初陽、正直に言え。お前、授業中に受けたテストの平均は何点だ？」

「100点！……………」

……………（ボソツ）×0「……………」

「おいお前今ボソツとかけるゼロつつつただろ！？」

思った以上に散々な結果だったよ！

いや、散々どころじゃないよ、ゼロって！

「……………初陽、お前どうすんだよ」

「わ、わたしに聞くな！ど、どうすればいいんだ！？」

テンパる初陽。すると、

「なーらさ！みんなで勉強会やればいいんじゃないのー？」

「わう！？し、詩華？」

沓名が初陽に飛びついてきたと同時に、そんな事を提案した。

「おわりん、初陽ちゃんと一緒に住んでるんだから勉強くらい見てあげるつもりでしょー？」

「まあ……………ね」

初陽は、地獄になった時から学校に行っていない。

多分、小学校低学年の頃から行っていないという事になる。しかも、そのときの記憶もほとんど無くなっている。

だから本当は小学校からやり直さなければいけないのだが……………いきなり高校の勉強と言うのはなかなか……………いや、相当にキツイ。沓名は続ける。

「だったらさー、初陽ちゃんに色々教えっこしつつ、みんなも一緒に楽しく勉強しようって思ったんだけど……………どう？」

「ほう、なかなか良い案じゃのう」

「でしょう！？さっすが留守さん、わかってるうー！」

詩華は留守の言葉に盛り上がっている。

その様子を見てみると、不意に服をちょいちょいと引っ張られた。初陽だ。

「みんなで勉強って……楽しい、のか？」

初陽は恐る恐る、そんな事を聞いてきた。

「ま、一人で黙々とやるよりは楽しいだろうな」

僕が苦笑しながらそう言うと、初陽は楽しいという言葉が魅力的に聞こえたらしく、

「なら、みんなでやる！」

と、元気良く言った。

「ほんじゃー決定だね！一緒に頑張ろー！」

おー、と拳を掲げる詩華に同調して、初陽も戸惑いながらも拳を振り上げた。

まあ、僕も反対はしないけど……。

「決定したは良いけどさ。どこでやるのさ？」

「おわりんの家」

マジですか？

「だってそこしかみんな知ってる場所無くない？」

「そうじゃな……学園からもそう遠い訳ではないしの」

「んー……。まあ確かにそうだけでも」

「ならおわりんの家で良くない？」

と言うわけで、僕んちが会場と言うことで決定してしまった。
ちゃんと掃除してあったかなーと考えていると、

「閉の家でやるのか!？」

ついさっきまで死んでいた二三四が、勢いよく復活した。

「そうらしいんだが……なんだ二三四。お前も勉強会に参加する
のか？」

「ああ!もちろんだとも!!別に良いよな、沓名!？」

「あ、う、うーん……真面目にやるなら良いけど」

「やるやる。超真面目にやる。だからお願いします、参加させて下
さい」

「うー……。おわりん、どうする?」

沓名が、急に僕に振ってきた。

断る理由は無いのだが……。何故だろうか。二三四から凄く嫌な
気配が漂ってくる。

そう、犯罪の気配ってやつを。

「二三四……お前、ホントーに真面目にやるんだな？」

「ああ。閉、信じてくれ」

どうしよう。全然信じられない。すると、

「閉よ」

「?どうした?留守」

しかめっ面をした留守がこそつと耳打ちしてきた。

「不安だと言うことは、わしにも痛いほど理解できる。じゃが……こ奴だけ仲間外れというのも、わしは釈然とせん。じゃから仲間に入れてやつても良いのではないのかの？」

「むう……そうだなあ……」

家の家族達が危険にさらされるのは少々気になるが……留守の言うとおり、仲間外れと言うのも一理ある。

「まあ、犯罪に走りそうになったら1リットルほど献血すればいいか。いいよ二三四。参加を認めよう」

「なんか不穏な言葉が聞こえてきた気がするけどよっしゃー……
ー……!」

沓名は少し眉根を寄せたが、変な事してきたら2リットル献血でいいか……と呟くと、不承不承ながらも首肯した。

するとちょうどそこで一時間目開始のチャイムが鳴り、みんなは

それぞれの席に戻っていく。

「閉」

授業に使う古典の教科書を準備していると、初陽が声をかけてきた。

「何？」

「……………楽しみだな、勉強会」

そう言った初陽は、本当に楽しそうな笑顔を浮かべていた。

「じゃあ、その楽しい勉強会がもっと楽しくなるように、授業をちゃんと受けて少しは理解できるように努力しなさい」

「うつ……………この……………閉のバーカバーカ！」

「お前よりはバカじゃねえよ」

僕はそう言うと、まだ何かを呟く初陽を無視して授業に集中した。さあ、今日の放課後が楽しみだ。

7日目：祝・夏休み………の前のあれ（後書き）

お待たせしました！蜷です。

さて、地獄なはもう7日目ですがほかの作品を放っておきっぱなしと言う。

二次創作なんてもう何ヶ月放置だよ。

だめ作者ですみません………。

まあでも、来年になるまでには3作品全て一回は更新しようかと思ってますので、長い目で見ていただければ感謝です。

さて、それでは最後に読者の皆様、読了感謝です。皆様あつての地獄なです。これからよろしくお願いします。

ではまた。

8日目：勉強は日々の積み重ねが大切って先生が言ってた（前書き）

多分、今年最後の更新になると思います。

と言うわけで、色々始まりそうな予感がする、未広がりな第八話、始まり始まりにございます。

8日目：勉強は日々の積み重ねが大切って先生が言ってた

人の脳は、例えるなら小さな穴のあいたコップなんじゃないかと思う。

水を注げばちゃんとコップに水はたまるし、水が漏れているにしても、目に見えた減少はよく確認できないだろう。

けれども、ほんのわずかとはいえ、確かに水は減っていく。その減少した分の水が、俗に言う“忘れる”と言うこと何じゃないかと思う。

とまあそんな取り留めのないことを考えつつ、僕は初陽にやらせた小テストの結果を見て、小さく嘆息した。

「数学、英語、古典に関しては出来なくても仕方がないと思ったが……暗記系の教科までまるでダメだとは……」

「うつ、うるさいっ！仕方ないじゃないかっ！」

シャーペンを片手に憤る初陽を見ながら、もう一度テストに目を落とす。

やらせたのは生物の問題。配偶の問題だ。

いつけんややこしそうに思えるところなのだが、複雑な数式は全くなく、数字を表に当てはめればできる問題なのだが……。

「僕、ちゃんとやり方教えたよな？」

「わかってる！だからほら、ちゃんと表が書いてある！」

「書いてあるけど、文字が入ってなきゃ意味ないよ……」

「うう……。だって、せーぶつなのにAとかBとか優性とか劣勢とか、難しくて良くわかんないもん……………」

しゅんとうなだれる初陽。

初陽のコップにはどうやら穴どこるか底がないらしい。水が溜まんない。しかし、だからと言ってやらせない訳にもいかない。

「んじゃ、もっかいーから教えるから頑張ろう？な？」

「うえー……………」

そして再び1からやり方を教えてやる。せめてコップに底ができますように。

「……………おわりん、やけに熱心だねえ」

「そりゃあ熱心にもなるじやろ。閉は初陽殿の父親みたいなものじやしな」

「父親……………まさか近親相かごはっ!？」

「はい、てめえら真面目にやろうなー？」

「はい」「うむ」「何故俺だけ殴られた……………」

うつせえ。自重と言つ言葉の意味を辞書で引いてる。

えー、と。遅ればせながら説明すると、今日は沓名の進言通り、勉強会の真っ最中である。

本当はみんなでわからないところは相談したり、教えあったりする

る手はずでやり始めたのだが、初陽の手が全く動いていないことに気がつき、どこかわからないところでもあるのかと聞いたところ、

「……………勉強のやり方そのものがわからん」

とかのたまいやがったので、急遽勉強のやり方についての講座＋緊急授業を僕とマンツーマンで開始した。よって、

「優勢配偶子って言うのは、配偶子同士をかけ合わせたときにもっとも優先されるもののことで——」

「うぁ……………」

僕は初陽に基礎から勉強を教え、

「留っ守さーん。ここの文法って……………」

「うむ、これは係り結びの法則と言つての——」

「エロス、エロチック、エロティカル……………コレでイけぐぼはあつ！？」

ほか3人は個々で勉強という形になってしまった。

そして、しばらくの間勉強していると、

「ただ今帰りました……………あら、お兄様。お客様ですか？」

「たくさん人がいますー」

晩飯のお使いに行かせておいたうちの妹と居候が帰ってきた。

「2人ともおかえんなさい」

「ただいまです閉さん」

「みなさんは何をしてらっしゃるんですか？」

「勉強会だよべんきょー会。つつても初陽の出来が悪すぎて、今んとここいつ個人の特別講習みたいになってるけどな」

「つつさい！」

「はいテスト中は私語を慎めー」

「ううー……！」

少し涙目になりつつ再び問題に取りかかる初陽。
けれども全くもって鉛筆が動いていない。頑張れよ。

「テスト……ああ、そう言えば担任がそんな事を言っていた気がしますね」

「そんな事って………咲、お前成績大丈夫なのか？」

「そーだぞー………頑張らないと、ナツヤスミもべんきょーだぞー………」

初陽の頭から煙が出始めた。そろそろ限界か。

「ご心配なく。お兄様も私の成績をご存じでしょう？」

「……………そーッスね」

小学生にしか見えない妹が、その薄っぺらな胸板を張る。

見た目に反して、この子の成績は学年トップである。男子からの人気も高く（若干犯罪臭がする）、まさに学園のマスコットなのだ。（アイドルではないのはなんとなく察して下さい）

「……………きゅー……………」

そして初陽爆発、ギブ・アップ。

「初陽ちゃん、爆発したです」

「絵理ちゃん。そんな事言っている場合ですか？あなたもこれから爆発してもらうことになるんですよ？」

「え？」

キラんと咲の目があやしく光った。

「あー……………。前回のテストの出来があまり芳しくなかったからなあ、絵理は」

「えっ、え？」

「では絵理ちゃん。私たちも勉強しましょうか」

「さ、咲ちゃん！？目がこあいですよ！？お、閉さん、助けてくださいー！やー！」

ずるすると、咲に引つ張られつつ絵理がフェードアウトしていく。さながら死刑宣告されたような囚人の気分である。僕はそっと絵理に黙禱を捧げた。

「つてか、絵理達が帰って来たって事は……………」

時計を見やると、すでに6時を回っている。そろそろ外も暗くなってきたことだし、夕飯の準備もしなくては。

「おーい、勉強中止ー。時間だ」

「あれま。もう6時かー」

「そろそろ夕餉の時間かのう」

「やっべ、家に遅くなるって連絡入れてねえ！もう帰らねえと！」

ガチャガチャと、テーブルの上の本やら筆記用具やらを片づける二三四なのだが、明らかにばってん18マークが付いてるアダルトイナ本だった気がするのはいのせいだろうか。きつと保健体育の教科書を見間違えたのだろう。僕らの学年、保体のテスト無いんだけれど。見間違いつたら見間違いなのだ。

「2人はどうする？晩飯食べてくか？たいしたもんは出せねえけど」

「んー…………あたしはそろそろ帰んなきゃだなー。おかーさん、晩ご飯作って待ってるって言ってたし」

「わしは久し振りに閉の作った夕餉をいただくとしようかの。と言

うより、夕餉はいらぬと家に報せてしもうたしの」

と言うことで、留守がうちで夕飯を食べることになり、

「んじゃな、閉。また明日」

「おう、また明日ー。沓名は二三四に襲われんよう気をつけろよー」

「にやはは！わかってるって。二三四の半径30m以内に入らないようにするから大丈夫！」

「俺そんな信用無い！？」

帰宅組の2人は、そんな感じで賑やか(?)に帰っていった。

そして、夕飯の準備を進める間に、留守に初陽の勉強を見てもらうことにした。初陽は最初少し緊張しているようだったが、もうさすがに発作を起こすようなことはない。時折楽しそうな笑い声も聞こえてきていたので、安心して作業する事ができた。

まあ、ちゃんとできるようになるかどうかは別だけど。

「っし。完成っ…………と。初陽ー、悪いけど絵理達呼んできてくれー」

「ん。わかった」

「ならば、わしは配膳を手伝おうかの」

そして留守と協力し、夕飯をテーブルに並べていく。並べ終わると同時に、初陽と咲、そして光彩を失った瞳で虚空を見つめる絵理が現れた。

咲、お前絵理に一体何をしたんだ。

「ふ、ウフ腐腐腐……。この世の地獄というものを味わったのです……………」

「絵理……………お疲れ」

「まだまだですよ絵理ちゃん。食べ終わった後もちゃんと勉強しましょうね？腐腐っ」

「いやぁー……ッ!？」

本当に何をしたんだ。

「閉、そろそろ飯を食わぬか？せっかくの馳走が冷めてしまっ」

「そだな。悪い。……………ほら、咲に絵理。遊ぶのはそれくらいにして早く食おうぜ」

そして各々席につく。

「……………あれ？閉、春人がいないぞ？」

ふと、初陽が人数が足りないことに気づく。

「ああ、なんか今日は夕飯いらないうって連絡来てたから気にしないで良いよ。さ、食べよう」

「……………いただきます!……………」

そして、いつもと違うメンバーでの楽しい夕飯を、僕らは楽しんだ。



夕飯を食い終わって、留守としばらく談笑し、もう遅いからと言って留守は帰っていった。

その後、再び初陽と勉強し、なんとか基礎問題くらいはミスをせずにできるようになった。

「できるようになると楽しいな！生物！」

「まあ、まだまだ基礎だけだね。んじゃ、明日は歴史でもやろうか」

「……………あう……………漢字嫌い……………」

そんなやりとりをしていると、不意に携帯に着信が入った。留守からだった。

「……………もしもし？」

『うむ、閉。先刻ぶりじゃの』

「どうした？こんな時間に……………。忘れ物でもした？」

『いや、そうではない。実はの————母上が、帰って来たのじゃ』

「……………はえ？」

留守の母親……………え、あの人が？

『それでの。何やら母上は閉に会いたいとだだをこねおつてのう……それで相談なのじゃが……………今週末は、わしの屋敷で勉強せぬか？なに、もてなしはきちんとする故、安心せい』

「え、いや、その……………え、マジで行かなきゃダメ？」

『来ぬと言つならば拉致してでも連れてくる……………と、母上は言つておつた』

……………逃げ場無し、ですか。

僕はがつくりとうなだれ、一言一言留守と会話した後電話を切つた。

まさか……………まさか、留守の母親が帰つて来ているとは……………！！

「……………？閉？どうかしたか？」

「……………初陽、土曜日は留守んちに行くぞ」

「え？なんで？つて閉！？何で泣いてるんだ！？え、ちょっと本当にどうした！？」

「大丈夫、大丈夫だから……………しばらく一人にさせて下さい……………」

辞世の句、考えていった方がいいのかなあ？
いぶかしげな顔をする初陽の横で、僕は半ば本気でそんな事を考えるのであった。

とある暗い部屋にて。

月明かりが一筋、その部屋に白い光を落とし、その光の中心に一人の男が佇んでいる。

「…………それは確かな情報なんだな？」

パソコンのディスプレイに向かって、男——終着駅　春人は緊張した声でそう言った。

『ああもちろん。どうやら一匹、魂憑こんつきが生まれたらしい』

その画面に映る女が、春人とは対照的に気だるげな口調で、愚痴でもこぼすかのようにそう呟く。

「絵理ヒトヲを知らない新入りの誤報じゃないんだよな？」

『それは確認済みだ。お前んとこの居候ではないよ……………それに、お前の管轄に近いとはいえ、まだ憑物は別の町にいるらしいしな。これは警報みたいなものだよ』

すると春人は、ようやくその緊張をほどこいた。

絵理が終着駅家に住むようになってから、時たま絵理の憑物化が誤報されて、よく面倒ごとに巻き込まれることが多かったのだが……………今回はどうやら違つらしい。とは言え、この町に侵入された以上、面倒なことには変わりはないのだが。

「なら、いつも通り街中にセットしてあるカメラで異常を探って、せいぜい警戒にあたるせてもらうことにするよ。ご報告どうもありがとうございましたね」

そう言っ、回線を切ろうとした春人だが、

『はたして、それはどうなのかな?』

画面の向こうの女は、そう言っ、薄く笑った。

「……………何が言いたい?」

『いやなに。君はその目撃された憑物の名前を聞いて、その余裕を保ってられるのかなあーと思っただけだ』

ニヤニヤと、挑発するように女は笑う。

「……………じゃあ聞こう、憑物の名は?」

あくまで冷静に、春人は画面の女にその名を尋ねる。
すると、女は顔を引き締めその名を言っ、た。

『蠅の王——ベルゼブブと名乗っていらしいな。すでに、目撃した被師のパーティー四人のうち、2人が死亡。1人が意識不明の重態、報告した一人も下半身麻痺の大けがを負っ、たため、この報告を期に引退するそうだ』

しばらく沈黙した後、春人は静かに回線を切った。
そしてすぐさま数台のパソコンを起動させる。するとそこに、馬

田乃町の風景が細かく映し出されていく。

「おいおい……………久しぶりに、魔王クラスの化け物かよ。冗談キツいぜ全くよお……………！」

春人は、ひきつった笑みを浮かべつつ、そのモニターを確認していく。

「……………いつでも来やがれ蠅野郎。こっちの準備はできてんぞ」

とは言え、ここに来ないことが一番なんだがね、と心で呟き、春人はここに来るやもしれない強大な敵を、ただひたすらに待ち続けるのであった。

8日目：勉強は日々の積み重ねが大切って先生が言ってた（後書き）

と言うわけで、読了感謝です。 蜷です。

前書きにも書いたとおり、多分今年最後の地獄なの更新になるか
と思います。 大掃除とか、餅つきとか、年賀状で忙しいので、多分
.....。

まあ、書けるかもしれないので頑張ります。 はい。
そんな所であとがき、終わり！

少し早いですが、皆さんに最大級のありがとうを込めて！

M e r r y C h r i s t m a s !
a n d
h a p p y n e w y e a r !

ではまた。

9日目：奥様は武将で年増の永遠の17歳（前書き）

今日の神器。レジェンド

鬼切：おにきり源氏に代々伝わる名刀。罪人の首を試し斬りした際に髭ひげきりま
で綺麗に斬れたことから、当初は“髭切”と呼ばれた。そして、源
頼光が所持し、配下の渡辺綱に貸し与えられ、その渡辺綱が、羅生
門で出会った茨木童子という鬼の腕を切り落としたことから、“鬼
切”と呼ばれるようになった。

ほかに“友切”ともきりなどと呼ばれたりもしていた。ちなみにこの刀
は実在し、京都府の北野天満宮に祀られている。

蜘蛛切：くもきりこちらも源氏に代々伝わる名刀。罪人を試し斬りした際
に膝ひざまるまで斬れたことから、“膝丸”と呼ばれた刀である。鬼切と同
様、土蜘蛛という巨大な蜘蛛の妖怪を退治したことから“蜘蛛切”
と呼ばれるようになった。

その後も様々な理由から“吠丸”ほえまるや“薄緑”うすみどりと名前を変えている。
ちなみにこちらにも実在しているとか。

それでは本編の始まり始まりー！

9日目：奥様は武将で年増の永遠の17歳

家出^{いえで}——。

遙か昔、この馬田乃の町が人をも寄せ付けぬ深い山奥だった頃、そこを開拓して一つの集落を作った、戦国から続く旧家である。

しかし、武家でありながらも権力争いなどには興味を持たず、もっぱら自分の領土を守り続け、永きにわたりその村に平和と安寧をもたらしていた。そしてそれは今もなお続いており、馬田乃で家出の名を知らない者は赤子のみ、とわれるほどだ。

と、まあ、そんな馬田乃の風土史は置いといて。

今日は6月最後の日。梅雨は明けていないと言われる今日この頃だが、多少の雲が浮かんでいるだけの青空からは、全く雨の気配は見いだせず、初夏の爽やかな日差しを感じさせる。

そんな日差しの中、6人の人影が、今時珍しい全く舗装のされていない道路——と言うか畦道を、のらりくらりと歩いている。

まあ、僕らのことなだけど。

「……………で、閉。何で急に留守んちに行くことになったんだ？」

小石を蹴りつつ、二三四が尋ねてきた。

「えと、話せば短い事なだけど」

「じゃあ、三行で頼む」

「奴の

母親が

帰ってきた」

そう言つと、二三四だけでなく周りにいた初陽以外のメンバーが、揃つて僕に同情の視線を浴びせてきた。

「閉……………今まで、楽しかったぜ」

「お盆には、ちゃんと帰つて来て下さいね？」

「逝つてらっしゃいなのです。道中、お氣をつけてください」

「おわりん。君のことは絶対に忘れないよ」

「……………ありがとう、みんな」

僕はポロポロと、この世界に残していく人たちを思い涙を流す。しかし、全く状況を理解していない初陽にとっては、このやりとりは理解不能であるようだ。

「……………ちょっと待ってくれ。何で閉が死ぬみたいな展開になつてるんだ？」

「そう言えば、初陽さんは留守さんのお母様にお会いするのは初めてでしたね」

すると咲は一つ咳払いをして語り始めた。

「ええと、留守さんのお母様はなんと言いますか……………、武将なんです」

「ぶしょう……………？髭なのか？」

「よくわかんないボケなんかせんでよい」

思わず僕はつつこんだ。

「いいか？留守んちの母ちゃんは――」

「っ！閉さん！来ました！8時の方向ッ！！」

僕は反射的に飛び退いた。すると、さっきまで僕がいたところに一本の太刀が突き刺さった。

「ちよつとまだ説明途中なんだけど！？」

ツッコミつつ、僕はその刺さっている太刀を引き抜き、かまえる。すると、

「剣の投擲に気付けないようじゃ、まだまだだねえ閉ちゃん！」

どこからともなく声が聞こえてきた。この声の主こそが、刀を投擲した張本人であり、留守の母親である。

「黙って下さい姫さん！って言うか、現代社会においてそんな凶器を気配だけで避けるとか、そんなスキル必要ないですからね！？わかってるんですか！？」

僕はどこにいるのかもわからないその人に、力いっぱい心からの雄叫びをあげる。しかし、楽しげな笑い声が返ってくるだけでその効果はまったくもって無いようだ。

「さてさて閉ちゃん！いつものことだからわかると思うけど、私は今どこにいるでしょーか！！」

いつもの事ながら唐突である。

僕は神経を集中して、その気配を探る。

……………うん。ぜんっぜんわかんない。

「みんな、とりあえず邪魔だつて言うか危ないから、先留守んちに行つてくれ」

「了解。何とか生き残れよ……………閉」

「僕が死ぬわけないだろ？また留守んちで会おう」

しかしこれ、死亡フラグって言っんじゃないかな。

まあでも、これで1人である。もう一度精神を集中させて気配をうかがう。

あたりに聞こえてくるのは、草のざわめきと鳥の声。何か、その中に自然音とは別の何かが無いか、探る。

すると、遙か後方で明らかに風で生じた草木の擦れる音とは違う、生物が草を踏みしめるような音が聞こえた。

「そこか——！！」

身を翻し、音源に向かってダッシュの体勢を取ろうとしたその時！

「はい、ざーんねん」

足を、何かに掴まれた。

そのせいで僕はバランスを崩し、思いつきりすところぶ。

って言うかおい、まさか——！！

「じ、地面の中ですよー！？」

「大正解！姫ちゃん忍法土蜘蛛の術！さあ閉ちゃん、死ぬが良い！」

すてきな笑顔で怖いことを言う！

しかし、その言葉に冗談という物は微塵も入っておらず、真っ直ぐ喉元に向けて鋭い刺突が放たれる。

僕は崩れる体を思いつき捻り、何とかそれを回避する。

そして体ごと捻ったため、掴まれた足の拘束も解ける。そこですかさず体制を直し、まだ地面に半身を埋めている姫さんに向かって大上段に構えた刀を振り下ろす！

しかし当たり前と言うべきか、簡単に白刃取りされてしまう。しかも片手で。

そして再び、今度は膝の腱に刀が横薙に振るわれる。これはもうよけられないか！？

「ちっ…………くしょ！」

僕は諦めて自分の刀を離し、思いつき後方に飛んだ。

しかし完璧には避けられなかったようで、ジーンズの膝の部分が切り裂かれ、膝の薄皮が綺麗に裂かれた。

「毎度毎度、本当に冗談抜きですね！？ズボンが格好いい感じに切れたじゃないですか！」

「だって本気でやらなきゃ負けちゃうもん！」

「四十代のおばさんが意地張ってんじゃねえーよ!!」

しかし、その言葉が姫さんの闘争心に火をつけた。やべ。

「むむむうー! 閉ちやんつてば人のことをおばさん呼ばわりしてー!! 心は永遠の17歳なんだからね!?」

「あんたは見た目も一応17歳なんだからね!?」

しかし、既に僕の言葉は姫さんには届かない。

僕が離れた刀を両手に構え、二刀流の構えをとる。やべえ、本気だこの人!

「明日の朝日を拝めると思わないことだね閉ちやん」

「ちよつと姫さん、僕丸腰——!!」

「問答無用! 死に晒せー!!」

二振りの暴風が迫ってくる。

僕はひたすらバックステップで飛び退いてゆき、やれやれとため息をつきつつ、自前の刀を顕現させる。

「神器——レシエン鬼斬、おにぎり蜘蛛斬、くもぎり顕現!!」

そして、後退していたその足を止めて、前に踏み込む!!

「はあああああ!!」

「ぢえりやあああああ!!」

二つの影が交錯し——勝敗が、決した。



出血量について。

循環している血液量の約40%の血が短期間に無くなると死ぬらしい。

ちなみに、それは死に至るという意味だけで、意識についてはもっと前の段階で無くなるみたいだ。

それ故にリストカットなんかでは、血が流れる前に傷が塞がってしまうのでなかなか死ねないらしい。

「生きてる」

「ダイジョブか！？閉」

「輸血が間に合ってよかったのう……………」

どうやら僕は、大変危険な状態だったらしかった。生きてるって素晴らしい。

「死ねばよかったのにね」

「まだ死にたくありません！」

ちつくしう。無邪気な笑顔で洒落にならんことを言ってくれるぜ！

「でもまあ、おわりんが無事でよかったよ」

「謔言のように天国のお母さんがーとか言い始めたときは、ボクもうだめかと思いましたです」

「閉が死んでも俺がちゃんと初陽ちゃんたちの面倒を見てやるから、安心だな」

「そうなった場合、私はお兄様の後を追うため舌を噛み切ります」

「本当に信用ねえなあ俺！でもそんなクールな咲タンもイイ！！」

「変態ですね」

咲だけでなく、他の女子メンバーまでもが蔑んだような眼差しを送っている。

まあ、そんな変態は放っておくとして。

「ところで閉。この人って留守のお姉さんか何か？」

問題は、先程から語尾に《ほし》が目立つ、二本おさげのこのお方。

「その美少女は初めましてだね？私は家出 姫紗^{ひめさ}、姫ちゃんって呼んでね？年齢は4………17歳です！ヨロシクね」

「え………えと？」

「初陽。飲まれたら負けだ。まあ簡単に言っと、このおっさんの母

親って事だよ」

「え…………えええええ！？」

初陽が驚くのはもつともである。

先程初陽が言ったとおり、姫紗さんの外見年齢は凄まじく若い。いやもうただ若いだけじゃない。幼いと言っても良いくらいだ。

外見は沓名と同じくらい……………まあ、およそ17歳。しかし、二つの尻尾のせいで、さらにそこからマイナス二才くらいの外見に見える。

「なんかもう、詩華ちゃんくらいから成長が止まっちゃってね？今でも町中歩くとナンパされるのよー」

困ったように言う姫紗さん。けどさ、あんたの場合、成長が止まったって言うよりも、年をとらなくなったの間違いだろうが。

「まあとにかくこれからヨロシクね」

そして姫紗さんは、きゃぴって言う効果音がしそうなほどのウィンクをしゃがった。

違和感がないのがム力つくね

まずは音。

耳をすませば聞こえてくる。

何の音かはわからない。

次は雑音。

意識せずとも聞こえてくる。

何の音かはわからない。

最後に騒音。

五月蠅い《うるさい》。

[illegible]

五月蠅い。

「ウルサイ」

何の音かは、わからない。

9日目：奥様は武将で年増の永遠の17歳（後書き）

これから年増……げふんげふん。姫紗さんをよろしくおねがいします。蜷です。

今回は予定通りに更新できました。これ以降は、予定通りに更新できるか不明です。神のみぞ知るところです。すみません。

さて、何やら本編のほうが臭ってきていますが、まだです。まだ来ません。って言うか、出すタイミングがつかめない。いつんなったら戦闘に入るんだろう。

まあとりあえず、次回に期待しててください。頑張りますから。超頑張りますから。

さて、それでは最後に読んでくれた読者の方々に最上級の感謝を。また次の話でお会いできることを願います。

ではまた。

10日目：サービスと血液と罰ゲーム付き大富豪（前書き）

タイトルばかりでなく、本文まで長くなった。
だけど後悔はしていない。

それではどーぞ。

10日目：サービスと血液と罰ゲーム付き大富豪

「なあ留守ー」

「なんじゃー？」

「僕達つてここに勉強しに来たんだよなー」

「当初の予定であればその通りじゃのー」

「じゃあ――」

きょろりと辺りを見回す。

隣をみれば、のほほんとした表情で湯船につかっているオッサン

――じゃなくて留守。

後ろを見れば、これ、なんてシャンプーのCM？って言いたくなるほどカッコ良く頭を洗う二三四。

上を見れば、白い湯気に朧気な黄色い光を放つまあるい月。

「なんで僕達温泉にはいつてんのー？」

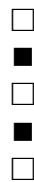
「何でじゃろうなー？」

「でもさー」

「そうじゃのー」

「「いいゆだねえー（じゃのー）」

僕は、なぜか温泉に入っていた。



さかのぼること数時間前。

奇跡的な生還を果たした僕は、早速ここに来た目的——そう、“勉強会”を開始しようとした。

妖しく笑う咲、恐怖に怯える絵理、オトナの保健体育の教科書を取り出す二三四を横目に、留守、沓名、初陽、僕の四人が和気藹々と勉強を始めようとすると、

「実はこの屋敷に爆弾を仕掛けた」

と言う姫紗さんの本当の爆弾発言のせいで、勉強どころではなくなってしまったのだった。

「はははっ。まっさかあ」

朗らかな笑みで、初陽はそれを否定した。しかし、

「あっはは。本当だよ？起爆まであと一時間。威力的にはこんなもんさ」

と言ってどこからともなく取り出した赤いボタンをカチツと押すと、窓の外から見えていた屋敷の一部が木っ端みじんに爆散し、みんなの笑顔が凍り付いた。

昔からそうだった……この人は、嘘をつかない人だったけ……

…。一度、僕は口座番号を売っちゃったって言われて、冗談だろうなーと思っていただけでも、本当に売られていたらしく、全財産ロストしたことがあったからなあ……。 （父さんの能力で番号はしっかり書き換えられ、無くなったお金に関してはきっちり請求したけどね）

今回もきつと、マジなんだろうなあ……。！！

「ちなみに使用人たちはみんな避難させたので、安全面はばっちりです」

「僕らの命の安全を気にしてください！！」

「爆弾を全部解除すれば良いだけじゃない？あ、ちなみに爆弾については使用人達に隠させたから私もどこにあるのかはわからないよん」

うわあ……。うわあああああああ。うわあああああああ
あああああああ本日二度目の生命の危機iiiiiiiiiiii！！

「これぞロシアンルーレット？」

「ただの爆弾テロだから！ちよっ！みんな逃げてえええ！！」

持ってきた荷物を抱え込んで、我先にと家を飛び出そうとする僕達。しかし、

「あ、今窓開けたり玄関開けたりすると爆発するよ？」

その一言で、再び場が凍り付いた。そして、誰かのため息が聞こえたところで、

「宝探しかー。この家無駄に広いから面倒なんだよなー」「では、わしらは北館を探すとしてうぞ、二三四」「んじゃ、あたし初陽ちゃん和西館見てくるわー」「えっ、ちよっ、ええっ!?!」「それじゃあ私と絵理ちゃんは東館を見えます」「ですー。閉さん、南館は頼みましたです」「うわあああああああああ!了解いいいいいい!」

と言う緊迫した空気で宝探し開始。
刻々と迫る制限時間。

「うおっ、留守お前んち今日カレーかよ」

「うむ。久々に母上がつくってくれたのじゃよ」

訪れる混乱。

「んー、んにくくくっ!もう少し……」

「ああーもうっ!ー!棚の上を必死に覗こうと頑張っつて背伸びしちゃ
う初陽ちゃんカワイー!ー!お持ち帰りしたいいー!ー!」

「わっ!?!こ、こらっ!抱きつかない!」

引き裂かれる友情。

「ふへえー!……このマッサージ機気持ちいいのですー」

「……肩をたたく部分が頭に当たって凄く痛いです……ぐすっ」

「肩こり解消なのですー」

「…………ぐすつ。大きくなりたい」

泣き喚く家族。

「ふうわああああああああああ……………」。
「何やってんだろう、僕」

失われる何か。

「もー…………みんなちゃんと分かりにくいところに隠してねって言ったのに……………」

そして、そんなこんなで姫紗さんによって解除された全ての爆弾。そして気づけば日が落ちて夜となり、風呂でもどうだと言われて冒頭のあるに至ったのだった。

□ ■ □ ■ □

「うわああああああああー……………！！！」

「むおっ！？どうした閉！撮影した変死体が、実は自分の知り合いじゃったと言うことが判明した時のような叫び声をあげよって……」

「嫌に具体的なたとえだな。とりあえず、そんな場面に出くわした

こと自体ないから安心しろ。少し悟りを開いただけだよ」

「無我の境地というやつかの？わしには我を見失ったように見えたのじゃが……………」

「とりあえず、俺はお前らが馬鹿なんじゃないかと思える機会を目の当たりにして驚いたわ」

なんと、二三四につっこまれてしまった。

さて、それによって冷静になった僕らは、心地よい風呂の湯に、もう一度幸せのため息をつく。

「……………おっさんだなあ2人とも」

「おい待て。留守はわかるが僕までおっさんとはどういふことだ」

「閉、わしも流石に怒るときは怒るのじゃぞ？」

「ぐめんよ父さん」

「殴ってもよいかの？」

殴られた。痛い。

「この風呂には頭のネジでもゆるめる効能でもあんのか？」

「安心しろ二三四。僕はいたって正常だ。頭のネジがぶっ飛んでい
るお前よりも」

「俺はお前らにどういふ風に見られているのかが知りたい！」

そついう風だろ。知つとけよ。

「つて言うか俺が言いたいのはそのついう事じゃねえんだよ！思春期男子たるもの、風呂場と言えばやることがあるだろう！？」

「風呂場でやること………？」

「露天じゃし、月見で一杯やるのかの？」

「黙れおっさん」

「むうっ！？何故二三四までもわしをおっさん呼ばわりするのじゃ！？」

本気でびっくりしている留守に、僕は心底びっくりした。

つーか未成年が酒飲むなよ。いや、見た目はもう中年だけどさ。

二三四はそんな留守の叫びを華麗にスルーし、やれやれとかぶりを振った。

「まったく………お前らの枯れ具合にはほんとと呆れるぜ。いいか？風呂場つーのは——」

ぐるつと体を翻し、斜め45度ほど上方を指差した。

そして二三四は堂々と、声高に宣言する。

「覗きをするための場所ぶええ！！？」

「犯罪に片足つっこもつとしてんじゃねえよ。足を突っ込むのは足湯だけにしとけ」

僕は素早く二三四を蹴り飛ばして風呂に叩き込み、その背中にかかって二三四を沈める。

「ちよっ、おまっごぼがつ！！おぼれ……………溺れる……………ごぼごぼ！！！」

流石に死なれては困るので、僕は仕方なく二三四の上から退いた。

「閉てめえ！！俺を殺す気か！？」

「死なない程度に懲らしめる気ではいたな」

「ふざけるなよ！？俺を懲らしめて良いのは美人婦警さんだけだ！」

「ぬしの場合、警察の世話になる前に、沓名あたりに天誅を下されと思うのじゃがのう……………」

「それはそれで望むところだっ！！」

ダメだこの変態。早く何とかしないと。

「それよりもお前らっ！！クラスメイト&後輩の女子の入浴シーンが、この一枚の柵の向こう側にあるんだぞ！？わかつているのか！？現役女子高生と！女子中学生と！美少女人妻の裸が！この世の天国が！壁を隔てた向こう側に存在しているんだぜ！？こんな物を知っていて、覗かないなんていう選択肢は存在しないと言うのか！？」

「お前にはその後の未来における選択肢が見えていないのか！？」

しかし、何を言っても思春期男子………否、二三四は止まることを知らなかった。せいよくのかたまり

「ふふん、いいさ！お前らがキリストの生まれ変わりだというならば、俺は俺のままで良い！俺は欲望に忠実に！自分のやりたいことをやるまでだ！」

「なんか格好いい感じのこと言ってるように見えるけど、支離滅裂だしお前の欲望は犯罪だ！！」

しかし、二三四はバシャバシャと風呂の仕切に近づき、そのまま器用にそれを登っていく。つつーか足をかける溝とか無いのによく登れるな。これが変態の欲望がなせる技なのか。

「……………のう、閉よ」

「何？留守……………」

「お前は、何も気づかないのかの？」

「え？なにが？」

「……………そうか」

留守は小さく呟くと、そそくさと脱衣場に姿を消した。

……………？いったいどうしたというのか。僕は少しの疑問を抱きつつ、再び二三四の方を見る。

いくら変態であろうと、流石にカエルのごとく壁をはい上がるのは難しいようで、半分ほどしか登れていない。

しかし、二三四はしっかりと、着実に上に上にと登ってゆく。

「ハア…………ハア…………裸、上気した頬、この世の天国ッ…………！」

そしてついに、その手が仕切の一番上を掴んだ。ついに、奴の言う天国とやらは目の前だ。

だがな、二三四。お前は、実は致命的なミスをしていることに気がついていない。

「ぐへへへ……………ついに俺は天国……………に……………」

二三四が固まった。そりゃあそうだ。

「……………何故、みなさんバスタオルを付けているのでござるか」

「二三四、あんたの行動くらい予測済みよ。って言うか、あんな馬鹿でかい声で覗く覗く叫んでるのに、ばれないとでも思ってたの？このど馬鹿」

沓名が、僕の予想した通りの状況である事をつらつらと説明してくれた。

二三四のミス。それは、お前がオープンな変態だったという事だ。

「くそおおおおおおお！！なんと言うことだッッッ……………」

……………まあでも、その格好もそれはそれで！」

「…………天誅…………！！……………」

「あらはんっ！？？」

すここここんつ！と、五つの桶が二三四の額に良い音をたててコンボした。

そして、二三四の体がぐらりとよろめき落ちそうになる。僕は静かに胸の前で十字を切って黙禱を捧げた。

だから、この後に起こったことには、気づく事ができなかった。

「あれっ？」

「およ？」

「です？」

「あら？」

「まあ」

メキメキと何かが折れる音。そして素っ頓狂な声が五つ。何事かと目を開けると――。

「うげ！？」

仕切が倒れ始めていた。

「うわっ――」

僕はすかさず風呂の端まで移動してそれをギリギリでかわす。二三四はちょうど、仕切の下敷きになったらしい。

僕は思わず二三四がいるであろう場所を睨みつけ、叫ぶ。

「二三四！お前なに人んちの風呂を壊して……………やが……………るあ？」

さて。仕切の向こう側は何だったかな？　そう、女風呂だ。
だから二三四は必死こいてその高い仕切を登ろうとした。
けど、今はどうだろう。

その境界は、二三四によって破られて、双方から丸見えの状態になっっている。

そして——ああ、これがお約束という奴なのか。仕切が倒れた衝撃で、女の子達が巻いていたタオルが落ちてゆく！そして世界の流れが緩やかになり、そうなった以上、僕はそれから目を離せなくなった。

上気して桜色に染まっている肌、まだ夏の日に焼かれていない白くなめらかなそれは、二三四が必死に覗こうと頑張っていたのも、理解できなくはないと思えるような、何とも言えない艶めかしさがあつた。

そしてはだけてゆく毎に増えていくその白い肌。そしてついに、その身を包んでいる布が取り払われ、五人の美少女の裸体がついに露わになり——。

「……………きゃあああああああああああああ！！……………」

「あら——」

世界が、戻る。

そしてこれまでの時間が、その遅れを取り戻そうとしたかのような劇的な加速を見せた。簡単に言えば、

僕は赤く染まりゆく熱いくらいのお湯の底に沈んでいった。

何が起きたかわからなかった。一瞬の間に、僕は血を流していた。

唯一わかったことは――。

「あはははは」

木桶の代わりに、史上最強の主婦が刀を持っていたことくらいだった。

船越さん、どうやら星は、こいつのようです……………よ……………。

□ ■ □ ■ □

血液というのは以下略。

PS、今回はのぼせたことによってダメージがさつきより大きいです。

「留守……………お前は予測していたというのか？」

「うむ。少々あの仕切は古くなっていたゆえ、あそこにおれば、わしも血を見ることになっていたのう」

崖に追い詰めた犯人に振り返りにあっているあの人の夢を見た気がする今日このごろ。

騒ぎを聞きつけた家出家の使用人の方々の速やかな対応によって、僕は何とか一命を取り留めた。二三四は僕みたいな血を見るようなことはなかったので、今は別室で姫さんによる調k――お仕置きを受けている。

「お兄様、大丈夫ですか？」

少し心配そうに尋ねてきた咲。

流星は僕の妹だ。ああいった状況になると、なぜか全面的に男に非があるという事で責められるのに、僕の心配をしてくれるとは。でもさー……………」

「心配してくれるくらいなら、姫さんを止めてくれよ……………」

「私もそう言う年頃ですし、多少の恥じらいもありますので、一太刀くらい別に……………」

「良くないよ！？僕じゃなきゃ死ぬからね！？」

「だからですよ、お兄様♪」

そう言うてにつこりと微笑んだ咲。

ちつくしう。清々しすぎて逆に何も言つ気にならない！

「ところで……………お前ら何してんの？」

よつこらと僕は体を起こす。

咲の手にはランプが握られている。絵理、沓名、そして初陽も同様にランプ束を持っていた。

「大富豪ですよー閉さん。閉さんもやりますですか？」

扇状に広げたランプ束をひらひらさせる絵理。いや、待てよ。

「お前ら、ここに来た目的忘れてない？」

「遊びに来たんじゃなかったでしたっけ？ねえ、絵理ちゃん？」

「はいです！」

「ちげえよ！勉強しに来たんだろが！？」

思わず怒鳴る。けども、

「まあまあわりん。今日くらいは遊んじゃおうよ。留守が良ければ泊めてくれるって言ってるし、みんなで泊まってまた明日にでもやれば」

「沓名……………いや、でもなあ！」

「それに、1人止めるにやめられない子がいるし……………」

「はあ……………？それは——」

誰だよ、と聞く前に後ろ首を掴まれて、無理矢理畳の上に叩きつけられた。

何事！？と思い、そのやった本人を見ると、

「……………閉。お前も参加しろ」

「……………え？何で？」

初陽が、凄い睨んでいた。

「……………いいから」

「いや、だから、僕いまそんな気分じゃ……………」

「いいから！つべこべ言わずに参加しろ！」

「は、はいっ！」

あまりの剣幕に、僕は思わず頷いてしまった。

しかし、僕はふと思い当たる事があったので沓名に耳打ちした。

「おい、沓名。もしかしくなくてもやめられない張本人って………！」

「うん………初陽ちゃん、スッゴい負けず嫌いみたいです。おわりんが起きるまでの調子で、止めるに止めれなくて………」

たはは………と、沓名は頭をかいた。だったら、わざと負けてやれば？と言ったが、負ける度に泣きそうになる初陽が可愛くてーとかぬかしやがった。

てめえのがひでえよ。色々と。

「ま、まあでも、何回かやってれば、そのうち一回は勝でしょー！」

「………ちなみに、初陽の最下位^{まけた}回数？」

「………19回連続で最下位。次で20回連続になってしまうかもデス」

「うわぁ………」

可能性、ひつくうー！。

しかし、勝たせねばなるまい。と言うことは初陽の勝率を少しで

も上げなくては！

「…………留守、お前もやるうぜ。大富豪」

「わしもか？ いやしかし、六人で大富豪なぞ面白いのかの？」

面白くなって良い。初陽が勝てればいいのだから。

長年のつき合いによって体得したアイコンタクトでそう伝えようと、少し呆れながらも承諾してくれた。

僕は人数分のカードを配る初陽を見て、連敗記録を止めようと決意した。

僕ではなく、初陽のだけど。

「はぁ…………それじゃ、始めようか」

父さんに連絡しとかなきゃなーと頭の片隅で考えつつ、僕は配られたカードに目を通すのであった。

□ ■ □ ■ □

「ジョーカー！」

「残念スペ3っ！ カードを流して4を二枚っ！ あがりだよん！」

「う……………」

「私の番ですね。6を二枚で私もあがりです」

「ひう……………」

「ボクはちょうどキングが二枚であがりなのです!」

「あ……………」

「む……………わしは、パスじゃな」

「僕も」

「パスに決まってるだろ!」

「となると、絵理殿があがってしまったので、わしの番じゃな。
八切りで6を三枚。あがりじゃ」

「……………3を三枚の砂嵐でカードを流して、A。で、僕もあがり…
……………」

「……………ふえ……………」

よ……………よっええええええええええ!!
初陽さん超弱え!

カードの引きが悪いとかじゃない。むしろ、僕は10以上のカード
を持っていなかったのに対して、あいつもっと強いのは持ってただ
ろ!? 出し方が下手すぎる!!

「……………は、初陽? げ、元気出せ? な?」

「うわああああん! 閉のバーカ!!」

泣いた。完璧に泣いた。

「初陽ちゃん……………可愛い!!」

「お前いい加減にせえよ」

「およ、だったらおわりんが負けてあげれば良かったじゃん？」

「……………言い返せねえ」

しかし、これで20連続大貧民か……………。都落ち無しカード交換も無いらしいので、初陽以外の三人の順位は変動しているらしいのだが……………初陽、恐ろしい子！

「もう一回だ！」

「いや、いい加減もうやめませんか？私、いい加減疲れました……………ふあ」

「ボクもなのです……………くあ」

咲と絵理が、揃って欠伸をする。何か小動物みたいで癒される。けれども、初陽は悔しそうに唸るばかりで、そんな暇はなさげだった。

「初陽……………そうは言ってもそろそろ時間が時間だよ。明日は勉強する予定なんだし」

時計を見れば、もうすでに11時を回っている。気絶していたとは言っても、血が足りないせいか非常に眠い。

「うう~~~~」

「はぁ……………」

負けず嫌いには困ったものだ。思わず溜め息がこぼれる。
いったいどうしたものか……………」

「それじゃあ、次から罰ゲームを作ればいいんじゃない？」

「姫さん……………無理矢理語尾に星を付けないでくれませんか？意外とウザイです」

「そりゃあ失礼」

「今の米印どうやった!？」

「いいえ、ア。ルです」

「黙れ。凄い勢いで黙れ。だったら星でいい」

なんだかんだで二三四の調々——げふんげふんお仕置きを終えた姫さんが、くだんの二三四を引きずりつつ、部屋に現れた。

二三四の状態については——言わないでおこう。とりあえず、マンガとかなら規制がかかる状態だ。人が物になってやがる。

「まあ二三四は放置するとして。罰ゲームって何ですか、姫さん」

「あっはは それは、次のゲームで大富豪になれなかった人は一位の命令を何でも聞くんというやつさ」

許可がおりたために星の数が増えた。

まあそれは良いとして、姫さんの提案はなかなか妙案だ。

この大富豪は、初陽が勝つか、疲れて眠ってしまうまで続くだろう。しかし、後者のようなことを期待したら、多分、夜が明けてしまうであろう。そうなっては最悪だ。

しかし、今回は罰ゲームとして一位の命令を何でも聞くというルールがある。

すると、一位になったやつが『大富豪を止める』とでも言えば強制的にゲームは終了できる。そして初陽が一位になれば一位になったで、初陽の命令を受け、自然な流れでこの大富豪を終了させることができる！

つまりは、どう転んでも次の一戦が最終戦になるのだ！

ありがとう姫さん！僕、今日初めてあなたに感謝したいと思います。

「罰ゲームつきかぁー。面白そうだね！のった！」

「わたしは勝つまでやるからな！」

ノリの良い一人と、負けず嫌いな一人はやる気満々だ。

「私は一抜けします……………眠いです……………」

「ボクもなのです」

「あ、そーだ。マイ・サンよ。あんたはこのお友達を治療しといたげて？あんたの代わりに私が入るから」

「承知した。……………治療してどうこうなりそうな状態ではない気が

するが、なんとかしよう」

咲、絵理、留守はそれぞれの理由で抜けていった。あのままだと人数がかなり増えてしまうので、僕は何も言わなかった。

そして留守の代わりに姫さんを交えて、4人でプレイする事となった。

「あ、ちなみに大貧民には別個に罰ゲームを付けるからね」

………何やら、不吉な予感を残して。

□ ■ □ ■ □

様々なローカルルールの存在する大富豪において、ほぼ確実に共通して存在するルールは“革命”、または“クーデター”らしい。ちなみに、効果はどちらも同じである。

とまあ、どうでも良い豆知識はおいといて、僕は自分の手札を確認した。

ジョーカーは無いが、ジョーカーに対しての切り札となるスペードの3が手札にあった。

「じゃあ初陽ちゃんが一番最初で良いよ」

「そうか？じゃあこれだ！」

するといきなり初陽はジョーカーを出した。馬鹿なのか。僕はスペードの3でそれを切る。

「閉の意地悪うー！」

「いや、ジョーカーを単体で出す馬鹿には言われたかない」

とまあそんなやりとりを皮切りに、僕らはどんどん手札を減らしていく…………ハズ、なんだけど…………。

「閉ちゃん？あなたの番だよ」

「…………パス」

おかしい。最初に3を出してから、カードを出せた回数が数えるほどしかない。

あの初陽でさえ、残りの手札が5枚しかないのにこっちは十枚はあるんだけど。

「他のみんなもパスかしら？じゃー、八切りで3！あっがりー」

そして、僕の隣にいた姫さんが大富豪となった。

「…………姫さん、何か仕込みました？」

「考えすぎだよ閉ちゃん。そのメガネに反射した光でカードが丸見え——とかそんな事はないから安心して？」

「ひでえ！だからなのか！」

僕の出せるカードをことごとく封殺して来やがってたのも、偶然ではないというのか！？

だがまあ、大丈夫だ。結局初陽が大富豪になることはなかったが、

姫さんはきつと『さつさと寝ろ』とでも命令してくれるはずだ。

僕はひとまず胸をなで下ろし、姫さんが最後に出したカードの上にカードを出す。

「それで良いの？おわりん。ほい、あたしも八切ってK出してあがり！ビリ争いは二人に任せた！」

「うあ……………やられた」

「むう……………」

僕と初陽はそろって渋い顔をした。

まあしかし、今更勝敗はどうでもいい。とにかく大富豪が終了すれば――。

「ところで姫ちゃん。ビリに対する罰ゲームって何にするの？」

「ん……………まだ決めてないけど、閉ちゃんが負けた場合はメイドでご奉仕かしら」

前言撤回、負けられない理由ができた。

「ちょっと姫さんどういう事ですか！？よりによって、なぜメイド！？」

「羞恥するかわいい閉ちゃんを見たくつてえ」

「ふざける！あと僕は可愛くないです！」

「お兄様は可愛いです………むにゃ……………」

「咲、お前寝てないだろ!？」

「ボクはメイドじゃなくてバニーもありますです!………
………」

「お前もか! って言うかこの部屋に僕の味方はいないのか!！」

様々な方面からくる発言に、思わずツツコミを入れる。が、しかし今はそんなときではない。何としてでも、大貧民になることだけは回避しなくては!!

「キング……… 出せない。パスだ」

するとここで、初陽が詩華が最後に出したカードをパスした。ここでたたみかけなければ、僕の敗北は決してしまう。勝たないと!!

(悪いな初陽!僕はもう、負けるわけにはいかないんだ!)

僕はすかさずAを一枚出す。当然のこと、初陽はパスだ。

それを確認してカードを流し、僕は自分の手札を確認した後、その最後手段に移った。

「革命だ!」

僕が出したのは四枚のJ。今の手札でもっとも強力なカードだ。そして残りの僕の手札は七以下の弱カードのみ。

いくら手札が少なからうが、ゲーム終盤の中途半端に強いカードしかなくなっただであらう初陽に、負けるはずはない!

「どうだ初陽！これで僕の――」

勝ちだ。と、思ったら…………。

「革命返し」

「えっ」

なんと、初陽は四枚のカードを出し返してきたのだった。しかも、そんな、まさか！

「お前…………ジョーカーを、二枚持っていたのか…………」

そこに出揃っていたのは、三枚の微笑みを浮かべるQと、意地悪そうな嘲笑を浮かべるジョーカーの姿が。

「まさか、最初にジョーカー出したのって…………」

「スピードの3に毎回やられていたからな。炙り出したんだ」

なんと、何という策士！まさか、一番最初のあれは、演技だったというのか！？

「……………って、あれ？だったらお前うまく考えれば今回大富豪になれたんじゃない……………？手札も結構よかったんだろ？」

僕が思わずそう口走ると、

「……………あ」

思うところがあつたらしい。

ポカンと口を開けた初陽は、みるみる真っ赤になっていき――。

「うっさいバーカ！バーカバーカ！シネ！！」

「おうつ！？」

ブンブンと腕を振り回して、最後の一枚となったカードを投げつけてきた。

見事に眉間に突き刺さったカードに描かれていたのは、Kの凛々しい顔だった。

「それじゃあ、今日はお開きにしましょうか　あ、これは命令だからね」

そして姫さんの言葉で、この終われない大富豪は終了した。

さあ、明日は勉強会だ。さっさと寝て英気を養おうか――。

「あ、閉ちゃんは衣装合わせがあるから一緒について来てね――」

「明日は八時頃から始めようかな。歴史をやるっていったけど、最初は生物の復習でもさせようか。ああ忙しい。明日は遊んでる暇なんて――」

「えいつ――」

「げふつう……………」

薄れゆく意識の中、僕はずるずるとどこかに引きずられていくの

であつたのだつた。

□ ■ □ ■ □

翌日――。

「閉ちゃん。肩揉んでー？」

「嫌ですよ！勉強の最中です！」

「閉、だったら俺に奉仕してもいいんだぜ？おもに下半しぶるぽっほお！？」

「黙れ馬鹿！」

「初陽ちゃんも可愛いけれど、おわりんも十分可愛い！えいつ！」

「ちよっ……………なにスカートを捲つて……………！きゃん！？」

「お兄様……………いえお姉様！ハアハアハアハア！」

「ちよっ……………咲イ！お前何変なところさわつて――！！！」

「咲ちゃんずるいのです！ボクもボクもーなのです！」

「うおおおおい！やめろっつーに！」

「ぜんっぜん、勉強どころじゃねえ！！！」

「大変じゃのう、閉」

「自業自得だ。ふんっ」

「これこれ初陽殿、また同じところを間違っておるぞ?」

「あう……………」

まあ、一部そうでもないみたいなんだけど。
でもまあ、とりあえず――。

「てめえら、勉強しやがれえー……!!!!」

辱めを受けつつ、僕は心からそう叫ぶのであった。



『春人、悪い知らせだよ』

「なんだよ、急に……………」

『例の魂憑きの件で、被害者^{ひがいしや}がでた』

それを聞いて、春人は陰鬱なため息をついた。

「そつか……………そりゃ、残念だな」

『おいおい春人。なに人事みたいに言ってるんだい？君の管轄内のことなんだぞ？』

「……………は？」

画面の人影に、思わず聞き返す。

「俺の、管轄で？……………馬鹿な。町への入り口では、そんな人影見なかったぞ！？」

『しかし、事実は事実だ。諜報の奴らが喰い荒らされたような身元不明の死体があがっている』

「そんな……………嘘だ！！」

『嘘ではない。事実だ』

春人は急いで町のカメラの映像を探る。しかし、どこも平和そうな人々の日常が繰り返し映し出されている。

そう、繰り返し、映し出されていた。

「なっ……………」

『？どうしたんだい？』

「……………やられた。町のカメラに細工されていたみたいだ」

『……………なんだって？』

言葉に感情をほとんど表さなかった影の言葉に、初めて焦りのようなものが混じった。

春人は急いでカメラの復帰をしようとするが、できない。

「くそっ……………!!」

春人は苛立ちを隠せずに、拳をキーボードに叩きつける。

不甲斐ない。まさか、この俺が、情報に裏切られることになるうとは。

怒りに震える春人を、人影はなだめ始める。

『まあそこまで自分を責めるな。起こってしまったものは仕方がない。憑物とは災害みたいなものだ……………すべてを未然に防ぐことはできん』

「……………ああ、わかってる。わかってるさ」

だが、それでも。自分のミスが無ければ、犠牲者が出ることは無かったのに。

『なら、次はそうならないようにすればいい。だろう？春人』

人影はそう言い残すと、パソコンに一枚の写真と地図のようなものを写しだした。

『その地図に描いてある×印が被害のあった場所だ。時間はまだそんなにたつてはいない。今からでも、お前の子供に探らせる。特に、お前の息子は適任だろうしな。ちなみに写真は被害者のものだ。供養するなり身元を割るなり好きにしろ』

「ああ、そうさせてもらつよ」

そして通信を切り、地図と写真に目を通して、傍らにある携帯を手取る。

発信先は——終着駅 閉。

『もしもし?』

「遅いぞ閉。ワンコールで出る」

『んなむちな……ところで、なんか用?』

「ああ、大至急向かってほしいところがある」

真面目な声で春人が言うと、電話ごしでも、なにやら閉の空気が変わったような気配がした。

春人は表情を引き締め、それを伝える。

「魂憑きを、浄化するぞ」

10日目：サービスと血液と罰ゲーム付き大富豪（後書き）

本当は昨日のうちにあげるつもりだったのに、1日遅れてしまいました。すみません。蛭です。

言い訳させていただくと……書いてたら、楽しくなりすぎてしまいました。

2話構成とかだったらもっと早い段階でできていたんですが……
…2話も続くギャグってどうよ？と思ひまして、書きたいことをだら書いてたら、まれに見る長さに。すみません……。

……まあ、ラノベを買いすぎたというのも理由の一つですが、
って言うか、理由はほとんどこっちですが。すみません。

まあ謝つてばかりなのもなんなので、ここで感謝を。いつも最後まで読んでくださる方、本当にありがとうございます。

それでは次は、来週の水曜日あたりにでもお会いできればお会いしましょう。

ではまた。

11日目：喰らう蠅（前書き）

今日の神器。

↑魔法の絨毯【マホウノジュウタン】

人を乗せて空中を飛ぶ絨毯で、『千夜一夜物語』の『アフマッド王子と妖精パリ・バヌー』や『バイバルス王と警察隊長たちの物語』に登場する。

神器じゃない？とか思うかもしれないけれども、神秘的なアイテムと言うことで許してください。

↑レーヴァテイン【レーヴァテイン】

“裏切りの枝”という意味を持つ武器で、北欧神話の中でも登場頻度が少なく、その全容はよく知られていない。冥界の門の下で亜神ロキが“魔法文字であるルーンを彫って作った魔法の剣”だとされている。

なお、“枝”というのは古い北欧の詩では剣を意味する隠喩表現としてよく使われるらしいのだが、剣のみに限らないらしく、杖や槍と解釈している資料もある。ちなみに本編では剣として扱っており、主人公のメイン武装の一つである。

11日目：喰らう蠅

メイドでご奉仕をさせられ、その地獄のような時間が終了し、更衣室で着替えていると、父さんからの着信があった。

面倒だと思いつつそれに出ると、

『遅いぞ閉。ワンコールで出る』

「んなむちな」

いきなり理不尽にキレられた。

普通なら文句の一つでも言ってやるところだが、父さんの様子がおかしいことに気がつき、僕は続きを促す。

「ところで、なんか用？」

『ああ、大至急向かってほしいところがある……魂憑きを浄化するぞ』

「！」

僕は小さく息をのんだ。

魂憑き、だつて？

「……………それで、その場所ってのは？」

『今、メールで地図を送った。その×印の場所が被害のあったところだ。大至急、そこに向かえ』

「被害つて……父さん、何でもっと早く言わないんだよ！」

『わかってる。が……奴ら、どうやら俺のカメラに細工したらしいんだ』

「なっ……………」

僕は再び、今度は大きく驚きのあまり息をのんだ。
父さんのそういった設備に、ハッキングまがいのことを仕掛けるなんて。しかもその事が、父さんにはれることなく。

『だから、大至急だ。俺もカメラの復旧が終わり次第憑物搜索に協力する。それまではお前らで頑張れ』

「……………わかった。頑張る」

そして僕は通話を切り、父さんの言っていたメールを確認すると、急いでみんなのいる部屋に向かった。

□ ■ □ ■ □

「それじゃ、また学校でなー」

「うむ」

「テスト、頑張ろうねー！」

「おう」

僕が急用で帰らなくてはならなくなったというと、なし崩し的に解散ということになった。

時間もそろそろ昼になりかけていたので、ちょうど良かったと言えちようどよかったのだが。

………とはいえ、昼飯前に多少の運動をせにやなくなったけどね。

「それでお兄様。その被害のあった場所というのは？」

「えっと………町の外れのほう。住宅街の路地裏だ。ちようどこから反対側だね」

「遠いですね………空間を使つての移動はできませんね………どうなさいますか？」

僕は少し考え、とある神器を顕現させることにした。

「レジエント神器、魔法の絨毯、顕現」

すると、一枚の色鮮やかな絨毯が一巻き現れた。

「閉、これは？」

初陽が不思議そうな顔で、その絨毯をつつく。

「魔法の絨毯。知らない？例の夢の国の作品とかにも出てくるけど、千夜一夜物語で、とある三兄弟が姫の病気を治すための薬を届けるために使った、空を飛ぶ魔法の絨毯」

僕はバサツと絨毯を広げ、その上に乗る。

「人目を避けたりしたいとこだけど、犠牲が出てるんだ。贅沢は言
つてられない……さ、早く行こう」

そして他の三人を乗せると、絨毯は静かに浮かび上がる。

「振り落とされるなよ！」

そして僕は、一瞬にして空の点になった。

今日の天気は雨の降り出しそうな、暗い曇天だった。

その空の点を見つめる幾つもの目。

ああ、今日はどつやら二度目の飯にありつけるらしい。

「……………綺麗に片付いていますね」

「そりゃ、そうだろう」

数分後。僕は憑物の被害のあった現場に来ていた。
しかし、そこにあつたであろう被害の爪痕はなくなっていた。

いな、消されたと言っべきか。
きつと、犠牲になった人もお上の命令で居なかったことにされて
いるのだろつ。

「いつものことですが、あまりいい気はしないのです」

「……………ごめんなさい」

絵理の言葉に、初陽が頭を垂れた。理由は……………言わずもがな。

「あのな……………被師つつうのは何でも奇麗事じゃ片付かないって言
わなかったっけ？」

「言ってない……………」

うん、言った覚えはないし。って今はそんなことどうでも良いわ！

「とにかく、お前が責任を感じる必要はないんだよ。お前が意識し
て憑物を吐き出してるってんだったら、正直な話容赦なく斬り捨て
るけど、おまえの意志は関係ないんだから誰も責めやしないって」

ま、そう言うのは終着駅家特有の認識だから、万人に通じる訳じ
やないけどね。と、僕は心の中で付け足した。

そう……………地獄に悪気はない。だから、悪いのは――。

「……………閉？どうした……………？」

「ん？あ、いや。なんでもないよ」

思わず考え込んでしまったらしい。まあ、過ぎたことを気にして

も仕方がない。樂觀的に考える。

「さて、それじゃあさっさと始めましょうか。……………絵理、頼む」

「ハイなのです！」

元氣よく手を挙げて、にっこりと笑う絵理。手を挙げた拍子に揺れるその二つの塊が眼p——いや、目の毒だ。

「閉？」

「ごめんなさい、全くそんなことは思っていないから叩かないでっ！」

「何を謝ってるんだ？……………それよりも閉、憑物を捜すんだろ？何を始める気なんだ？」

「ああなんだ、そのことか。まあ見てなって」

「？」

頭に“？”を浮かべつつ、初陽は絵理の方を見る。

絵理は静かに目を閉じて、小さく何かを呟いた。すると、深い海を思わせる絵理の深蒼の髪が、ぞわりぞわりと毒々しい暗紫色へと変化する。そして静かに目を開けば、深紅の双眼がそこに現れた。

毒竜として恐れられる、神話の化け物ヒドラ。絵理と体を共有する、異例の憑き物である。

「よう、ヒドラ。いきなりで悪いけど、ここに残っている匂いで怪しいやつを辿ってくれ」

「本当にいきなりねえ……。ま、そーゆーのが私の仕事なのだけ
れど」

そう言うつと、ヒドラは被害のあつたであろう場所にしゃがみこん
で臭いをかぎ始めた。

「閉、絵理は何をしてるんだ？」

「魂憑の憑物を捜すための手がかりを見つけてもらつてるんだ」

「初陽さん、警察犬はご存知ですよ？それと同じで、彼女は相手
に付着したであろう被害者の血液の臭いを辿つて憑物の居場所を突
き詰めようとしているのです。そう、警察犬のように」

咲がそう言うつと、ヒドラが犬扱いするなー！と叫んだ。いやでも、
臭いで犯人見つけるとかまるつきり犬じゃん。といつても、犬の嗅
覚よりもヒドラの嗅覚の方が何千倍も鋭いんだけどね。

「それで、どうだ？何か手がかりは………？」

「………わずかだけど、結構新しめの血の臭いがするわね。多分こ
れが、犠牲者の臭いだと思う」

そしてヒドラは立ち上がると、薄暗い路地を出た。

「………こつちの方に血の臭いが流れてつてる。ガイシャを惨殺し
たやつが移動した証拠ね」

「そっか………そいでヒドラ、臭いは辿れるか？」

「私を誰だと思ってんの。当たり前でしょう?。」

ふふんと得意げに鼻を鳴らし、ヒドラは豊満な胸を張った。

「そんじゃ、先導役頼むぞ。おまえの鼻だけが頼りだ」

「まっかせなさい。さ、こっちよ!。」

そしてヒドラは、閑散としている住宅街を勢いよく走り出した。

「……………お、カメラなあった。どれ、やつの居場所は……………」

走ること数分。

僕らは誰も住まなくなり、ツタの絡まりまくっているマンションらしき建物の前にいた。

ヒドラが言うには、血の臭いはこの中に向かっていているらしい。

「しかし……………今にも出そうな雰囲気だなこりゃ……………」

薄暗い曇天のしたに静かにたたずむそれは、雰囲気的には魔王の城のようだった。

まあ、中にはマジで魔王がいる訳なんだけど。

「お兄様、空間の展開の準備が整いました。いつでも発動できます」

「おっけ。それじゃあ——いきますか」

そして僕達は、マンション内に足を踏み入れた。

と同時に、マンション内の暗闇が、喧しい羽虫のような音を立てつつ、一つの塊となって僕たちに襲いかかる！

「——空間作成、インビシブルテレストリアル隠蔽、固定！」

咲が空間を発動する。

「神器、魔剣レーヴァテイン、顕現！」

僕は何もない虚空から、一振りの紅い剣を抜刀し、その塊をなぎはらった。

「なんだ、これ！？」

僕らは一カ所にかたまり、ぞわぞわと蠢く闇を、油断なく見回す。そうしているうちに、だんだん目が薄暗いマンションになれてきて、その蠢く闇の正体が露わになり始めた。

「うわっ——これ、全部蠅かよ！？」

赤い複眼を煌めかせながら闇に蠢いていたものは、なんと蠅の大群だった。

「気をつけなさい、閉！こいつら、血の臭いがするわ！多分こいつら食肉蠅よ！」

焦ったようにヒドラが叫ぶ。

蠅達はそれを理解しているのか、あざ笑うかのようにさらにけたたましく羽音を響かせた。

そして、僕たちを取り囲むように、一斉に蠅が襲いかかる！

「ひゃっ——！」「くっ！」「うわっ——！」

「みんな、床に伏せてろ！」

僕が叫ぶと、三人は素早く地面に伏せた。

僕は体を思いつきり捻り、力を溜める。そして——。

「神器解放ッ！『紅魔剣レーヴァテイン』発動——！」

その力を解き放った。

自分を中心に円形に薙いだ剣の軌跡から、灼熱の焰が放たれその蠅の大群を飲み込み、一匹残らず焼き払った。

残ったのは、空気の焦げたような残り香だけだった。

「みんな、無事か？」

後ろ下方に振り返り、仲間の安否を確かめた。

すると、若干一名ほど気絶している子がいた。初陽だ。

「……………初陽、何で氣い失ってんの？」

「ああ、閉が使った技にビックリしちゃったみたいよ。あと、酸素

が燃焼したために軽い二酸化炭素中毒になったっぽいわね」

「ああー……………」

しまった、と思ったときにはもう遅い。後悔先に立たずとはこのことですね。

「で、どうするよ？この子」

「でも、大事ではありませんし放っておきましょう」

「意外とひどいっすね、咲さん」

「ですが、寝ている初陽さんを背負って本体と戦うよりかは、安全だと思いますが？それに——」

咲は初陽を囲むように空間を作る。

「——こうすれば、彼女は安全だと思いませんか？」

「……………そーっすね」

反論のしようがないので、僕は大人しく咲の提案に従った。

「さて、それじゃあ搜索を進めましょうか。臭いは……………階段の方ね」

すんすんと鼻をひくつかせて、ヒドラは再び血の臭いを辿る。
僕はちらりと初陽を見て、一言ごめんと呟いてから、ヒドラの後に続いて階段を上り始めた。

そして、僕らは闇に喰われた。

わたしを呼ぶのは誰？

11日目：喰らう蠅（後書き）

少々展開が強引ですが、何とか予告に間に合いましてほっとしております。どもども蛭です。

今回はオールバトルで行きたいと思います。閉君の新しい武器が登場したり、ヒドラ姐さんが本気出したり、咲ちゃんがぶち切れたり、初陽ちゃんが——したり、春人さんが暗躍したりします。

乞うご期待。

さてさて、それではいつものごとく読者の皆様に感謝を。毎度のことながら、つたない文章ですが、最後まで読んでいただきまして本当にありがとうございます。

それでは次のお話でお会いしましょう。

ではまた。

12日目：一難去ってまた一難（前書き）

今日の神器。

†グレイプニル【ぐれいぷにる】

†種類：拘束具

最終戦争ラグナロクが起きるまでの間、巨大な狼であるフェンリルをつなぎとめていた紐。“グレイプニル”の完成以前にフェンリルは巨大な二本の鎖“レージング”と“ドローミ”で縛ろうという試みがされた。しかし、二本とも名工とされる神神が作ったにも関わらず、フェンリルの前では無力であった。

因みに、紐を作るさいの材料が、“猫の足音”“女の髭”“山の根っこ”“熊の腱”“魚の息”“鳥の唾”と言われており、これらをこの紐を作るのに使ってしまったために、それらは存在しなくなってしまったのだとか。

……でも女の髭と猫の足音は存在してうわなにするやめ（ry

12日目：一難去つてまた一難

ぼんやりと目を開けると、一面グレーの壁が目の前にあった。

何事かと思つたが、意識がはつきりしてくると、それは壁ではなくてマンシヨンの床であることに気がついた。

初陽はいまだにくらくらする頭をおさえつつ、ゆっくりと体を起こした。

「……？」

そして、キョロキョロと辺りを見回すと、異変に気がつく。

「……みんなが、いない……」

薄暗いマンシヨンのエントランスで、初陽は1人ぽつんと佇んでいる。

最初はその状況に対する疑問が思考の大半を占めていたが、時間がたつにつれて、薄暗く不気味な建物内に1人取り残されているという状況に、不安を感じ始めた。

みんなを、捜さないと――。

初陽は1人という恐怖から、そう結論づけると勢いよく立ち上がり――。

「~~~~ツ！？いつ……たた……なに……？」

「ごずん、と、透明な何かに思い切り頭をぶつけた。

初陽はそろそろと、頭をぶつけたその見えない何かのある方へ伸ばし、それに触れる。

それをつつと指でなぞると、その見えない何かはどうやら自分を取り囲むように……言うならば、箱をかぶせられているかのようになっているらしい。

閉じ込められた初陽は、そのままへたりと座り込んでしまう。

どうしよう、みんなを探しにいけない。初陽は不安に顔を歪める。実際には、その不可視の壁——というより空間は、初陽の安全を確保するために咲が作った物なのだが、いまこの状況では恐怖を増長させる以外のなにものでもなかったのだった。

「うう……みんな、どこ行っちゃったんだよう……？ 閉……みんなー？ たすけてよ……」

ぼつりと弱気な言葉を呟くと、そのまま壁にもたれ掛かるように体育座りをする。

しかし、その言葉には何の反応もなく、空間を隔てた薄暗いマンションに吸い込まれ、消えていく。

そして、どれくらいたっただろうか。薄暗かったマンションが、本当に暗くなってきた頃。

「うきゃっ！？ また頭ぶった！ 急に消えないでよ痛いよもうなんなの！？」

恐怖を超えてだんだんと気が立っていた初陽は、もたれ掛かっていた壁が急に消えて後頭部を強打したことにキレた。

そしてしばらく文句を垂れていると、壁が消えたという事実をようやく前向きに、みんなを探しにいけるといように捉えると、今度こそ勢い良く——それでも少し頭部を気にしつつ——立ち上がった。

そして紅の双眼をキョロキョロと動かし、部屋のすみの方に階段を発見すると、迷いなくその方向へ歩き出す。

そして、暗く足下のよく見えないそこに到達すると、そろそろと気をつけながら足を踏み出す。

カツンツ、と固い音する。しかしそこで、初陽は違和感を覚えた。

（この階段——いくら何でも先が見えなさすぎる）

いくら暗いとはいえ、この階段は特に暗すぎる。そしてもう一つ。

（それに光彩よつの窓すら無いって………おかしくないか？この階段、マンシヨンのど真ん中にあるわけじゃないだろ？）

壁際の階段なのに、窓が見えない。

小さな二つの違和感だが、長年の逃走経験からこれはまずいと反射的に思い、初陽は素早く階段から距離をとる。

すると、

——ばぐんっ！

「うわっ！？」

階段から黒い塊が、さながら巨大なハエトリソウのごとく、先程まで初陽のいたところに噛みついた。

「なんだ！？」

初陽を捕らえられなかったことがわかったと、黒い塊——食肉蠅の大群が、ぶつぶつぶつと五月蠅いくらいに羽を鳴らした。

「おやおや、おしかったのね」

すると、その蠅の大群の中から1人の小学生くらいの男の子が現れた。

「誰だっ！」

「見て分らないのね？僕様はベルゼブブなのね」

ベルゼブブと名乗ったその子供は、初陽と同様の深紅の双眼を妖しく煌めかせながら、ゆっくりと初陽の方に近付いてくる。

「それにしても、よく僕様の蠅を察知できたのね。さっきの3人組は食われたというのにな？」

「わたしは嫌な気配には敏感なんだ………ってまで、さっきの3人組つてのはなんだ？」

まさか、と初陽は思った。

再び嫌な予感が、初陽に押し寄せる。
そしてそれは、現実の物となる。

「僕様の蠅ちゃんが、さっき喰っちゃった奴らのことね」

何か肌色の物が蠅の中から出てくる。

どちゃっと、湿った音とともに床に落ちたそれは――。

「あ―――！？」

見覚えのある深紅の剣が握られた、一本の人間の腕だったものだった。

日常終了のお知らせ。さ、目覚めましょう？

「うそ——！」

グレーの床に、赤い染みができる。

「あ……」

その染み中心には、腕から手にかけて喰われたらしい、肉片がこびりついた骨が。

「あああ……！！」

自分を守り、温めてくれた彼の、腕が。うで、が。

「あああああああああああああああああああああああ
ああああ!!?」

[illegible]

嘲笑と絶叫が、暗いアパートに響き渡る。

「絶望、恐怖、失望、悲哀！その叫びがききたかったのね！あああ
あ！なんて甘美な響きなのね！！」

ベルゼブブの感情の高ぶりに応呼するかのように、蠅がよりいつ
そう羽音を響かせる。

初陽はただ、その場で俯くように座り込むことしかできなかった。

「……………さあ、お楽しみはこれまでにするのね。そろそろ食事の時
間なのね」

ぞわぞわと、蠅の大群が初陽の周りを包囲するように集まる。
初陽は俯いたままである。

「仲間を失った絶望とともにい——喰らい散れっ！！」

そして、蠅が初陽を呑み込んだ。

□ ■ □ ■ □

——一方、くだんの三人組といえば。

「……………みんな、ぶじかー？」

呻くような声が、マンションの細長い廊下に響く。左右にたくさ
んの部屋があるところからして、どうやらさっきの場所から上の階
にいるようだ。

声の主は、無くなった右腕を庇うようにして、左手に持った刀を

杖にして立ち上がった。

なんと僕である。

「お兄様、あなたが一番重傷なのに人の心配している場合ですか？」

「全く……閉はどんくさいわねえ」

「よう、咲にヒドラ。いやはは……、前に続いて腕が無くなっちゃった」

無くなった右腕をぷらぷらと動かす様子を見て、二人はやれやれと呆れた様子である。

ところで、どうして僕らは無事でいられたのかと言うと。

……

……

……

…

「うわっ——！？」

あの時、僕は確かに闇に呑み込まれた。

ぞわりと腕に寒気が走り、その刹那鋭い痛みが走った。どうやら喰われているらしい。

「お兄様！空間を展開して安全圏まで移動します！」

「待って！僕腕を喰われ始めたから今やられても困る！」

「じゃあ腕を切り落としてください！行きますよ——！！！」

「ちよつ、まつ…………くそっ！神器鬼切顕現！」

すっぱーん。

こうして僕らは、事なきを得たのだった。

…

…

…

…

「…………咲、他に手はなかったの？」

「…………無理矢理にでも蠅を焼き払えばよかったのではないかと、
今更ながら後悔しています」

珍しく、咲は本気で自分の行いを後悔しているようだった。

「それよりも、閉の腕、あの蠅どもに食べられちゃったりしてない
かしら？」

「…………あ！そう言えば！」

「…………食肉ですし、最悪骨は残ってると思いますので、それで…
…………なんとか……………」

「ええー…………僕やだよ？じょじょに自分の腕が再生していくところ
見るなんて……………」

「一回見たことありますが、生命の神秘を感じました」

「いや、グロテスクなだけでしょう？あんなの」

戦場にあるまじき和やかな雰囲気で、僕は腕の再生について話す。その間に僕は適当にその辺に生えていたツタを使って、止血をした。しばらくはこれでよし。

「ところでお兄様。マンションを覆っていた私の空間及び、初陽さんの保護のために展開していた空間が消えてしまったのですが」

「それ早く言おうよ！？え、何！？今一階に野ざらしで初陽おきっぱにしてるの！？蠅がいるかもしれないあそこに！？」

僕がそうまくしたてると、咲は可愛らしく首をひねって、

「…………よく考えたら大変じゃないですか！！」

今更な感想を述べた。

「どうしましうお兄様！最悪初陽さん死んで——！！？」

「言つな！大丈夫、急げばまだきつと間に合う！」

「そうそう。幸い、まだ時間はあまり経っていないみたいだし、遅くても足とか手とか腸とか内臓とかが喰われ始めるくらい——」

「階段はどこだぁ——！！」

僕は廊下を走り、階段を目指す。

「ああお兄様！私の空間で移動した方が早いのではー！？」

「あっはっは！いつそげいそげー！あっはっは！」

二人の声をぶつちぎり、僕は薄明るくなっている階段を駆け降りをした。

「……………嘘だろ……………！？」

「くひやはははは……………はは？」

確かに、少女は……………初陽は、食肉蠅の群れに吞まれて喰われ始めたはずだ。しかし、

「……………なんでお前は、喰われてなのね？」

「……………」

蠅達が離れると、そこには無傷でなおも俯いたままの初陽がいた。所々服が破け、肌が露わになっているところがあるが、肌その物には傷一つ、血のあと一つすら見あたらなかった。

「答えるのねっ！なんでお前は喰われてないのねっ！？」

「……………」

何も答えない初陽。

ベルゼブブは痺れを切らし、再び蠅を初陽に殺到させる。
すると、

「……………“五月蠅イ”」

ようやく初陽は、一言、言葉を発した。

そしてその一言で、喧しく飛び回っていた蠅達がピタリと止まり、
まるで死んだかのように一斉に地面に落ちた。

「なっ！なんなのね！？僕様の蠅^{しもへ}がつ！？」

ベルゼブブは再び落ちた蠅に命令を下すが、蠅は再び宙を舞うこととはなかった。それどころか、蠅は何かに怯えるかのように羽を震わせ、徐々に初陽から距離を取り始める。

「おいこら、僕様の命令を聞くのね！王の命令だ！にげるな、逃げるなあ！」

ベルゼブブは一人、喧しくわめき散らす。

しかし、それを聞く者は居らず——いや、1人だけ、いた。

「……………蠅の、王よ。そなたに、道を与えよう」

初陽。地獄を内に秘めし、少女。
美しい黄金の髪は、禍々しい漆黒に染まり、ルビーのような赤い

瞳は地獄の業火の如く、赤く、紅く、燃え上がっていた。
初陽は続ける。

「一つは、よに平伏し、よに仕え、自由を奪われながらも天寿を全うするか。

一つは、潔く正を諦め、その命を自らの意志を持って、この場で散らすのか。……………選ぶがよい」

「……………どちらも嫌だと言ったら、どうなるのね？」

「……………コロス」

ベルゼブブは、言葉という物に、このとき初めて恐怖した。

言葉はこれほどまでに……………これほどまでに殺意を、殺気を、暴力的に相手に伝えられるものなのか。

いや違う……………言葉云々の前に、目の前にいる漆黒の少女その存在に、心を潰されてしまったのか。

有り得ない。王たるこの自分が、こんな、小娘ごときに！

「う……………うああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

ベルゼブブは吠えた。

さながらそれは、恐怖の叫びにも聞こえないこともなかったが。

ベルゼブブの姿が変容する。紅い瞳はそのままに、少年の体がいびつな音を立ててゴキゴキと、ボキボキと、蠅の王そのものの姿に成り変わり、この世のものとは思えない叫び声をあげながら、黒い少女に襲いかかる。

「死ネエエエエイ！！！！コノ化ケ物ガアアアアアアアアアアアアアアアア」

歪で巨大な鉤爪が、小さな化け物に襲い掛かる。
しかし、初陽はまたしても一言呟くのみ。

「……………五月蠅イ」

すると今度は、変容したその姿が一瞬にして元の少年の姿に戻る。

「あ、あ、ああ……………！」

今度こそ、完全に心を潰された。
放心したベルゼブブはその場に座り込み、少女を見上げる。
無感動にそれを見下ろした初陽は、もう一度静かに呟く。

「では喰ライ死ネ、屑蠅が」

ぐにやりと空間が歪み、巨大な黒い穴が現れる。そこから低い唸り声をあげながら、巨大な狼の頭が現れる。
その狼はがぱりと口を開け、ベルゼブブに迫り――。

「神器、グレイプニル、顕現ッ！！」

寸のところで、細い紐に絡め取られた。

「はあっ……はあっ……ふう……間に合ったか……」

とは言え、助けた方は全くもって予想外の方なのだが。

急いで階段を下り、一階にたどり着いたところで僕が見たものは、ベルゼブブが初陽を喰い殺そうとしているところではなく、初陽がベルゼブブを喰い殺そうとしているところだった。

一瞬、その異様な光景に呆氣にとられたが、間一髪のところではそれを止めることに成功したのだった。
しっかし……。

「初陽……お前、それはなんだ？」

ぎちぎちと、グレイプニルを引きちぎろうとする狼。

それを無感情な瞳で見つめる初陽。

正直、その黒く変色した髪の毛の少女は、初陽に似た別の何かだ
と思いたかった。

まさか、

「憑物を、自分の意志で操るなんて……」

僕は、緊張しながら初陽の様子をうかがう。

しばらくすると、グレイプニルをちぎる事を諦めたのか、狼の頭
を消した。

それと同時に、対象を失ったグレイプニルも消える。

「ひっ、ひiiiiiiii!!」

そして、放心していたベルゼブブはようやく我に返り、体を無数の
蠅に変化させてどこかに飛び去ってしまった。

ここは逃がしたことを悔いるところだが……それどころじゃ無

い。

あんな物よりもつとやつかいな奴が、目の前にいるのだから。

「……初陽」

「……貴様は……？」

「僕は……お前の友達……いや、家族だけど。今も、昔も」

「……余に家族などおらん。皆、敵だ。父も、母も、兄弟も、
信賴する友でさえも、皆余を裏切ったのだ……皆、敵……う
ぐうつ！？」

「お、おい！？ 初陽！」

突然、初陽が苦しそうに頭を押さえる。
僕はなんとか腕一本でそれを支える。

「ち……がうつ……やめて……わたし、そんなの望んでなんか……
……！！」

「お、おい初陽！？ 初陽！ しっかりしろ！」

「でてけ……でてけ！ うあああああああああああ！
……！！」

びくんと大きく体を痙攣させると、初陽はそのままぐつたりと動
かなくなった。

まさかと思ひ脈と呼吸を確かめると……よかった。どうやらま
た気絶しているだけみたいだ。

漆黒の髪も、美しい金色に戻っている。

「お兄様！……って、あら？憑物は？それに初陽さん、どうかなさったんですか？」

「咲……。憑物は、逃げた」

「はあ？逃げたあ？そりやなんでよ？」

「それは——……いや、ここでする話じゃあ無いな。後で詳しく教えるよ。それよりヒドラ、お前のその足下に転がってる骨、多分僕のだからこっちによこしてくれる？」

右腕を再生し、僕は初陽を背負って家路につくのであった。
暗い雲が、ぽつりぽつりと雨粒をこぼし始めた頃だった。

『“意図的な憑物の召喚”ねえ……。それは本当なのかい？春人』

画面の影は、いつも通り他人事のようにつぶやいた。
春人はそんなことは気にせずに、影に告げる。

「ああ、間違い無い。確かに俺のカメラに映っていた。なんなら、映像も送るが？」

春人は画面に先程の戦闘映像を送る。
そこには、確かに銀狼を操る初陽の姿があった。

『…………なるほど、確かに何やら召喚しちゃってるね…………』

「……俺は、初陽さんをどうすればいい？」

『常ならば、即刻各地域の被師を召集して、大規模な地獄討伐隊を使つて地獄を纖滅する……といったところだね』

「じゃあ——」

『けど』

諦めかけた春人だが、影の言葉には続きがあつた。

『何やら彼女、先程意図的な召喚と言つたけど、実際は別の何かが彼女を操つて召喚させたみたいじゃないか。そして彼女は最後、自分の意志でそれをはねのけている』

「だが、また暴走する可能性があると言つことも……………」

そんな春人の言葉に、影はあきれた。

『君ねえ……………いっただつちの味方なんだ。雪ちゃんとの約束はどうしたの？』

「だが、しかし……………」

あーもう！と、影は頭をかきむしる。

『だつたら、神憑^{かみつ}として終着駅 春人に神託を下す。引き続き地獄

の管理はそちらに任せる！そしてさらに、地獄管理のために人員増強を命ずる！なっちゃんとか秋ちゃんとかふーちゃんとかその辺で！反論は認めん！以上！』

「んな横暴な！？………けど、お前俺が神託を拒否できること知ってるだろ？」

『あーもー！いつまでもうじうじうじ、ム力つくなあ春人は！そんなこと言つと騎士神の爺様に一発締めてもらいに行かせるよ！？』

「なっ、それこそ横暴じゃねえか！やだよそんなもん！俺はデスクワーク専門なんだから！」

『私には関係のないことだ！………で、どうするんだい？春人。私の神託を受けるのか、はたまた騎士神きしがみの爺様の折檻か。選べ』

脅すようなドスのきいた声に、

「ありがたく、神託を賜らせていただきます。楠神様くすのかみ」

春人は素直に頭を垂れた。その様子は、ごめんなさいをしているようにも見えた。

楠神と呼ばれた人影は、満足そうに頷いた。

「でも、本当に良いのか？」

『いーのいーの。地獄に下手に手出しできるのは、終着駅家しかないからね。それに——閉君のこともあるだろう？きつとそんな事をしたら、被師を殺してでも、自分が死んだとしても地獄を守る

うと思うし。双方にとって、それは最悪の結末だと思わないかい？」

「……………」

『……その無言は、肯定と取らせていただくよ。さて、それじゃあ話は以上だ。あ、あと、ベルゼブブに関してはまだその町にいるみたいだし、引き続き搜索を頼む。んじゃ』

そして通信は切れた。

「……………はあ……………全く。毎度の事ながら下に押し付けすぎだ、あの馬鹿は」

悪態をつくも、その顔には安堵と力強い笑顔が戻っていた。けど、安心するのはまだまだ先だ、と、春人は気合いを入れ直す。

「まずはベルゼブブの再搜索からだな……………」

画面の映像を確認すると、どうやら閉達は帰って来るみたいだし。春人は少し苦笑を浮かべつつ、デスクを操作するのであった。

「はあ……………はあ……………くそっ……………くそくそくそっ！あの小娘が！」

小さな少年……………ベルゼブブは、暗い路地で悪態をつく。

「この僕様を、この蠅の王を！こけにしゃがつて！」

ガンガンと、苛立ちのままに壁を殴る。

そして、そんなベルゼブブのもとに近寄る影が一つ。

そいつは、ニヤニヤとした笑みを浮かべてこう言った。

「なら、逆襲してみないかい……………憑物君？」

12日目：一難去つてまた一難（後書き）

と言うわけで、ベルゼブブ編終了です。蜷です。

最後に何やら臭わせましたが、伏線の回収はまだまだ先になりそうです……………。

そして！

ようやく次回から期末テスト編そして夏休み！

冬場になにを書いてんだって話ですよ！それに期末じゃなくて今は学年末テストだし！受験シーズンだし！

なのでテスト編は、多少為にならなくもない物を作りたいと思ってマス。ハイ。受験生の息抜きになればと思います。

…………… え？お前はどのつて？

推薦なのでもう合格しましたが？

…………… やべえ。読者の大半を敵に回した気がする。

さて、それでは作者の言葉はナイアガラの滝にでも作者ごと叩き込んでいつもの如く。

いつも“地獄な”を最後まで読んでくださってありがとうございます！

これからもよろしく！

それでは今日はこの辺で。

ではまた。

13日目：日常への復帰（前書き）

テスト編開始！

の前に、少し真面目な話。

とは言え真面目なのは半分くらいだけだね！

13日目：日常への復帰

僕らの町に大きな影響をおよぼしたベルゼブブとの戦いから、早くも一週間が過ぎようとしていた。

逃げ出した奴についての情報は、今のところは全くと言っていいほどない。

それと同様に憑物についての被害もぱったりとやんだので、表向きには一応解決したという事になった。とは言え、緊張状態にはかわりはないんだけど。

まあなんだ。そんなわけで、僕らはいつも通りの日常に戻る訳なんだけど…………。

「初陽、起きてる?」

「……………」

一人をのぞいて、そうはいかなかったりしていた。

先ほど言ったベルゼブブの残していった一つの影響。初陽の憑物の顕現についての問題。

父さんが、上はまだ僕らに任せると言っていたらしいのだが、本人の心の整理がまだついていないみたいで、あの日以来、部屋に籠もりつきりになってしまった。

最近縮まってきた初陽との距離は、今や扉の向こうにまで戻って……………いや、最初よりも遠のいてしまった。

「初陽、せめて返事くらいしてくれ。生きてるのかどうかすらわからん」

「……………（かつん）」

扉に何か小さな物が当たる音がした。どうやら返事のもりらしい。

僕は思わずため息をつく。

「あのなあ……………僕は返事をしてくれって言ったんだぞ？」

「……………」

応答なし。

さすがにすこーし、腹が立ってきた。

一週間だぞ一週間。一週間、ずーっとこのやりとりを朝昼晩と続けてきた。

父さんの命令で、学校に行かなくていいから初陽ちゃんを外に出させてくれと頼まれたから、毎日頑張って声をかけ続けてきたけどもう限界だ。

いっつも1人でうじうじしゃがって。こうなったら、無理矢理にでも部屋から引きずり出してやる。

距離を取られてるなら、こっちから近づくまでだ！

「しかし、どうするかな……………」

考える。

扉には鍵がかかっている。蹴破るorピッキング？

……………いや、蹴破るのは修理とかがめんどくさいし、初陽が怪我するかもしれん。ボツだ。

そしてピッキング。

道具があれば出来ないこともないが……………想像してみる。女の子の部屋の鍵をカチャカチャといじくり回す自分の姿を！

……ただの変態だ。しかもこれはフラグ！きつとたまたま部屋に戻ってきた咲や絵理に目撃され、冷めた目で見られるに違いない！最悪、咲に通報されかねない！

だったら、自発的に初陽が出てきたところを捕獲するしかない！しかあし！初陽はこの一週間、トイレにすら出てこないのだ！いやきつと夜中に起き出してしているのだろうが、それまで初陽の部屋の前で張り込むのはそれこそ咲に「ストーカーのかたですか？」とか言われるに違いない！いやきつと言われる！

そうなると――。

「……………ここは絡め手でいくしかないか」

僕は一度下に降りて、初陽のぶんの朝食をお盆に乗せて、再び部屋の前に戻る。

「初陽ー。飯、置いとくぞ」

そして階段を降りて――5段ほど下がったあたりで階段に座る。これで初陽の部屋から僕を、そして僕は初陽を確認することは不可能となったはずだ。

本当は頭だけ出してドアの様子を伺いたいのだが、ばれる可能性があるのうかつに出せない。

ではどうやってドアの様子を伺うのか。

……………そう、音である。

飯を置いて数分後、カチャツと鍵の開く音がする。そして、すうつ音もなくドアの開く気配。本当はここで飛び出したいのだが、まだ我慢だ。

今出ていっても、すぐに部屋に引っ込んでしまう。

そこで僕の置いた朝食が鍵となる。

実は僕は今日の朝食の汁物を、いつもよりも多めに、それはもう

わずかな揺れでもこぼれてしまうのではないか、というくらいに盛った。

そうすることによって、初陽は朝食の乗ったお盆を持ち上たとき、動きがかなり制限される。

しかし、動きが制限されるとはいえ、音がなければお盆を持ち上げたかどうかはわからない。

そこで、僕はお盆の上に二重のトラップを張った。

（それは――！！）

その時、軽い何かが転がる音がした。

そして僕はその瞬間、階段を飛び上がった。

軽い何かが転がる音、それはお箸の転がる音である。それによって初陽がいつ、お盆を持ち上げたのかがわかるようになっていたのだ！

僕が急に階段から現れた事に、びっくりと動く金色の尻尾。慌てて部屋に引っ込むとするが、味噌汁がそれを阻害する！

そしてあつという間に僕は初陽との距離を詰めて、

「よう。久し振りだな、初陽」

驚いたような表情の初陽の手を掴んで、僕はニンマリと笑うのだった。



「うつわ、埃っぽ……引きこもるなら引きこもるで、部屋の換気くらいやっつけよな……病気になるぞ？」

「……………（ぷいつ）」

初陽は、リスみたいに頬にご飯をつめて膨らませ、そっぽを向いた。

どうやら少しばかりお怒りらしい。

「いや、無理矢理部屋に押し入ったのは謝る。すまん」

「もぐ！」

恨みがましそうに僕を睨む。

とは言え、僕はここに謝るために来たのではない。

「んで？なんでお前はこの一週間部屋に籠もりっぱなしだったんだ？簡潔に答えてみ？」

「……………」

けれども、初陽は俯くばかりでやはり口を利いてくれなかった。やっぱり無理矢理部屋に入ったのはまずかったのかな……………。無駄に世話を焼くのはよくないって、誰かが言ってた気がしたし。

「……………閉」

「ん？ 何？」

数十分ほどの長い沈黙の後、おずおずと初陽は喋り始めた。

「閉……………怒らない？」

「なんで？」

「……………だって……………」

再び俯く。僕は溜息を一つつき、なるべく優しく微笑みながら初陽の頭に手を置いた。

「大丈夫、怒らないよ。いいから言ってみ？できることなら僕も協力するからさ」

初陽はしばらく俯いてもじもじとしていたが、やがて決心したように顔を上げた。

そして、

「実は……………」

……………テストを、受けたくないんだ」

僕はにつこりと微笑んだまま、初陽の頭の上に置いた手のひらを拳に変えて、こめかみのあたりに持ってゆき、もう片方の拳で初陽の頭を挟み、固定する。

そして必殺！うめぼしいイイ！

「いったたたたたた！！？お、閉！痛い痛い痛い！やめてえ！！死んじゃう！」

「黙れ小僧。その腐った脳味噌我が拳で鼻から捻り出させてくれるわ！」

「うえええええ！！ほんと痛い！お願いしますもうやめてくださいいい！！」

しかし、その後数分はしてやった。それはもう、初陽の断末魔がきこえなくなるまでやり続けた。

「あ、モノローグの部分だけ読むとエロい」

「はひゃー………にゃー………うあ………はれ………？なんか気持ちいい………？」

「そしてお前も何かに目覚めるな。戻ってこい」

ペシンと頭を叩くと、変なうめき声を上げて起き上がった。本当に大丈夫か？こいつ。

「うー………もう、怒らないって言ったじゃんか！」

「限度があるわ限度が。つつかなんだよ、そのクソみたいにふざけた理由は！」

「ふざけるもんか！結局生物と歴史くらいしかできてないんだぞ！？しかも歴史は留守が苦笑いするくらいのできなんだぞ！？」

「だからといってテストを受けなくて良いなんて事にはなりません。っていうかそんな理由で引きこもってた奴の面倒を見てたって思うとさらに腹立ってきたわ」

「ひえっ！お、閉！？な、なんか手つきが妖しいぞ？」

「墮落しきつたその魂を極楽浄土へ昇天させてくれるわ！秘奥義ッ
！千手観音！！」

「ひにゃー！やつ、あつ、ちよつ、ひゃつ………や、やめへえ！ひ
っ！くるひっ………！ひぬうう！ひんじゃうからあああ！ひにゃあ
あはははは！」

「なんかエロい！」

僕のテクニカルな指先で脇腹をくすぐっているだけなのに。
一度父さんにやって救急車のお世話になったのは良い思いでだ。
そしてその経験を生かし、呼吸困難寸前で指を止める。

「りゃー……ひぁー……おわりの、ばーかぁ………こほっこほっ…
……」

「自業自得だバカ初陽。ほれ、さっさと制服に着替えて玄関まで来
いよ」

壁に掛けてあつた夏服を初陽の上に投げ落として、僕は部屋を去
ろうとした。

「……まって」

すると、なんとか復活した初陽が何か言いたそうにこちらを見て
いる。

「なんだ、また下らない言い訳でもするんなら今度こそ笑い死なさ
せるぞ？」

「物騒！！ いや、ちがくて……あの、その……」

言いよどむ初陽。

何が言いたいのかはだいたい予測がつくけどな。

「あの——」

「どうせ、『ごめんなさい』、だろ？」

「……え？」

僕は、驚いたような顔をしている初陽に苦笑をこぼす。

「わかってるよ、言いたいことくらい。けど、それは僕じゃなくてこいつらに言っしてほしいかな？」

僕はポケットからおもむろに携帯を取り出し、初陽に投げてよこす。

そのディスプレイには——。

「これって……」

元気出せやら早く学校にこいなどのメールの数々が表示されている。

「僕のアドレスを知ってるクラスの奴らのメールやらなんやら。心配かけてたのは僕だけじゃなくてクラスの奴らみんなにだ。だからそれは、学校でみんなに言っってやりな」

「……………ん！」

そして初陽は、嬉しそうに笑った。

「閉」

「うん？何？」

「お前が色々気を使ってくれたのはさ、わたしがその……憑物のこ
とでショックを受けてると思ったからなんだろう？」

「……………なんだ、気づいてたのか」

だったら最初からそう言えば良かったのに。と、言おうとしたが、
初陽の言葉には続きがあった。

「うん……………わたし、本当はすっげーなやんだんだ。いくら祓師の
上役が許したからって、ここにいてもいいのかなって」

本当はな。と、初陽はすこし悲しそうな表情を浮かべた。

「でも、すっげー悩んで悩んで悩んで、それでお前が色々気を使っ
てくれて思い出したんだよ」

そして、初陽は笑顔を浮かべた。

「お前がわたしを、守ってくれるんだよね？」

そう言った初陽の笑顔は、屈託のない、ごくごく普通の女の子の

笑顔だった。

つられて僕も笑い、

「当たり前だ」

と、力強く返事をした。

「さて、それじゃあさつさと学校に行きましょうかお嬢さん？」

「……………やっぱり行かなきゃだめ？」

「ダメ」

「うわーん！シリアス展開にすればテストとかうやむやになって終わると思ったのにー！！」

「やっぱりそれが目的か！残念ながらテストはやらされるんだよ！さつさと着替えろ！」

「やあー！！！！」

そしてその後、風呂を嫌がる犬のごとく学校に行くことを拒む初陽を、無理矢理制服に着替えさせて、引きずるように僕は一週間ぶりの学校に向かうのであった。

「テスト受けたくないー！！！！」

初陽の悲痛な叫びだけが、閑散とした昼間の住宅街にこだました。

“絶対に守ってみせる”

あの時の、閉のわたしにたいする思いとも決意ともとれる言葉。そのおかげで、今回わたしがいつもみたいに悩まないで済んだのは紛れもない事実だ。

けど、それと同時にあのときにわたしが感じた閉の別の感情——自分という名の人間不信について、考えた。考えてしまった。

わたしが守ってくれるか？と聞いたとき、閉はもちろん、と返してくれた。でも、違う。あれは、閉が自分の意志で言ったんじゃない。

いや、違う。閉はそんな嘘は吐かないはずだ。その意志に、別の何かに固執するような……不純物のようなものを感じた。

「閉………お前はいつたい何に取り憑かれてるんだ………？」

音のない声で、前を歩く閉に、わたしはそつと問いかけた。
学校には、もうすぐそこまで帰ってきていた。

13日目：日常への復帰（後書き）

はい、書かないと話がおかしくなるので真面目（？）な話を書きました。

これで心置きなくテスト編が書けるぜ！

受験前の生徒の息抜きになればと思います。まあ、対して役に立たないけどね！だって、テスト作ったことねえし！

と言うわけで、今回はノリと勢いで適当に役に立ちそうな事柄をちりばめていきたいと思います。

ふざけてません。これがいつもの私です。言うのであれば存在そのものがふざけてるよとでも罵倒して下さい。喜び………いな、悦びます。

それでは次回またお会いしましょう。

ではまた。

14日目：主は仰った「最初から間違ってた。後は何やってもいいんじゃない？」
遅れてすみません！

とりあえず、言い訳は後書きで。では、どうぞ。

14日目：主は仰った「最初から間違ってれば後は何やってもいいんじゃない？」

「あ、もしもし？お袋？俺だけど……いや、だから俺だって俺！……いやオレオレ詐欺とかじゃないから！古いからそれは！春人！終着駅 春人！あんたの息子だつての！……ああ、うん。わかつてくれればいいよ。うん。で、電話した理由だけど……智夏^{ちなつ}にこっちに来るように連絡してほしくて……いや、何で泣いてるの？妹に手を出す気かって？いや、それこそ何を言ってるんだよ！そこまで飢えてるわけじゃないよ！愛したのは自分の嫁ただ一人だよ！って何言わせるんだよババア！……いや、はい。すいません。ババアは言い過ぎた。泣かないで。怒られるよりも対処に困るから。……うん。うん。じゃあ、智夏に伝えといて。あ、他の奴も連れてくるように言つといて。……ってだから！妹に手を出す訳じゃねえつつの！さっきから言ってるだろ——！？」

「いや先生、ですからさっきから言ってるじゃないですか。別に学校に来なかつたのは僕が悪いんじゃないってここに居る初陽のせいだと……え、なんですか？『人のせいにするな？』……いやまあ、確かに僕は学校には来れましたけど！来なかつた理由にはなりませんけれど！でも、親に言いつけられてですね……いや、ですから！人のせいにするなど言われても！だって質を取られて脅されてたんですよ！？初陽が復帰するまで家にいないと町中に僕の恥ずかしい写真ばらまくって！……え、何で先生そんな残念そうな顔を？まさか先生！あんた僕の恥ずかしい写真を人質に、なにか僕に対して

脅しをかける気でもあったんですか！？せ、先生の鬼！悪魔！……
……って、何で先生がキレルんですか！？怒ってるのは僕の方ですよ！
！？こ、こうなりやヤケだ！先生だからって容赦しませんよ——」

そう言った僕の、それ以降の記憶は消えていた。恐らく、僕の自己防衛の本能が、意識的にそれを思い出させないようにしているのだろう。

思い出せば、その記憶だけで最悪死ぬことになる。良くて廃人だ。
子子子子 子子美、奴はいつたい何者なのだろう。
まあ、そんな事があった後。

「…………… それでは、今から期末テストを、始め、ます」
『はい』

現在時刻はただいま12時ジャスト。今朝のごたごたや臨死体験により、僕と初陽は数ある校舎の内の一つ、特別教室棟の中にある“視聴覚室”にてテストを受けることになった。

「ところで先生、一つ質問があるんですが」

「…………… 閉」

「なんですか？」

「…………… 死ねよ」

「お断りします」

「…………… 間違い。なに？」

先生はどうやったら2文字の言葉を3文字に、しかも有り得ないほどの殺意を込めて間違えられるんだろう。

だが、気にしたら負けだ。スルースルー。

「何で机の上にマイク付きのヘッドフォンがあるんですか？」

そう、僕と初陽の机の上に一つずつ、マイク付きのヘッドフォンが置かれていた。

「……………一台79800円」

「値段は聞いてませんって言うか無駄に高いなこの野郎」

「とりあえず、それを付けなさい」

僕は恐る恐る、その高価なヘッドフォンを装着した。みよう見まねで初陽も同じくヘッドフォンを付ける。

ヘッドフォンを付けると、周囲の雑音などが遮断され、反対に自分のたてている呼吸や心臓の音が聞こえるようになるほど、静かになった。

いったいこれで何をしようと、と頭を捻っていると、教壇の上に置いてあったらしい小型マイクに、先生が喋り始めた。

「……………どう？声、聞こえる？」

「聞こえますけど……………これでいったい何を？」

しかし先生は僕の質問に答えずに、テストの解答用紙を配ってき

……ってか、

「え、先生。解答用紙だけですか？問題用紙は？」

「子子美、わたしは答えを書く紙がないぞ？」

すると、先生はようやく質問に答えてくれた。

「……今回のテストは、二人一組で行い、ます」

「え？それはどういう――」

「……今から説明するのに、そうがつつかないで、死んで」

「先生、最後の三文字はいららないと思います！」

しかしさすが先生、そんなのは無視してマイクに向かってしゃべり続ける。

「……普段なら、こんな事はしないけど、閉の親が、どうしてもって言うから、特別な方式でテストを行うことに、した」

そして先生はその後、詳しいことを長々と説明してくれた。ようするに、初陽が問題を読み上げ、僕が解答するということらしい。

「……閉の親から、聞いた。初陽は、高校が初めての学校、だつて」

正確には、行っていた記憶が無くなっているというのが正解だが、小学校低学年のときに地獄になったらしいし、高校が初めての学校

と言っても変わりはない。

「…………だから、死ぬ気で勉強してくるだろうけど、流石に限界があるから、この特別な方式で受けさせて、くれって」

「確かにこの方法なら……………」

「漢字とか数式とか文法とか、わたしが書かなくても良いから点数を取れそんな気がする！」

そう、初陽が言うとおり、初陽が問題文を読み上げ僕が解答するのであれば、正直、僕だけがテストを受けているようなものなので、初陽の学力はほとんど必要ないように思われる。

——しかし。

「…………大丈夫。ちゃんと、色々と考えて、ある」

そうしてにつこり……………は、笑わないけれども、そんな気配を漂わせつつ、

「……………それじゃあ、開始」

静かに、淡々とそう呟いた。



——最初、現代文＋古典のテスト。

「この時の下人の心境を本文を読んで答えなさい」

「いや、それだけ言われましてもわかりませんがな初陽さん」

「じゃあ、“らいきもん”の作者の名前を漢字で書きなさい」

「響きがファンシーだな。たぶんそれ“羅生門”な」

「ちなみに、本文中の羅生門は石段が七段って書いてあるけど本当はそんなに無いんだってさ。りゅうのすけが書き間違えたっていうのが今の通説らしいぞ」

「ここは感心するところだが、今は答えを言おうな」

「うあー……………」

テストを受け始めて理解したことが一つ。

確かにこれ、初陽の実力も必要だわ。

自信を持って回答できるのは、漢字の書きやら、適当に読まれる初陽の漢字の読みを正しく書き直すくらいで、本文はほとんど初陽の実力で解かせるしかなかった。

しかし、これは僕のテストでもあるのに、初陽だけにテストを解かせてよいものなのだろうか？

「……………大丈夫。赤点だったら、二人まとめて、補習するだけ、だから」

「初陽、死ぬ気で頑張れ」

「ううえええ……………」

そして、ところどころこっちからも指示を出しつつ、僕らは問題を解いていった。

——次、数学。

「さんじほーてーしきえつくすさんじょうひくさんえつくすじじょうぷらすごいこーるぜろのかいをあるふぁべーたがんまとするとき、次の値を求めよ」

「待て」

「なんだ？閉」

「せめて数字で喋れ。少なくとも記号はいえ。読みにくいじゃなくて聞き取りにくい」

「えーと、さんじほーてー……」

「だから漢字イー……！！漢字で読んでよおお！？変換してよド畜生ー！！」

「…………ウルサイ。あと、五分」

「畜生おお！！初陽、わかるところだけでも解いてくれ！！」

「無理だ！」

「…………あと、三分」

——次、英語。

「読めない」

「ですよー」

「とりあえず記号だけでも」

「僕、勘で記号を答えて全部間違った奴を知ってるんだ」

「二三四？」

「違う。これを書いてる人」

「テスト書いてる？ え、どゆこと？」

「ちょっとしたメタ発言だよ」

「……………あと、１０分」

「仕方無い。記号は適当に埋めるとして、せめて日本語を英語につ
てところだけでも言ってくれ」

「わかった。——妻は夫を疑い朝から夫をつけ回した」

「先生エ……………」

そういえば、英語の先生先月結婚したんだっけ……………。

「次、どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして

「お前今途中でうどんつつたろ」

「……………先生、意外と余裕そう、だね。あと、五分」

——次、生物。

「……………生物の予定だったけど、時間が押しているので、社会科も一緒に、やる」

「勘違いしないでよね。時間って言うのはこっちの世界の時間であって、めんどくさくなったからとかそんなんじゃないんだからね」

「閉、誰に向かっていったんの？」

「神様」

「……………とりあえず、問題配る、よ」

そして先生の合図とともにテスト開始。

そして、僕は問題を聞いて固まった。

「同盟市がローマ（１）権を求めて反乱を起こしたが、葉緑体が光合成を行う際にラテン人が（２）川のほとりにミトコンドリア？人の細胞の構成を交えつつ（３）の物質の働きを答えよ」

「よし、僕ちよと理科の先生と社会科の先生に喧嘩売ってくる」

「……………テスト中は、出歩いちゃ、だめ」

「でもこれ確実におかしいでしょ！？って言うか生物と社会科一緒にやるってこういう事だったの！？」

「一緒って言うか、融合だよ。文脈おかしいよ。なんだよ（２）川のほとりにミトコンドリア？って。」

「でも、（１）はローマ市民権だし（２）はティベル川だし、細胞には核、ミトコンドリア、リボソーム、リソソーム、中心体、細胞骨格、小胞体が存在してるし、（３）の核の働きは、細胞全体の代謝を調節する働きがあるんだぞ？」

「お前無駄に詳しいな！？」

これが勉強した成果か！いろんな意味で凄いわ！ひとまず僕は、初陽が言った答えを解答用紙に書き込んだ。

て言うか、もしかしてこのあとの問題も延々とこういうのが続くんじゃないだろうな？

「……………とりあえず、次だ」

「おう。えーと……細胞分裂の間期、中期、後期、終期の図を――」

良かった。普通の問題――。

「――ロマン主義の技法を用いて描きなさい」

「普通じゃねえええ!!」

「…………ウルサイ」

「ごめんなさい。」



「…………とりあえず、これでテストは終了、です。お疲れ、さま？」

テスト終了。僕ら二人は同時に大きなため息をついて、机に突っ伏した。

主に初陽はテスト疲れ、僕はツツコミ疲れが原因だろう。のど乾いた。

先生はそんな僕達をしり目に解答を纏めて、ヘッドフォンを回収していく。

「…………ホームルームとかは、もう終わってるから、この場で解散、です。…………さよう、なら」

「…………うぁー」

「…………えうー」

「…………さようなら（ゴゴゴゴ）」

『はいっ！さよなら、先生！』

あぶねえ………………。現世とさよならするところだった。

とりあえず、危機^{せんせい}が去ってから、僕達は改めて机に突っ伏す。

「つつつつつつかれたああ……………」

「…………晩飯作るのめんどくせえくらいに疲れた」

時計を見ると、もう六時を回っている。買い置きした食材は、今朝の分で切れていたはずなので、買いに行かなくてはいけないのだが…………。

僕はポケットから携帯を取り出して、父さんの携帯に電話をかける。

『どうしたマイ・サンよ。帰りが遅いようだが初陽さんと大人の階段でも上ったのかい？』

「疲れた。めんどい。晩飯は店屋物にでもしてくれ。以上」

『えっ、ちよともう少し俺と話を——』

問答無用で電話をぶっちぎった。

ツッコミ疲れたとさっきも言っただろうが。

「いや、春人は知らないだろ、それ」

おまえなに人の心読んでんだよ、とつつこもうとしたが、疲れるのでやっぱりやめた。

「……………帰るか」

「んー」

とりあえず、僕らは重い足を引きずりつつ、視聴覚室から出ていくのであった。



いくら晩飯を作るのが面倒だと言っても、明日の朝飯の材料は買わなきゃいけないので、僕らはひとまず近くのスーパーに足を運んだ。

時間が時間だったので、肉類や魚類が安くなっていたためにそれをゲット。そしてお一人様1パックの卵と牛乳を一つずつ、そして野菜やらを買って買い物終了。

「ほんじゃま、帰りましょか」

「んー……………っと、閉。ケータイ鳴ってるぞ」

「嘘、ってああ。本当だ」

小さなバイブレーションの音が、鞆から漏れている。僕は初陽に

ケータイを取り出してもらい電話に出た。
咲からだ。

「もしもし？何さ？」

『あ、お兄様。出前を取れと申しておりましたが、お兄様と初陽さんの希望を聞いていませんでしたので、連絡を入れたのですが……』

「あー……そう言えば。何頼むの？」

『ラーメンにしようと思うのですが………』

ラーメンか………。

「初陽、晩飯ラーメンらしいけど何味が良い？」

「とんこつー！」

「随分とこつてりしてるな。僕は……醤油でいいか。咲、豚骨と醤油一つずつ。あと、酢豚が食いたい」

『かしこまりました。では、なるべく早く帰ってきてくださいね？最近、色々と物騒なんですから。女の子二人で歩いてて、ストーカーにでもあわないで下さいよ？』

「心配は有り難いけど女の子二人とはどう言うことだコラ」

しかし、夜道が物騒なことには変わらない。
咲の忠告に感謝しつつ、僕は電話を切り、

「爆^はぜろ」

紅蓮の奔流に呑み込まれた。
轟音。爆散。意識、暗転。

14日目：主は仰った「最初から間違ってれば後は何やってもいいんじゃない？」
バイトを始めました。蜷です。

更新が遅れたのもそのせいです。疲れてたんです。
工場でひたすら袋詰めをしています。あれ、楽に見えて相当辛い
ですね。主に精神的な意味で。

とりあえず、また遅れてしまいそうな気がしますが、来週も更新
できるよう頑張ります。

てなわけで、そろそろ物語を急展開＋急加速させていきますので、
これからもよろしくお願いいたします。いやマジで。
そして、ここまで読んで下さる読者様に感謝を。本当にありがとう
ございます。

また次のお話でお会いしましょう。

ではまた。

15日目：焰と氷の姉妹と父親の妹（前書き）

また更新遅れたよおおおお！！！！！！

ごめんなさい。話がまとまらなかったんです。初めて書き終わってから全部書き直すという作業をしました。

と言うわけで、ぐだぐだしてる部分もありますが、どうぞ見てやって下さい。まじで。

15日目：焰と氷の姉妹と父親の妹

墨をこぼしたような漆黒の闇。

そこに一匹の黒い蠅が紛れ込む。

すると、その漆黒が突然蠢き、一つの形を形成し始める。

「フウウウウウ……………」

“それ”を一言で表せば、“異形”。

しかし、それは異形と称するにはあまりにも歪で美しく、ただひたすらに不気味であった。

「目覚めたか？ 蠅の王よ」

その異形に語りかける、一人の影。

影は人の物ながら、一目で化け物であることが解るような、狂気と禍々しさが宿っていた。

「ああ。実に良い気分だよ。しかし、これはいったいどう言うことなんだい？」

「なに、ただの進化の形だよ。ただの、ね」

「ふうん……………？でも、よくもこんな事を考えたものだね。ただの憑物では、こんな事、この僕様でも考えもつかないよ」

「この世は憑物には居辛い世界。しかし、だからと言ってこのまま人に狩り続けられるのは癪だろう？」

影の表情はわからない。しかし、その影からは隠しきれないほどの狂気が蠢いている。

「存在しないのであれば作ればいい。狩られるのなら、圧倒的な力を持って狩り返す。取り憑く者は、宿主を喰らい、それを借りて我を存ずる」

影が笑う。蠅は、知らず知らず影に問う。

「……………貴様は、何を望んでいる？」

「この世の破滅と絶望……………この世に“地獄”をもたらすことだ」

物語は、静かに狂い始める。

「きゃうっ……………」

「初陽！！」

僕は初陽を庇うように抱き寄せ、地面に伏せる。

「がああああ！！」

その背中を、紅蓮の炎に炙られる。
痛みに一瞬、意識が遠のくのを感じるが、気合いでなんとか踏みとどまった。

「神器、“ポセイドンの三叉槍” 顕現！」

そして地面から引き抜くように、黄金の巨大なフォークのような槍を顕現させる。

そして、敵が攻撃するために出したであろう“声”がした方向に向かつて槍の矛先を向け、

「神器解放！“海皇ノ怒リ” 発現！」

叫ぶ。

すると槍の先から、コンクリートを抉るような勢いの水流が迸った。

その先には、さっきの攻撃をしたであろう者の影が。

仕留めた——と、思ったが、

「凍てつけ」

「んなっ！？」

その影の前にもう一つの影が現れ、その全てを破壊せんが如く襲い掛かる水流を、氷の壁で防ぎ、あるうことか、逆に水流ごと氷らせてきたのだ。

パキパキと音を立てて氷ってゆく水流。僕は小さく舌打ちをして、水流の放出を止める。しかし、氷は槍の水流など関係無く、今度は周囲の空間ごと氷らせ始めたのだ。

「ちっ！神器、“魔剣レーヴァテイン” 顕現！神器解放——！」

襲い掛かる氷を、レーヴァテインの焰で焼き払おうとするが――

ふと一瞬、向こうに見えた影が三つにみえた気がした。そしてその次の瞬間。

「うっくな freeze」

「ッ！？」

いつの間にか、何者かに背後をとられ、首筋にナイフをあてがわれた。多分、僕がさっき見た影がこの後ろにいる奴だろう。

しかしこれは、有り得ない。五十メートル以上もあった距離を、僕がまばたきをしている間に詰め寄り、誰にも気付かれずに背後に立つなんて。

「てめっ——！」

「無駄ですわ。どんなにあなたが速く動こうと、わたくしがあなたの首にナイフを突き刺す方が明らかに^{はや}速い……。抵抗をやめて、大人しくしなさいな」

あたかも、プロの殺し屋のような、殺気さえも押し殺した冷徹な声。

僕は無駄な抵抗をやめて、やれやれといったように肩をすくめた。

「……………はあ。今回も《……》僕の負けだよ、^{なつねえ}夏姉、^{あきねえ}秋姉、^{ふゆねえ}冬姉」

すると、僕を拘束していた腕が緩み、背後の影が溜め息をついた。

「あら、つまりませんの。抵抗しないんですのね。殺せないじゃありませんか」

「あのね秋姉！僕の死活問題はつまり、つまらないの問題じゃねえよ！？」

緩んだ腕を振り解いて振り返ると、栗色のセミロングの髪が揺れていた。

端的にその容貌を言い表せば、爽やかな雰囲気をもった美人なお嬢様。涼しげな色のワンピースがよく似合っていた。

こいつの名前は終着駅 秋。僕の父親の春人の年の離れた妹であり、もちろんの事被師である。能力は……説明が面倒なのでまた今度。

「って言うか、こっちに来る度に、毎回毎回本気で僕を殺そうとするのやめてくれませんかねえ！？見てよこの背中！こんなに焼け爛れてる！」

「それはわたくしではなく、^{ちやうど}智夏に言うべきではなくて？ねえ、智夏？」

「カツハハ！そりゃあちげえねえなア！」

そして、次に煙草の煙をゆくらせながら現れたのは、炎のような緋色の髪の毛を乱暴に一つに纏めた長身の女性。

その顔には、ワイルドな笑みが浮かび、きつめの切れ長な瞳が細められている。

少々強面ではあるが、秋姉に負けず劣らずの美人である。

彼女の名前は終着駅 智夏。被師であり、炎や熱などを操る能力

を持つ。

「ところで、どんな感じで焼けたんだ？レアか？ミディアムか？ウエルダンだったら病院に行った方がいいぞ？」

「軽いなオイ！こんだけデカい火傷だったら、どんな状態でも病院行きだ！」

「だと思つて、冬香^{ふゆか}が冷やしてあげようと思つたの」

夏姉にツツコミを入れていると、眠たげなおっとりとした声が割り込んでくる。

そちらに振り返ると、銀色の滝がそこにあつた。

陽光を受けてまばゆいばかりに輝く銀の長髪。その下に隠れた眠たげに垂れた紫色の双眼。まだまだあどけなさの残る顔立ちに加えて、全体的に華奢な体つきは、雪のように触れたら消えてしまいそうな儚さがあつた。

名前は終着駅 冬香。春夏秋冬四兄妹の末っ子で、氷や水、冷気などを操る祓師である。

「冬姉……あれは冷やすではなく氷らすレベルだ。夏姉よりも致死率高いわ」

「でも、コールドスリープっていう手も、あると思うの」

「無いわ！眠るように死ぬだけだ！」

僕は一通りツツコミ終わると、いい加減痛みがヤヴァイ背中 of 火傷を回復した。

「って言うかさ、何で急に三人がこっちに来たわけ？」

「そりゃあもちろんお前をからかうために来たに決まってるんだろ」

「僕は今悪質ないじめを受けている！」

思わず頭を抱え込んで、地面にうずくまる。

「おーくん、落ち着くの。いつものちーねえの冗談なの」

「ですわ」

「……………知ってる」

からかうためだけに、遠路はるばるこっちに来るほど、夏姉はいやな性格をしている人ではない。

「わたくし達はからかいに来たみたいなのですが」

「なの」

「お前ら見た目がまともなだけにほんと残念な性格してるよな」

閑話休題。

「で、本当は何しに来たんだ？」

「当然のごとく仕事だよ。上から神託貰ってこっちに来た。……………」
「応な」

「一応？なんか引つかかる言い方だね」

「当然ですの。なんせ、依頼主は春君……終着駅 春人なんですから」

「父さんから？」

「いったいなんの？」

「と、考えてから、一つだけ思い当たる節があった。」

「今、おーくんが考えている通りなの。冬香達がここに来たのは、地獄関係で呼ばれたからなの」

冬姉は眠たげにそう言った。

「……………もしかして、殺すつもり？」

「んなわけねエだろ。だからんなこえエ顔すんなっつ。それに、殺す気ならもうとっくにお前もろとも地獄は消し炭だっつうの」

軽い調子で恐ろしいことを言ってくれる。でも、実際はそうとお
りだった。夏姉が本気で殺しにかかったのなら、最初のあの一撃で、
僕は熱いという感覚すら感じることなく焼かれていただろう。

そう思うと、なんとなく、不愉快だった。

そんな様子を見ていた秋姉は、そんな僕の心を見透かすように、

「閉、わたくし達が来た理由は地獄の観察。および地獄の護衛です
の」

と言った。

「觀察……と、護衛？」

ええ、と、秋姉は続ける。

「クライアントは春君と言う形になっていますが、もとはと言えば、とある人物が提案したことなんです。その人がどうやら地獄を殺すことはいろんな意味で得策ではない、と判断し、わたくし達を護衛に付けることを提案したのですわ」

「そう……なんだ」

僕は、いつの間にか握り締めていた拳を緩めた。

「……やっぱり、相変わらずですね。地獄の事になると、あなたは……」

「……わかってるさ。本当はいけないことだってくらい。でも、約束だから……さ」

秋姉との間に気まずい雰囲気きふんきが流れる。すると「ああもうめんどくせエ！」と、夏姉が割り込んでくる。

「閉はいちいち暗くえんだよ！秋も、閉につられて湿っぽくなってんじゃないえ！とにかく、アタシ達は今度こそ地獄を護るためにここに来たんだ！いつまでもうじうじしてねえで、ちったあ明るくなれつつの！」

怒鳴るように夏姉はそう言うと、くわえていた煙草をもみ消した。

「夏姉…………ポイ捨てはだめだよ？」

「細けエ事言っなって…………それより、問題の地獄はどこにいるんだ？」

あれ、そう言えば。

途中から全く初陽の声が聞こえなくなっていたような…………？
すると、くいくいとワイシャツの裾を誰かに引っ張られた。

「おーくん」

「なんだ、冬姉か。どうしたの？」

「地獄だったら、そこで寝てるの」

「寝てるう？」

言われた方向を向くと、地面に伏してる初陽の姿が。

「……………ねえ。寝てるつつより、気絶って言った方が良い気がするんだけど…………いつからああなってたんだ？」

「たぶん、ちーねえの炎に焼かれそうになったときからだと思うの」

僕は、夏姉の方を振り向く。夏姉は顔を背けている。

「ま、まーなんだ。護るつつても全ての事象からは護れねエ訳で、あれは遊びだったつつかなんつつか、別に怪我してなければ気絶くらい大目に見てほしいつつか……………なあ？」

「なあ？じゃねえよ！確かに怪我はしてないみたいだけど相手は地獄何だよ！？丁寧に扱わなきゃだめなんだからね！？」

「はぁ……………んだよわかったよわかりました！謝ればいいんだろ謝れば……………どうもすみませんでしたー！」

「態度悪うっ！？」

しかし夏姉は新しい煙草に火をつけて、そのまま家への道のりを進んでいつてしまった。

僕は言いかけた文句をため息に変えて、気絶している初陽をおんぶする。

「相変わらずだな、夏姉は……………」

「なら、いつも通り今日の悪戯も大目に見てあげるのですか？」

「それは無理だ」

「やれやれ……………おーくんは本当に相変わらずなの」

「当たり前だって言うかー応お前等も同罪だっつつことを忘れるなよ？」

「さあ冬香！春君ちまで競争ですよー？」

「待ってなのー、あーちゃん！」

「あっ！てめーらコラ！逃げんなああー！！」

どたばたと、いい年した大人達が逃げていく後を、僕はせいぜい初陽を落とさないように気をつけながら、全力で追いかけていくのであった。

○
●
○
●
○

□号外□

■財閥の■が■している事が判明。

■された場所は■田市。

六月下旬、町を歩いていた■財閥■■である男がそれらしき人物を■。

■門■閥と言えば世界屈指の有力な財閥であり、■年前の謎の■
■により■、■もろともに■■したと思われたが、その■
■■■いる可能性が――

これ以上は破れており、読めなくなっている。

15日目：焰と氷の姉妹と父親の妹（後書き）

キャラいきなり増えすぎだろ。大丈夫なのか、これ。どうも、蜷です。

とりあえず、話を終わらせる上で最低限必要な人材は揃いました。実際、終わらせると言えば伏線無視してあと数話で終わらせられます。まあバッドエンドですけどね。

でも、私はハッピーエンドしか許せない人ですし、まだこの話を書きたいので終わらせません。もっとごちゃごちゃになる可能性はありますが、まだまだ話は続きますのでこれからよろしくお願いします。

ではまた。

16日目：始まりはいつも突然に（前書き）

ようやく完成しました！遅くなつてすみません。

16日目：始まりはいつも突然に

「と、言うわけで、うちの妹三人が居候することになったから」

「よろしくなー」

「ですわー」

「なのー」

と言うことが、約一週間ほど前にあったような気がしないこともない今日。

「……………明日から、夏休みです」

僕たち学生にとっての一大イベント、夏休みがすぐそこまで迫っていた。それはもちろん、つい1、2ヶ月前に学生になったこいつにも言えるわけで。

「閉、夏休みだぞ夏休み！」

「わかってるって。つか、ホームルーム中にでかい声出すなよ……………」。子子子子先生に怒られるぞ？」

そして案の定、子子子子先生は僕たちのほうを向いて、背筋の凍るようなさつきを放ちつつ、

「……………閉、喋るな。シネ」

「ほら見る怒られ——ってなんで僕だけ怒るんはいすいません、静かにします。ハイ」

何か納得いかないものだけが残った。

まあそんな事は実際どうでもいいとして。問題なのはここからだ。

「……………閉？なんでそんなに身構えてるんだ？」

「おま……………むしろお前に聞きたいよ。なんでお前はそんなに気楽に構えてるんだよ？」

しかし、初陽は僕の問いかけに首をかしげるばかり。もしかしてこいつ……………忘れてる訳じゃあるまいな？あのいまわしき存在を！

「忘れてるって……………何をだ？」

「……………マジかよ」

僕はため息をついた。まさか本当に忘れていやがるとは。……………いいだろう。だったら嫌でも思い出させてやる！

「いいか？初陽。それはな——」

「……………それでは、期末テストの成績を、返却します」

「——期末テストの事だ！」

「閉、先生にセリフ取られてる」

「うるさい黙れ、先生のタイミングが悪いんだ」

「…………閉、放課後、生徒死怒有室　せいとしどうしつ　に來い」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……………」

はじめて教室で土下座した。何なんだよ、生徒死怒有室って。

「いいな！いいな！俺も先生の性　・　徒指導受けたいな！」

「二三四、急にししやりでて来るなよ。いちいち卑猥に言い換えるなよ。先生、なんか言ってやってくださいよ」

「……………それでは、順番にテストの結果をとりにきてください」

「スルーですか。そうですか」

閑話休題。

「そして期末テストについてだが、点数が悪いと夏休みにも登校義務が発生すると言ったことを忘れたのか？いや忘れたとは言わさんぞこのやるつ」

すると、初陽は一瞬ぼけーとしたあと、一瞬にして顔の色素がサアッと落ちて青くなり、ガタガタと震え始めた。

普段の僕ならここで皮肉のひとつでも言っているところであろう。しかし、今回ばかりは話が違うなぜなら初陽のテストの点数「僕の点数だからである。え、言ってる意味がわからない？読み直せ。主に二日前くらい。」

まあ、とにかくそんなわけで。

「……………あああああああああああああああああああああああ
あああああ……………」

「初陽、落ち着け。そういうリアクションは女の子がやつちやいけ
ない部類のやつだよ。二三四あたりに任せとけばいいんだよあああ
ああああああああああ……………」

「先生、終着駅さん達が絶望で死にそうになってるんですがー」

「……………前田、早くとりよきて」

さすが先生、モブキャラの意見は華麗にするーだぜ！ガツデム！
そしてありがとうモブキャラの君。名前はたぶん阿 いのうえ 君
そういうことにしておこう。いつかきつと、活躍するときに来る
さ。

しかしまあ、なんだ。テストが返ってくるまで時間があるな。追
試で受けたから一番最後に返ってくるみたいだし。場面を転換して
もいいんだが、テスト返却の話としてそれはそれでどうなのよ？つ
てなわけで、僕は斜め右側にある貫禄に満ちた背中を叩いた。

「留守、テストどうだった？」

「おお閉。ふふふ。これを見るがよい」

しわくちな顔をさらにくしゃくしゃにして笑いながら、留守は
自慢気に自分の結果を見せてきた。

……………ところで、留守は普通に勉強ができるやつだ。へこんでい
るところと言えば、見た目どおりに英語のできが芳しくない。とは

言え、赤点は回避しているのだが。しかし、

「他のものはいつも通りだからおいとくとして、英語が87点……」

「うむ。沓名や閉のおかげで、今回の考察の範囲だけじゃが理解することができたのじゃ。感謝する」

「いやいや……」

年上のおっさんに頭を下げられても対応に困るね。

ところで先ほど沓名の名前が出たが、あいつの結果はどうなんだろうか。そう思っていると、初陽が本人に聞いているところだった。

「詩華は補習補習なのか？」

「おうおう初にゃん、そりゃあ去年補習食らったあたしにたいする嫌味なのかね？」

「いや、そんなつもりじゃ……って何してるの」

「ニーソと太ももの間に指でもいれようかと。……ああ、ぷにぷにだわ」

「や、ちよっ……くすぐりたい」

「ハアハア、ハアハア。クンカクンカ、クンカクンカ」

「あ………んん、息が、なんかっ、変なところに——」

ゴンッ！

「いいつ………たあゝ………！ちょっとおわりん！本気で殴ることないじゃんか！」

「うるさい。ちなみに本気ではない。本気で殴ってたらお前の頭は消し飛んでいた」

「ちゅーにおつ！」

「……………」

ゴンッ！

「うあついつあつう……………」

「事実だからしかたない」

「閉、女の子をいじめちゃ駄目だよ」

「その通りだけどお前を変な世界に引きずり込もうとするやからを、このまま野放しにするわけにはいかないからな。必要悪だ必要悪」

「変な世界に？……………ああ、わたし知ってるぞ。詩華みたいなのをユリって言っただよな」

「ちなみに男の子同士はバラって言っただよ！」

「だまれい腐れ女子。て言うか話が脱線しすぎだ。もとに戻せ」

「じゃあ初にゃん。今度はニーソを片方だけ脱ぎ脱ぎしましょうか」

「違う！」

鉄拳制裁、閑話休題。

「ええつとぉー、あたしの点数はあゝ、こんな感じらよぉー」

目をチカチカさせながら、詩華は自分の結果を見せた。

「全体的にはすごいのかすごくないのか、よくわからん点数だな」

「でもえーこは百点れしょ？すごいれしょ？」

「……なあ閉、詩華は大丈夫なのか？」

「……正直やっちゃった感が否めない。けどまあ、大丈夫」

「え、なんで？」

「ヒント：今はギャグパート」

「………???よくわかんないけど、ほっとけばいいってことか？」

「その通り」

「あははゝゝにぱゝ」

とりあえず詩華のもとから去ることにした。
さて、と。そうなると最後に二三四が残っているわけだが。

「ついいいよっしやあああああ!!」

「ああ、あいつが喜んでるってことは補習ってことだな」

「え、なん——ああ、わかった」

僕と初陽は子子子先生のほうを見る。いつも無表情な先生が、このときばかりは露骨に嫌そうな顔をしていた。

「先生にあんな顔をさせるなんて……ハジメは何をしようとしてるんだ」

「しっ、初陽声大きい。あの変態に聞かれたらめんどくさくなるでしょ?」

「あ、ごめん。うつかりしてた」

「いいいいよおおおおおつつつつつしやあああああああ
あ!——!」

「……………(うげら) ↑先生

まあ、よっぽどの事がなければ聞こえないと思っけどぞ。

「……………終着駅 閉、初陽。取りに来て」

さて、それじゃあ最後は僕たちか。

「うつうつ……………。補習じゃありませんように……………!」

「結果が絶望的だつてわかつてても、なんか祈りたくなるんだよね……頼む、赤点ギリギリでいいから、頼む！」

僕は、祈るようにゆつくりと結果の紙を開いていく。
すると不意に、ぽんと背中を叩かれた。叩いたのは子子子子先生だ。

「……………閉に、初陽」

「なん、ですか？」

「……………その点数を見て、わたしは、安心した」

え……………つて、事は、まさか——！？

「お、閉！」

「お、おう！わかつてる！」

いきなり高校生からスタートした初陽。しかし先生はこの点数で安心したと言っている。つてことは、だ。ギリギリかもしれないけれど、赤点を免れたつてことなんじゃ——！？

震える両手で、恐る恐る結果を開けば——。

「……………１００点だ」

「ほんとか！？」

「あ、ああ！１００点だよ！初陽！」

「や、やったあ！！それじゃあ——」

「……………補習、だね」

「……………え？」

ポカンと初陽は口を開けた。いや、まあ、ねえ？

「……………100点は、100点でも、合計が、100点」

「まあ……………なんだ。うん。オール赤点。補習確定」

「……………ああああああああああああああああああああああああああああああ……………！！！」

初陽はがつくりと崩れ落ちた。good-bye、僕らの夏休み

……………。

……………ちなみに。

「なんで、安心したなんて言っただんですか？」

「二三四と二人だけにならなかったから」

だ、そうです。最初の三点リーダー三文字のまもなく答えてくれました。

「……………それでは、おのあの楽しい夏休みを、過ごしてください。解散」

終着駅二人組最初の夏は、早々に暗礁に乗り上げたようです。

「…………それと、閉はこのあと生徒死怒有室」

「……………逃げていいですか？」

「……………ダ、メ」

その後、校舎のどこから悲痛な叫びが小一時間聞こえてきたそう
うだ。自分に、南無。

□ ■ □ ■ □

「あーいてて…………死ぬかと思った」

僕は、地獄の指導……………いや、死怒有室から、なんとか生還する
ことに成功した。

「閉……………だいじょぶか？」

「なんとかね……………」

とは言え、だいぶボロボロになっている僕の言葉を初陽は鵜呑み
にはできないようで、曖昧にうなずいていた。

「それよりごめんな、待たせちゃって」

「ん、全然へーきだぞ」

時刻は午後五時を少し回ったところ。学校そのものは一時頃に終わっていたはずだから、全然平気とは言えないくらい待たせていたはずなのに……。

「詩華が話し相手になっててくれたからな。退屈はしなかったぞ」

「そっか。あとでお礼をいっとかなきゃな」

「あと、性的な意味で仲良くもなったぞ」

「そっか。あとでお礼参りしなきゃな」

「……って言うと、閉が面白い反応するって」

「そっか。でもお礼参りは絶対にします」

「って言うかそもそも、あいつってそんなキャラだったっけ?……ま、いっか。」

「んじゃ、さつさと帰りますか」

「ん!」

そして、僕らは明日からの事をぐちぐち言いながら、我が家にむかうのだった。

……まあ、なんだ。その時は多分、夏休み前ってことで、ちょっと油断してたのかもしれないな。……少しばかり、反応が遅れた。いやあ、まいったまいった。

「初陽!あぶねえ!!」

「ふえ……………きゃっ!？」

僕は初陽を道路の端に突き飛ばした。これでよし。

あとは僕も逃げられればいいんだけど。……………さすがに無理か。

ホント、今年の夏は災難続きだ。って言うか、二回続けてこのパターンかよ。話の締めをパターン化すると、読み手に飽きられるんだぞ？

「いったゝ……………閉、なにすん——っ!？」

「ハ、ツヒ、にげ——」

ぐちゃ。

17日目：災厄と最悪（始まりの終わり）（前書き）

今日の神器：ティルフィング《ているふいんぐ》

説明：13世紀に書かれた北欧の物語『ヘルヴォルとヘイズレク王のサガ』に出てくる呪われた剣。柄は黄金、鉄でも紙のように切れる消して錆びることのない剣なのだが、持ち主に死をもたらす呪いがかけられているのである。この剣で栄光を勝ち得た王は、その後すぐに非業の死をとげたとか。

17日目：災厄と最悪（始まりの終わり）

世界が赤く染まっていく。

別に詩的な表現をしているというわけではない。現に、太陽が沈むにはまだいくらか余裕のあるような位置にあるからだ。

では、なぜ？なんで、僕の世界は赤く染まっている？僕の見る世界は、こんなにもネットリと赤いんだ？

……ああ、そうか。そうだったな。ちよいとショックで忘れていたよ。

この赤は、全部僕の血なんだった。

「じ」……ひゅ……は……ああ……」

まずいな。うまく言葉を出せない。それに、なんか下腹部が焼けるように疼く。苦勞しながらその疼く位置を見ると、なるほど。体が半分無くなっている。道理で下半身の感覚が無いわけだ。しっかし——。

（や……べえ……ぞ、こ……れ……）

出血量が半端ない。普通の人間ならとくに死ねる量を出てる。って言うか、半身持ってた時点で死んでる。つまり普通なら二回は死ねてる。それでもって、気管が血で詰まってるらしく、言葉を……神器を顕現できない。さすがの僕でも、回復しなきゃそろ

そろ死ぬ。三度目の正直つてのはこの事か？

「う……………ぐう……………」

そろそろ意識も遠のいてきた。回りの音も、うるさいくらいに何も聞こえなくなっている。

そして、今度は白く染まっていく世界の中で、ふと、その端に何か金色に光るものが見えた。

それは大きな紅の瞳を見開いて、何事かを呟いている。

早くにげる。お前も死ぬぞ。僕は必死に叫ぼうとするも、口からは鮮血が溢れるばかり。

そしてその金色に、黒い何かが近づいていく。

やめる。初陽にてを出すな。立ち上がろうと力を込めるも、立ち上がるための足がない。それなら腕をと思ったが、地面に縛り付けられているかのごとく、腕を動かすことができない。

「……………、……………」

もう、自分が血を吐く音すら出ない。どうやら、これで本当に終わりのようだ。初陽、ごめん。僕は、もう……………。

「……………あああああああ……………！！！！！！おわりiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！！！」

最後に初陽の声が聞こえた。それは悲痛としか言えないような、絶望を孕んだ声だった。

ごめん、本当に、ごめん。僕が守るっていったのに、こんなことになっちまった……………。

ああ、畜生。神様ってやつがいるなら聞いてくれ。頼むから。

僕の事はもうどうなったっていい。このまま僕は死んでもいいか

突然、何者かの声が聞こえてきた。いや待て、この声、どこかで聞いたことが――。

「おやおや？その雌ガキは僕様のことを覚えてないの？ム力つくなあ」

「だ……だ、れ？」

辺りに首を巡らすが、何もいない――いや、いた。閉だったもののすぐ近く。小さな、鈍い光を放つ黒い蟲。

「ま、さか……お前、は……」

「んん？おやおや？思い出した？思い出しちゃった！？この偉大なる僕様のことを！」

すると、いったいどこからわき出てくるのか、大量の蟲――蠅・が、一つの生き物の形を形成した。

「お久しぶりな気がするから、もう一回ほど名乗っておこうか！僕はベルゼブブ！偉大にして強大な悪魔の大王さ！あははははははははっ！！」

無邪気と言うにはほど遠い姿で、ベルゼブブは無邪気に笑う。

――こいつが、閉を殺したのか。

心の奥底で、本当は認めたくなんか無い閉の死という現実を、わたしじゃないわたしが静かに受け止めて、そう呟いた。

その呟きは、清水に垂らした一滴の墨のようなどす黒い波紋を広げていく。わたしがわたしじゃ、無くなっていく。

……でも、それでもいい。この蟲を、殺せると言うのであれば。

「………… あああああああああ！！！！おわりiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！！！」

慟哭、咆哮、絶叫。そのどれにも属さないような声が、音が、暴力的にこぼれ出す。そしてまた、あの感覚。わたしが内包するなにかが蠢いて、からだの外に溢れ出す。

地獄が外に、溢れ出す。

「………… 地獄とは、心の闇。僕様たち憑物を遥かに凌駕する最上級の絶望の象徴。生きて地獄を味わうもののみ、その恩恵を授かることを赦される……………そして——」

「ああああああああああああああああああ！！！！」

金色の髪は漆黒に。真紅の瞳は深紅に染まる。半身の皮膚は、青黒く腐り、異臭を放ちはじめる。わたしは、成った。世界に、そして絶望に。

「—— 地獄は絶望すること、その姿を顕現させる！そう！地獄という憑物そのものを！！はははっ！！あのお方の云う通りだ！あは！あははははははははははっはあ！！」

「……………」

ベルゼブブは、逃げ出さず、狂ったように笑った。

初陽は—— 地獄 ヘル は、静かにその姿を見据えていた。



ベルゼブブの召喚した蠅が、黒い鉄球の様に確かな質量をもって初陽に、ヘルに襲いかかる。初陽は眉ひとつ動かさずにそれを見据えると、

「おいで、ニーズヘッグ」

小さく、しかしはつきりとした声で呟いた。するとヘルの目の前に、巨大な魔方阵が現れ、そこからまた巨大なドラゴンのような生き物の頭が現れた。

そしてそれは、向かって来る蠅の大群を見つけると、たったの一口でその塊を呑み込んでしまった。ヘルはそれを確認すると、

「……………番犬よ」

再び地獄から、今度は三匹の犬の化け物呼び出す。蛇の鬣に三つの頭の番犬と、炎を纏う双頭の獵犬。そしてその二匹を遥かに上回る大きさの猛犬。それらは地の底から響くような唸り声をあげ、主の命令を今か今かと待っている。そして――。

「引き千切れ!!」

地獄の命令で、三匹の犬はベルゼブブへと襲いかかる。

「蠅よ――」

「遅い」

「……………!!」

「どういうこと、とは？」

「憑物はその特性を持つ憑物出ない限り、再生なんて馬鹿げたことはできないはずだが？」

憑物の死には、実は二つのパターンがある。一つは、被師に抜われる……つまり浄化されることと、あともう一つは、ついた人間……つまり宿主が死ぬことでもこの世界から消えてしまうのである。

肉体の再生も然り。宿主の怪我は憑き物の怪我はでもあるため、宿主が再生するまで負った傷は癒えることはない。しかし、ベルゼブブはどうだ？ 頭だけで生存していたと言うのは、普通に憑いていたのではなく、魂憑だったということで一応は説明がつく。

しかし、肉体の再生についてはどう説明する？ ベルゼブブに、そんな能力は無いはずなのに……。

「いつまでも地獄に縛られている僕様じゃあないんだよ……」と言うわけで、はい」

「？……！！？あ、があああああああ！！！」

ベルゼブブが指をならすと、喰われた右腕の付け根から蠅が湧き出て体を喰らいはじめた。

「あの人からは頭さえ残ってればいいって言われたからねえ………容赦なくいかせてもらうよー、あはははははは！！！」

蠅が体を食らっていく。瞬く間に下半身が消失し、ヘルは地面にポトリと崩れ落ちた。

「あはは。そー言えば君、こんなこと言ってたよねー。最後に言い残すことはあるか……………だっけ？ かつこいー！ あひやはははは！」

「あ……………フェン……………リ……………がー！」

口のなかに蠅が入り込む。ウジャウジャと口のなかに不快な感触が無数に入り込む。ヘルはそれを吐き出そうとするが、出来ない。

「呼ばせないよー、あはは。君はこのあとなにもできずにこのまま食べられちゃうんだからー」

蠅の蠢きが、再び活発になる。このまま、なにもできずに終わってしまふのだろうか？ 頭だけ残されて、わたしは殺されるの……………？
ヘルは……………初陽は、残ってる左手を伸ばす。

いや、死にたくない。せつかく手にした平和なのに。せつかく戻ることのできた日常なのに！

けれど、伸ばした左手さえも、徐々に喰われて無くなっていく。それは最後の希望が崩れていく様にも見えて――。

「テイルフィング顕現、神器解放、災禍 デイザスター」

――新たな絶望の始まりだった。



—— いったい何が起こったと言うのか。
気づけば地獄の首はあの男の手の中にあつて—— 僕様の体
がまたもや無くなつていた。

「あーあ、まーた首だけ残つちやつたよ。久しぶりだからちよいと
加減がわからねえんだよなあ……」

「貴……様……」

「なんだあ蟲。もしかして僕の顔になんかついてる！？ いやん、は
つずかスイ〜！！ ケケケ！！」

さつき殺したその男は、恥ずかしそうに体をくねらせながらそう
言った。 いや、そんなことはどうでもいい。 なんでこいつは生きて
いる！？

「んん？ おやおや？ なにやら僕が生きてることに不思議風味？ そん
な感じ？ やだなあ、旦那。 それくらいわかつてんてしょ憑物なら〜
！！ このこの〜！！」

いやいや、理解できない。 僕様はたしかに殺したはずだぞ！？

「殺した」生きていないなんて、最近じゃあ廃れた公式だよ！ お前
は連立方程式か！！ ケケケ！！」

…… いやいや、意味がわからない。 だいいち連立方程式は今で
も使われてるだろう。 って、

「なんで僕様がツツコミに徹しなきゃいけないんだよ！ っていうか

人の思考を読むな！僕は魔王だぞ！？」

「じゃあ僕は魔王神！仲良くしようぜブラザー！」

「やだよ！死ね！」

ベルゼブブは蠅の大群を、被師の男に………終着駅 閉にぶつける。

「おつとつとお！」

しかし、次々と迫り来るそれを閉はひよいひよいと軽くいなす。

「ブラザー、僕は悲しい。仲間を殺そうとするなんて………」

「うるさい被師！」

「違うね、憑物だ」

「なに！？」

閉は軽く跳躍すると、電柱の上に飛び乗った。

「お前が憑物だと！？」

「そうそう。あ、でもちよいと違うのかな？まあいいや。地獄から生まれたってことに関しては一緒だし」

「な、何をいつて——」

「ま、どうでもいいじゃんそんなこと。簡単に言えば、週刊少年ジャンプよろしく、都合よく真のちからに目覚めたってことで！」

すると閉は手にしていた剣を一度消し、新たな神器を顕現させた。

「ウンウン、この赤い剣のがしつくり来るなあ。いつもこの子が使ってるからかな？……まあいいか。じゃ、そろそろ死のうか！」

「く………な、なめるなああああ！！！」

ベルゼブブが再び蠅をぶつけに来る。閉は、今度は避けなかった。代わりに、

「神器解放、災厄之業火 レーヴァテイン ！！！」

その大群のすべてを、一振りですべて焼き払った。

「な——！！！」

「ところで、なんで僕が生きてるかだっけ？」

「！？？」

いつの間にか懷に潜り込んだ閉が、居合い切りの構えをとりつつそう言った。

「それはね？終着駅 閉が望んだからだよ。僕はどうなってもいいってね」

「それがなんで生きてることに——」

「はい、時間切れ」

そして、剣が紅く閃き、ベルゼブブは業火に包まれた。
それが、終わりの合図だった。

「……さてさて、閉君の望んだ通り、初陽ちゃんは助かって……
るのはわからないけど、ええと……… おおーい、生きてますかー
？って、生首に聞くのおかしいんだけど………」

閉は、ぺしぺしと小脇にかかえた初陽の生首の頬を叩く。

「………おわ……り？」

しかし、そこはやはりと言うべきか、ヘルは……… 初陽は生きていた。

「よしよし、やっぱり生きてるね。だったら問題ないでしょう！ テ
クマクマヤコンテクマクマヤコン、もうどうにでもなーあれ、じゃ
なくてエリクサー！」

「あ………」

首から骨が生え、臓器ができ、神経が通って血管が巡りそれらが
肉と皮膚に包まれる。

「んで、こいつはオマケ！」

ぱちんと閉が指をならすと、裸同然だった初陽は元通り高校の制
服に身を包んでいた。

「よしオウケイ。んじゃ、僕は帰るよ」

「え？あ……………待て！」

「無理。じゃあね、お母さん《……………》」

「へ？」

すると、閉は糸の切れた操り人形のように、ぱったりと倒れ込んでしまった。

「……………終わった、ん、だよね？」

初陽はそう呟くと、閉と同様に崩れるようにその場に倒れた。



——どこか。真つ暗な部屋の中。

「どうやら、失敗したみたいだね」

「……………」

黒い影が、指に止まった一匹の蠅に語りかける。

「いやはや、想像以上だねえ。地獄もさることながら、そのお付きの被師も化け物とは」

影は、楽しそうに笑う。

「……………ん？なんだい？新しい体が欲しいって？……………わかってる。君にはもつともーっと働いてもらわないといけないしね」

そういうと、影は小さく微笑んで、優しく蠅を握りつぶした。

「そう、役立たずの君は力になってもらつよ……………ぼくの、ね。くく、あはははははははははは！！」

そして、影は狂ったように笑って、暗闇の中に消えた。

17日目：馬田乃学園補習授業（前書き）

お久しぶりです！

そして謝罪はあとでする。

17日目：馬田乃学園補習授業

さてさて、どうしたものかね…………。

終着駅 春人は、パソコンのディスプレイを眺めながら、心の中でそう呟いた。

画面に写っているものは、先程起こった戦闘の映像である。

「…………地獄^{ヘル}の顕現ならまだしも…………まさか閉のアレまで顕現し始めたとは…………」

思わずため息をこぼす。が、春人の口許には笑顔が浮かんでいた。

「…………楽しそうですね、お父様」

「んおう！？…………あ、ああ、咲か。どうだ？初陽ちゃん達の様子は…………」

突然背後に現れた咲に春人はびりつつ、あわてて口許を引き締める。咲はそんなことは意に介さず、問われた質問に返答する。

「はい…………まだ目を覚ましません。が、特に外傷ありませんし明日辺りには目を覚ますかと」

「そうか…………。まあ、明日から夏休みな訳だし、しばらく寝てても問題はないがな」

「…………そうですね。では、私はお兄様がたの看病がありますので、これで」

咲はそう言って事務的お辞儀をすると、春人の部屋から退出しようとした。が、その背中に待ったの聲がかかる。

「看病するなら、閉にこれ飲ませとけ。バレないように」

春人から放り投げられた小さな包み紙をキャッチすると、咲はその包みを開けた。包み紙のなかにはビー玉のような丸薬みたいなものが入っていた。

「……………これは？」

「終着駅 春人特製記憶制御薬。閉の口のなかに突っ込んで無理矢理でも飲ませろ」

「飲ませろって……………こんな大きな丸薬、無理矢理飲ませたりなんかしたら窒息しかねませんよ！？バカなんですかお父様は！！」

「大丈夫、実はその丸薬凄く柔らかいんだ」

「まったく柔らかくなんてありませんよ！？ほら見てください！力ツチ力チですよこれ！こんなに力ツチ力チなんですよ！？」

「マイ・ドゥター、そんなに興奮して顔を赤らめながら力チ力チ力チ力チ言わないでくれ。エロいから」

「だれが言わせてるんですか、だれが！！って言うか久々の出番なのにこんなのひどいです！！」

「おメタな発言は禁止だ」

閑話休題。

「とりあえず、飲ませることは了承しますけど……… いったい、何故お兄様にこんなものを飲ませる必要が？」

すると春人は、少し真面目な顔になった。そして、

「なんとなくぶええ！！？ ちょ、娘に殴られた！！ こんなの初めて！！！」

「お黙りなさいクソ親父。真面目に質問してるんですから真面目に答えてくださいうすらハゲ。でないと山奥に捨て置きますよ？」

「娘が反抗期なう」

「喧かないでくださいよ。また殴りたくなります」

「それはマジでやめて。お父さん悲しくなっちゃう」

「なら真面目にしてください」

「はいよ」

やれやれ、と言った様子で、春人は話始めた。

「正直に言おう。まだあいつは伏線であって、この物語の役者ではないからだ」

「…………… 余計に意味がわかりませんか？」

「まあ……………いわゆる裏ボス？」

「……………すべてが終わったあとの物語の舞台役者、と言うわけですか？」

「んー、細部はわずかに違うけど、今はそれで正解で良いか。まあとにかく、語り部が知ってたら、日常どころじゃないからな。それを飲ませちて辻褃合わせをしてやっというて」

「はあ……………ま、いいでしょう。今はそれで納得しておきます」

「そうしてくれると、おとーさんとしてはありがたい」

春人がため息混じりにそう呟くと、咲は小さく微笑んでから、春人の部屋から出ていった。

「……………さて、本格的にどうすっかなあ」

天井を見上げ、春人はまた、ため息をついた。
するとそのとき、春人のパソコンにメールが届く。

「誰だよ、このくそ忙しくなるってときに……………」

一つ舌打ちをしてから、春人はそれを開き――。

「……………おいおいおいおい、冗談だろ？楠神イ……………！！」

戦慄が走った。



初夏の太陽を目を細めて見上げながら、僕は団扇でその暑さをまぎらわそうとするが、それはまったくもって無駄な行為だと悟り、大人しくそれを鞆のなかにしまった。

そして眼鏡のブリッジにたまる汗が不快になって、それをはずす。まあ、伊達眼鏡だし、つけてなくてもなんの影響もないしね。

「美少女が三人になったぜイヤッホオオオオイ!!」

「……………」

……………余計に暑苦しくなったので、汗をふいてからやつぱりかけなおす。

僕は今、夏休みの補習に来ている。教室のなかには僕のほかに初陽、そして二三四の三人しかいない。

「そう言えば、子子美はどこに行ったんだ？」

「先生は職員室で会議だよ。あと、三年の夏期講習の手伝いとか。だから僕らはここでプリントをやってるんじゃないか」

「くそう……………来年にはいなくなる受験戦争の亡霊達に、俺の美少女ハーレムを崩されるとは……………!!」

「三年生に失礼だろ。そして僕らはお前のハーレムになった。って言うか僕は男だ目をさませ」

「最近、男の娘もあかなあって、俺のソウルが叫ぶんだ」

「ここの答えは“節操無しな男は甲斐性もない”って……」

「バイト探してくる！」

初陽の無意識の言葉に、二三四は全速力でどこかへ走り去っていった。

「……………？二三四、どうかしたのか？」

「いや、気にしなくて良い。さっさとプリントを終わらせて帰ろう」
って言うか、この問題集どうなってんだ。僕は次の問題に目を落とす。

「……………“今お前の目の前に眼鏡がいたら、そいつは十中八九変態だ”」

僕は眼鏡を外した。

「そう言えば、閉」

「ん？」

「昨日は助けてくれてありがとな」

「ん……………？ああ……………別に、良いよ。そんな」

昨日の出来事を思い出して、僕は少し肩を落とした。

ベルゼブブとの戦闘で、僕は命を落としかけた。不意を衝かれた
とは言え、自分が殺されかけたところか、初陽にも危険な思いをさ
せてしまった。

どうやら、僕が死にかけた瞬間に父さん達が駆けつけてベルゼブ
ブを浄化してくれたらしい。

最初の一撃からかばったとは言え……結果的に初陽を救ったの
は父さん達だ。まあ……夏姉達は初陽を守るためにここに来たん
だから、これが当然っちゃ当然なんだけど……。

「……………閉？」

「ん？くおあえ！？いでっ！？」

「うえ！？お、閉！？大丈夫か！？」

思わず僕は後ろに飛んだ。椅子に座ったままだったので、床にし
たたか頭を打ち付けた。いつてえ…………。

「うー……………いったあ……………急に驚かせるなよ」

「いや、わたしにはそんなつもりなかったんだけど……………」

「いやいや、いきなり超・至近距離にお前じゃなくても誰かの顔が
あつたら誰でも驚くわ」

なんかすげえ心臓ばくばくいつてるし。これが……………不整脈……………
…。

「ああ……………そうだったのか。ごめん……………。でも、お前、なんか
すっごい怖い顔してたからさ、ちよっと……………な」

「え……………ああ、僕そんな怖い顔してた？」

「ん……………。なんか心配事とかか？わたしにできることなら相談しても良いぞ」

「いや……………いいよ。大丈夫」

僕はそう言っ、もとの席に座り直す。

この事については、初陽に相談する類いのものではない。

「……………んむうー……………。また怖い顔してる。可愛い？のに勿体ないぞー」

「それは誉め言葉なんですかね？って言うか近い！また顔が近いから！」

「そうか？詩華は普通にこのくらいまで迫ってくるぞ？」

「それは女の子相手だからだろ！って言うか、詩華の場合は女の子相手でも危険な気がする！とりあえず怖い顔はやめるから離れる！」

「ん、そっか。よかった」

そう言っ、初陽はにっこりと笑った。

笑うのは良いんだけどさ。こんな至近距離で微笑まないでくれмасかね。って言うか、お前はもう少し自分が可愛いということを感じても良いんじゃないかしら。

「閉？今度は顔が赤いぞ？」

「だから顔をよせるでないつつに！ってかこんなところ誰かに見られたら――」

がらがらがら。

「……………」

「……………？」

「……………わ、お」

がらがらがら……………ピシャッ。

「せんせいまつてええええええ！！これは違いますから！！先生絶対勘違いしてますからあああああ！！」

僕はあわてて教室を飛び出し、子子子先生の肩をつかんで振り向かせた。

「……………乱暴、なのは、嫌いじゃない」

「今の一連の行動から、どうやったらそんな言葉がでやがりますか」

「……………私にも、接吻を、するのではないかと」

「ああ、確かに微妙に距離を詰めすぎましたね。すみません」

僕は適度な距離をとって先生と向かい合った。しかし、何ゆえ先生は微妙に残念そうなのだろうか。

「まあとにかく、あれはただ顔色の悪かった僕を気づかった初陽がとった行動であって、別に、『それ、何てエロゲ？』みたいな展開を繰り広げていたわけではないんです」

「…………対象年齢的に考えて、それ、何てギャルゲー？のほうか、正しい、よね」

「そうですね。って違いますよ。なにいつてやがるんですか」

閑話休題。とりあえず、子子子子先生には教室に入ってもらうことにした。

「子子美、かきこーしゅー？はもういいのか？」

「…………うん、私の授業は、もう終わった。それより、一三四が、いないみたいだけど？」

「ああ、えーつとあいつはかくかくしかじかでバイトを探しにいきました。とっ捕まえてきますか？」

「…………いや、なんか怖いから、良いや」

そんな理由で補習の生徒をほったらかしにして良いのか？

「…………大、丈夫。明日のプリント、倍にすればもーまんたい」

いや、それは学校としてどうなのよ…………。まあ、先生が良いって言っんなら良いんだけどさ。

「……………それ、よりも。二人とも、あとのくらいで終わりそう?。」

「えーっと、僕は一応終わりましたが……………初陽はどう?。」

「うー、ちょっと待って……………っとよしっ!終わったぞ!。」

そして先生は僕たちからプリントを受け取りさっと目を通すと、満足そうに頷いた。

「……………ちゃんと、全部やってある、みたいだね。あってるか、どうかはともかく」

先生がそう言うと、初陽はぱったりと机に倒れこんだ。

「うう……………疲れたよう……………」

「こらこら、この程度でへばってどうする。これから少なくとも七月中は毎日補修なんだぞ?。」

「……………あう……………」

だめだこりゃ。目が死んどる。

すると、先生はそんな初陽をあわれに思ったのか、こんな提案をしてきた。

「……………初陽。補修が、終わったら、閉が海に連れて行って、くれるから。頑張る」

「そうそう僕が海につてえ!なんで勝手に人の名前使ってるんですか!?!そこは先生が——って言うところでしょ!?!。」

「……………そんなこと言って、良いのかしら？」

なん……………だと……………？これは殺気……………！？この人、意地でも僕に初陽を海につれていかせる気が……………！？

「いや、別に普通に連れていくつもりだけだね」

「海にか！？」

「お、おう」

あまりの食い付きっぷりに、僕は思わず驚いてしまった。しかし、驚いたのは別に僕だけではないようだった。

「……………意外。もう、少し、渋るんじゃないかと、思ってた」

「意外って……………そりやもともと行くつもりでしたし、1人2人増えたところで変わりませんよ」

「じゃあ、じゃあ……………！」

「うん。ちゃんと補修を頑張ったら、海につれてってやるよ」

「やったあー！！」

両手をあげて、素直に喜ぶ初陽。僕はくすりと微笑みながらその姿を眺めていると、

「……………ロリコン？」

「おい待てどうしてそんな言葉が出た」

「……だって、気持ち悪い笑みを、浮かべてたから……」

「……なんか地味に傷つくんでやめてください」

とりあえず凹んだ。

余談。

若さのままに走り出した二三四は戻ってきたところを捕捉され、先生にこの世の地獄を味あわされたようだ。南無。

17日目：馬田乃学園補習授業（後書き）

とりあえず土下座している蛭です。ごめんなさい。

もうほんとにごめんなさいしか言葉が出てきません。ごめんなさい。めだかちゃんばりの広い心で許してください。お願いします。

ところで、ようやくこの話を最終回までまとめることができました。あとはそれに向かって書いていくだけになったので、他の連載共々、なんとかチマチマ更新していくことができそうです。ですので、これから蛭の作品をよろしくお願いします！

ではまたー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3561p/>

地獄な少女とその他大勢の日常物語

2011年7月19日10時33分発行